

ISSN 0914-0220

研究紀要

第 33 号

令和 2 年 3 月

真野
一
雄
教
授
退
職
記
念
号

日 本 大 学 通 信 教 育 部



真野一雄先生近影

献呈の辞

日本大学通信教育部長 川 又 祐

真野一雄先生は、日本大学文理学部英文学科卒業後、日本大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程入学・修了されました。そして一九八三年に通信教育部助手として採用され、二〇〇九年に教授に昇格されました。真野先生は、定年を迎えられた二〇一八年以降も特任教授として通信教育部に多大な貢献をしていただきましたが、二〇二〇年、その任期を終えられました。ここに御礼を申し上げます。

真野先生は在職中、主に「英文法」、「英語学概説」、「英語史」の授業を担当されてきました。真野先生は、なかでも英語史を専門とし、研究されております。特に『パストン家書簡集』における英語語法に関心を持たれ、探究を継続しておられます。『パストン家書簡集』とは、十五世紀イングランド北部ノーフォークのジェントリ階級の一族パストン家の人びと、彼らの友人、知人によって書かれた書簡集です。内容は家族及び家政上の問題、訴訟や商取引についてであり、政治的意味合いや文学的虚飾はほとんどありません。いわば市井の人びとによる「普通」の書簡集ですが、当時を知るための重要な資料としての評価は揺るぎないものです。十五世紀のイングランドといえば百年戦争の末期からバラ戦争までであり、乱世の時代といえましょう。『パストン家書簡集』を読めば、当時人びとがどう身を処したのか、風習、生活様式、倫理観、人の息吹までもが身近に感じられます。ただし、書簡集はチャオサーの中英語とシェイクスピアの初期現代英語の中間に位置すると思われる英語で書かれており、読解にはかなりの忍耐力が必要です。真野一雄先生は静かにそして着実に書簡集を丹念に読み、その成果を、“Do in the Paston

Letters" (1999)をはじめとする数々の論考にまとめられました。研究結果をせっかちにすぐ求める現代において、真野一雄先生の粘り強い御研究の成果は先行研究として学問的に評価されるのはもちろんのこと、先生の誠実なお人柄そのものが反映されているといえます。

真野先生は、教授そして特任教授としての任期は終えられましたが、引き続き通信教育部の教壇に立っていただけることになっております。今後も学生の教育・指導に情熱を傾けてくださるとともに、私たちを導いてくださることと存じます。最後に、あらためて真野先生の通信教育部へのご貢献に心から感謝の意を表したいと存じます。そして『研究紀要』第三十三号を退職記念号として真野先生に献呈させていただきます。

二〇二〇年三月吉日

真^ま

野^の

一^{かず}

雄^お

教授

略歴

真野 一雄 教授 略歴

学 歴

昭和二七年五月二九日 東京都足立区で出生

昭和四六年 四月 日本大学文理学部英文学科入学

昭和五〇年 三月 日本大学文理学部英文学科卒業

昭和五三年 四月 日本大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程入学

昭和五五年 三月 日本大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程修了

昭和五五年 四月 日本大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程入学

昭和五八年 三月 日本大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

職 歴

昭和五一年 三月 日本大学文理学部（英文学研究室・実験助手）

昭和五八年 四月 日本大学短期大学部（習志野校舎）非常勤講師

昭和五八年 六月 日本大学通信教育部助手

昭和五九年 四月 聖徳学園短期大学非常勤講師

昭和六〇年 七月 日本大学通信教育部講師（専任扱）

昭和六〇年 十一月 日本大学経済学部兼任講師

昭和六一年 七月 日本大学通信教育部専任講師

昭和六三年 四月 日本大学文理学部兼任講師

平成一四年 四月 日本大学通信教育部助教授

平成一九年 四月 日本大学通信教育部准教授（教員組織變更に伴う名称變更）

平成二一年 五月 日本大学通信教育部教授

平成三〇年 四月 日本大学通信教育部特任教授

平成三〇年 四月 日本大学文理学部非常勤講師

所属学会

日本大学英文学会、日本中世英語英文学会

真^ま

野^の

一^{かず}

雄^お

教授

主要著作目録

真野 一雄 教授 主要著作目録

一 著書

『ABCの本』 オレハン・ボロ

昭和五九年

Studies in the Language of the Paston Letters ALA 出版

平成二一年

二 学術論文

Impersonal Verbs in the *Paston Letters*

日本大学英文学会『英文学論叢』第31巻 昭和五八年

Reflexive Verbs in the *Paston Letters*

日本大学通信教育部『桜信論叢』第3号 昭和五九年

Gerund in the *Paston Letters*

日本大学通信教育部『桜信論叢』第4号 昭和六〇年

Relative Pronouns in the *Paston Letters*

日本大学英文学会『英文学論叢』第33巻 昭和六〇年

A Study on the Inflectional Endings of the Verbs in the *Paston Letters*

日本大学通信教育部『桜信論叢』第5号 昭和六一年

On 3rd Person Singular Present Indicative -s in the *Paston Letters*

日本大学通信教育部『研究紀要』第3号 平成 一年

英和辞典における文型表示法についての一考察

日本大学通信教育部『研究紀要』第8号 平成 七年

英英学習辞典における文型表示法についての一考察

日本大学通信教育部『研究紀要』第9号 平成 八年

Do in the *Paston Letters*

日本大学通信教育部『研究紀要』第11号 平成一〇年

Do in the *Paston Letters* (2)

日本大学通信教育部『研究紀要』第12号 平成一一年

Impersonal Verbs in the *Paston Letters* (2)

日本大学通信教育部『研究紀要』第16・17合併号 平成一六年

On 3rd person sg. pres. ind. -s in the *Paston Letters* (2)

日本大学通信教育部『研究紀要』第19号 平成一八年

Gerund in the *Paston Letters* (2)

日本大学通信教育部『研究紀要』第20号 平成一九年

Accusative with Infinitive in the *Paston Letters*
Plural Endings in the *Paston Letters*
Reflexive Verbs in the *Paston Letters* (2)
母音表記法に つ づ くの 一 考 察
Plural Endings -n in the *Paston Letters*
Do in the *Past-on Letters* (3)

日本大学通信教育部『研究紀要』第21号 平成二〇年
日本大学通信教育部『研究紀要』第22号 平成二一年
日本大学通信教育部『研究紀要』第24号 平成二三年
日本大学通信教育部『研究紀要』第25号 平成二四年
日本大学通信教育部『研究紀要』第27号 平成二六年
日本大学通信教育部『研究紀要』第29号 平成二八年

目次

献呈の辞……………	川 又 祐……………1
-----------	-------------

【論文】

現代によみがえる三木露風と『山崎新聞』……………	近 藤 健 史……………13
〈うわさ〉に縛られる六条御息所……………	高 田 智 之……………13
	木 村 一……………39

【研究ノート】

寛文期における長崎唐人と地役人に関する覚書 ―「唐通事会所日録」所収記事から―……………	鍋 本 由 徳……………55
--	----------------

【査読付論文】

<i>Ulysses</i> (1922) 第7挿話 “Aeolus” の「見出し」について ―テキスト、解釈、影響―……………	猪 野 恵 也……………1
中華人民共和国建国後、鄭州に留用された人びとと日本人中学校……………	堀 井 弘 一 郎……………17

【論文】

戦時上海における内山完造 ―内山完造の〈グレイゾーン〉問題を中心に―……………	高 綱 博 文……………43
---	----------------

現代によみがえる三木露風と『山崎新聞』

近藤健史
高田智之

一、はじめに

三木露風の生誕一三〇年を迎え、露風が作品を寄稿していた『山崎新聞』が発掘された。この地方新聞は、公的機関などに創刊号から終刊までまとめて保存されていなかったこともあり、未公開のまま埋もれていた。

三木露風は、「忘れられた詩人」や「活躍は大正十五年までで、この年をもって第一線を退いた」と評され、その後の作品は注目されず近代文学史から忘れ去られてきた。ところが、詩壇から離れた一九二六（大正十五）年以降も七十六歳で没する一九六四（昭和三十九）年まで、三十八年間もの長きにわたり創作活動が続けていたのである。この『山崎新聞』には、露風の大正十五年以降の作品が一九二七（昭和二）年六月六日から一九三〇（昭和五）年十二月二十一日まで寄稿されている。紀行文・随筆・詩・短歌・俳句などが数多く掲載されていて、『山崎新聞』が初出と思われる作品も多い。また、今までは少し違った詩人露風も垣間見ることができるといえる。これまで露風と『山崎新聞』に関しては、寄稿していたという紹介的なものはあったが、全体像やその作品内容などについて十分な

検討はされていなかった。また、大正十五年をもって第一線を退いたと評され、詩壇外の詩人、時代からも孤立したかに見える露風の人と作品について、どのように位置づけ評価するのか、大きな課題である。そこで露風に関する未公開作品や資料を整理し、作品とその創作活動を検証することで、「大正十五年以降の露風」の再評価をする必要がある。

本稿は、その第一段階として、露風が寄稿していた『山崎新聞』の実態や特徴について明確にし、そこから見た「大正十五年以降の露風」という詩人を顧みると同時に、大量に残された作品の全体像を明らかにするものである。

二、今、よみがえる『山崎新聞』

1、『山崎新聞』の概要

『山崎新聞』は一九一五（大正四）年八月三十一日から一九三九（昭和十四）年五月二十五日まで、兵庫県宍粟郡山崎町（当時、現宍粟市山崎町）で発行された。その一部は町立図書館（当時、現宍粟市立図書館）で閲覧できた時期もあったが、大半が散逸した状態であった。ところが、二〇一七（平成二十九）年に一九一五（大正四）年

の創刊号から一九二九（昭和四）年まで、全発行号数の半分近くが製本された形で創刊者の親族の家の蔵から見つかった。一方、宍粟市立図書館内でも一九三〇（昭和五）年以降の傷みの激しい未製本の『山崎新聞』が眠ったままになっていることが確認された。これにより、合わせて九割以上が揃い、二〇一九年十二月現在、宍粟市でデジタル化が進められている。

当時の小地域の新聞が完全に近い形で現存していること自体、専門家によると稀なことだという。『山崎新聞』の発掘に関わった一人として、全体を読み通した。第一次世界大戦から日中戦争を経て太平洋戦争前までの宍粟郡の人々の暮らしが活写されていた。生ニュースは、当時の通信事情もあり、ほぼ宍粟郡内で発生したものに限定されている。町のうわさを面白おかしく書くなど、現代で言えば、娯楽性の強い週刊誌的な要素もある。この点、明治時代に『小新聞』と呼ばれたタブロイド判大衆紙の「のぞき見趣味」的要素を残している。

だが、創刊の辞などで、創刊者が新聞は「社会の木鐸」と述べているように、一方ではジャーナリズムの精神も發揮しており、硬派の政論記事も少なくない。また、文芸の育成、普及にも力を入れている。特に一九二七（昭和二）年から一九二九（昭和四）年にかけては、兵庫県揖西郡龍野町（当時、現たつの市龍野町）出身の詩人、三木露風の紀行文、随筆、詩歌などを一面トップに、同一紙面に地元文壇の詩人、歌人の投稿作品を掲載した。こうした点については、明治時代に『大新聞』と呼ばれる知識階級を対象にした政論主体の高級紙の影響を受けているとみられる。大正から昭和初期にかけて発行された『山崎新聞』は、明治時代の『大新聞』と『小新聞』の

両方の特徴を併せ持っていると言える。

山崎新聞社の所在地は、山崎町ノ内山崎町九十九番屋敷である。初代の発行兼編集人は山下駿治（在任期間…一九一五年八月三十一日～一九二四年六月二十六日）、二代目は山下郁三（在任期間…一九二四年七月一日～一九三一年三月一日）、三代目は本條俊一（在任期間…一九三一年五月二十一日～一九三九年五月二十五日）。月三回発行で、一九一七年発行の『宍粟郡案内』（赤堀天泉編、宍粟郡協賛会）によると、一回の発行部数約千二百部（創刊時）、ページ数は四ページ。町議会選挙の結果を号外で報じることもあった。ちなみに、一九一七年当時、宍粟郡の人口は約六万一千人、うち同町の人口は六千人余。山崎町に関する話題、広告が多いことから、購読者は同町在住者が中心だったとみられる。

山下駿治は一八八一（明治十四）年八月六日、山崎町で江戸時代の一六七三（延宝元）年開業の薬種商「あわや」の長男として生まれた。本人の『軍隊手帳』によると、一九〇四（明治三十七）年、日露戦争が始まり、清国へ出征し、遼陽の会戦（一九〇四年八月）で負傷した。「あわや」について、『宍粟郡案内』は「郡内にて『あわや』と言えば、三尺の児童も知らざる者はなく、『あわや』の商号を『くすりや』の代名詞となれる程の信用を博せり」と紹介している。「あわや」は大手紙、地方紙の取次販売も行っていた。『宍粟郡案内』は扱っていた新聞として、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、神戸新聞、神戸又新日報、鷺城新聞、東京各新聞を挙げている。江戸時代から代々続く老舗の薬屋の若旦那であった山下は、自らも新聞を発行、編集人としても社説やコラムなどで筆を揮った。郡内に通信員を何人か配置していたことが、掲載した募集広告でうかがえ

る。山崎町以外の出来事は通信員が取材していたようだ。

2、創刊の辞と発行の動機

一九一五（大正四）年八月三十一日付の創刊号で、『山崎新聞』は一面トップに次の『創刊の辞』を掲載した。

「……独立せる山崎新聞を創刊し、……新聞は社会の耳目にして亦木鐸なりとは人口に膾炙せるところ其の勢力の偉大なる能く輿論を喚起し個人を活殺するに足るべし。山崎新聞僅に月三回の発行に過ぎず加うるに微力なる吾人の筆は此大責任を全うするの最大難事なるを覚ゆ。吾人の筆素より小なり。然れども其の力は大なりと信ず。……他郡に比し万事平穩事勿れ主義にて押し通し……有耶無耶の間に葬り去るが故に進取啓発の氣風乏しく……吾人は余りに退嬰的事勿れ主義に甘んぜる郡民に今少しく進取的に活動せんことを望むなり……郡民が……活躍すべき方面は農事の改善、殖林、養蚕、鉱業、畜産、製材、製炭等、郡の現状に照らして将来尚計画し開拓するの余地多々あるべく……企画を定むるに方り郡民輿論の中心たるべき新聞紙の努力に期待するもの蓋し鮮少なからざるべし。我社が利益的打算を考慮せずして奮起したる意義実在に茲に存す。而して政党政派に関する方針は不偏不党公明を経とし正大を緯とし忠実穩健なる主義思想を以て実践躬行地方啓発の一端に資せんとす……諸君願わくば吾人を督励援助して……」

山下は創刊の辞で、「新聞は社会の耳目にして亦木鐸なり」と

ジャーナリズム精神を謳い上げ、「他郡に比し万事平穩事勿れ主義にて押し通し……有耶無耶の間に葬り去るが故に進取啓発の氣風乏しく……吾人は余りに退嬰的事勿れ主義に甘んぜる郡民に今少しく進取的に活動せんことを望むなり」と発行の動機を述べている。その上で、郡民に対して「活躍すべき方面は農事の改善、殖林、養蚕、鉱業、畜産、製材、製炭等、郡の現状に照らして将来尚計画し開拓するの余地多々あるべく……」と進むべき方向を具体的に指示している。同時に、「政党政派に関する方針は不偏不党公明を経とし正大を緯とし忠実穩健なる主義思想を以て実践躬行、地方啓発の一端に資せんとす」と述べ、率先してその任務を果たすと表明した。

当時、日本は日露戦争に勝利し、第一次世界大戦では日英同盟の下で、ドイツの根拠地、中国の青島を陥れるなど、対外政策が積極性を増し、国力も増大していた。また、国内では大正デモクラシー運動が展開され、自由主義・民主主義的風潮が高まっていた。こうした中、山下は「それに比べ、この宍粟郡の状態は何だ。これでは世の中の動きに取り残される」と言いたかったのではないか。時代背景も新聞発刊を後押ししたと言える。郡内とその周辺の業界はもちろん、役所も『祝山崎新聞創刊』と銘打った広告を出した。芸妓とその土地の出先（待合・料理屋など）をつなぐ連絡事務所である検番「山崎旭検」の広告は、所属する芸妓全員の名前で一ページを埋め尽くした。郡民挙げて山崎新聞の「船出」を祝った様子が見える。

3、創刊五周年と創刊十五周年

一九二〇（大正九）年九月十一日付の『山崎新聞』（第一八三号）は一面で祝創刊五周年特集を組み、大阪毎日新聞内国通信部長、神戸新聞社長らの祝辞を掲載した。大阪朝日新聞社長も名を連ねた。大阪毎日の内国通信部長は「都会における大新聞の必要なるが如くに地方的の小新聞も必要であります」と前置きし、「山崎新聞は地方的の小新聞として健全な発達を遂げて第5周年となったのは、その地方の人々が山崎新聞の必要を認めている何よりの証拠です」との賛辞を贈った。神戸新聞社長は「今や国を挙げて改造の途上であり、記者と云はず、経営者と言はず、苟も身を新聞紙に託して、志を伸べんとするもの、深く時運を案じ、世務を考量し自家の主張を推敲して世論を嚮導し依って以て文化向上の一路を開くに至らば、亦新聞経営者の欣喜快事たらん。而して是れ実に同業者が社会奉仕の唯一の道たり。山下君夫れ努めよ」と激励した。いずれも、新聞の権威と責任の重さを説いている。山下の地元有力紙、大新聞幹部との関係は、志を同じくする新聞人としての交流を通じて培われたとみられる。

一九二四（大正十四）年七月一日、『山崎新聞』の発行人兼編集人は山下の実弟、郁三に代わった。一九三〇（昭和五）年八月十一日の創刊十五周年の記念号（第七七六号）で、郁三は「創刊十五年を迎へて」と題する社説を一面トップに掲載した。要旨は次の通りである。

「▼大都市の二、三の大新聞を除き、全国の幾千の新聞社が政党、財閥の背景援助なくして新聞の経営は難事中の難事。

▼この難事業を我社が独立独歩、敢然として何らの掣肘も受けず圧迫も蒙らず今日在るを得たのは全く愛読者諸彦と広告援助者各位の熱烈なる郷土新聞愛護の賜ものに外ならずと常に我社同人の感謝しているところである。▼前社長の主義方針を確守し、奇矯をさけて穏健に、極端より中庸にと過去十五年を経過したが、この方針が進みたい。この方針、この主義が世道人心に何ものかを寄与しつつありと確信するものがあるからである。▼新聞の使命は社会の暗黒面暴露や個人の私行摘発を以て能事とするものではなく斯くの如き記事を満載して読者を吸収したのは既往の陋劣なる販売政策で現今では世に調所悪徳を以て任ずる新聞以外には見出せない▼新聞は社会の木鐸とか耳目とか言われていたが、今は国家社会或いは地方の公的機関と称されて来たからは決して其の社、其の新聞の独占専横を許されず社会と共に読者と共に明るき正しき愉快味に満ちたものに進めねばならないのである。▼公的事业である新聞経営も採算を離れては一日も成り立つことはできない。深刻な不景気のドン底に直面せる今日ではあるが、本紙の記念号発行に対しては愛読者及び広告援助者各位層一層の同情を垂れたまい郷土唯一の山崎新聞の前途に光明を与えられんことを切望する次第であります」

一面の中央に「実践躬行」のスローガンを掲げ、自ら社説の内容を実践することを表明した。社説では、前社長の「新聞は社会の木鐸」との編集方針を引き継ぎながらも、「今は国家社会或いは地方の公的機関」と述べ、「新聞の独占専横を許されず社会と共に読者

と共に」と、新聞の社会の公器としての役割をより強く前面に押し出した。その上で、「公的事業である新聞経営も採算を離れては一日も成り立たない」とし、「愛読者及び広告援助者各位層一層の同情を」と購読と広告の掲載を読者に呼び掛けた。特に興味を引くのは、「新聞の使命は社会の暗黒面暴露や個人の私行摘発を以て能事とするものではなく」と自らを戒めている点だ。ただ、『山崎新聞』は大衆紙的要素も「売り」にしており、「旅役者を追ふて カフェー 女給の家出」(一九三三年・昭和八年九月三日付) など、「のぞき見趣味」の記事も載せている。

4、更生の辞

一九三一(昭和六)年五月二十一日付の『山崎新聞』は一面トップに「更生の辞」を掲載、発行兼編集人が山下郁三から本條俊一に代わったと告げた。一九五七(昭和三十二)年発行の『播磨山崎篠乃丸公園と妙見堂』(前野佐吉)によると、本條は山崎町町会議員で同町の有力者である。「更生の辞」は「休刊を続けていた本紙は・・・此処に更生の第一声を挙げることとなった・・・」と述べ、『山崎新聞』が経営難に陥り、廃刊の瀬戸際にあったことをうかがわせた。詩人の野口雨情、兵庫県出身の政治家、清瀬一郎らが同紙の継承を喜ぶ祝辞を寄せている。「更生の辞」は書き出しで、小規模新聞の限界を嘆いている。新聞の使命は速報にあるが、『山崎新聞』は旬刊であるため、その使命を果たすことができない。来月から週刊にする予定だが、それでも、スピード時代の現代に適合するとは言えないと述べた。だが、「・・・然し新聞の使命は単に社会の状態を忠実に報道する事のみであろうか?」と問い掛け、「否寧ろ社

会の善良なる指導、輿論の公正なる木鐸として終始することにより存在価値を有するものではあるまいか」と、事実の速報だけが重要ではない、と続ける。その上で、「・・・宍粟郡における唯一の公器である山崎新聞は例え小さき紙面ではあるにせよ、郡民一同の輿論を代表し、意思を代弁する機関でなければならぬ・・・本紙は従来守りし来たった公正無私、穩健着実の方針を持続すると共に、地方的色彩を發揮するに力め、記事の集輯、編輯の意匠に清新の氣を加えて江湖の期待に背かざらん事を期す・・・」と述べ、従来の編集方針を維持しながら、地方的特色を出すため、工夫し世間の期待に応えたいと決意を新たにしている。

5、記事に見る時代ごとの『山崎新聞』の特徴

(一) 第一次大戦中の一九二五(大正四)年から大戦終了期

(1) 大正天皇即位大典祝賀行列奉祝準備

一九一五年十月六日付の同紙は、大正天皇即位(十一月十日)の祝賀行列で町は芸妓の流しを催す準備を進めていると報じた。「官女姿にて三味、太鼓、鼓囃し入りにて流し・・・『万歳』の奉祝替唄を舞う・・・」とその内容を紹介した。当時、日本は造船、生糸輸出などの戦争特需による好景が続いており、記事は当時の明るい社会の雰囲気伝えてる。

(2) 家庭会の創立

一九二〇(大正九)年三月、女性の社会的・政治的地位の向上を求めて、平塚らいてう、市川房江らにより新婦人協会が結成され、婦人・母・子供の権利を主張した。山崎町でも母親が初めて意識的に子供のことを中心に考えて行動を起こした。

一九二〇年五月十一日付の同紙は山崎町の母親が発表した「山崎校家庭会趣意書」を掲載した。趣意書は「・・・国家の浮沈盛衰は一つに子女教育の盛衰にあり、・・・主として家庭殊に母の手にありとすれば母の任務の重大を感じられます。・・・先進国や進歩せる都市に於いてはこの種の会合が盛んに出来て、・・・と述べている。

(3) 関東大震災ルポ

関東大震災（一九二三年九月一日）について、九月二十六日付で東京在住の山崎町出身者が山崎新聞社に宛てた手紙を掲載している。九月十二日消印で同十八日着の手紙は、次の通りである。

「当時小生は日本橋の勤務先二階に於いて電話で話し中俄然急激な震動起こりメリメリと物凄き家の壊れる音響に驚き表口に飛び出したが丁度その時二頭の馬が狂奔してくる未設の水道大鉄管が手鞠の如く転び廻る家屋や土蔵の倒れる土煙は濛々として天を覆い・・・各所に火災が起こる殆ど連続的に起こる激震のため歩行すら困難であった・・・警報は自転車隊により続々伝え来たり強震の予報に次いで〇〇〇〇の〇〇〇〇〇〇各所に〇〇等の報に接し何れも戦々恐々・・・今日尚大道りや大川以外に死体累々たる有様で三百年の歴史を持つ帝都は全く一日の間に灰燼に帰した・・・」

○印の伏字部分は、自転車隊が「強震の予報に次いで」伝えたとあり、続けて「いずれも戦々恐々」と手紙は述べている。手紙の通りに明記すれば、社会の混乱を煽る恐れがあったため伏字にしたと考えられる。「社会の善良なる指導、輿論の公正なる木鐸」「更生の辞」を旨とする山崎新聞の良心を示した形だ。地震と火災の大

混乱で、「朝鮮人が暴動を起こした、放火した」との流言が飛び交ったが、伏字の箇所がこれと関係があるかどうかは不明である。

(二) 昭和期

(1) 満州事変

昭和に入り、戦争の影が忍び寄る中、戦争関連の記事が増えていく。この時代のリアリティを感じさせるのは陸軍幹部による時局講演会の予告記事である。満州事変勃発の九月十八日から六日後という早さだ。一九三一年（昭和六）年九月二十四日付の『山崎新聞』は「中島中将講演 満蒙と国防に関して」との見出しで、「満州の野に戦端が開始されて全国民の関心を集めつつある時来る二十九日、山崎小学校に於いて・・・陸軍技術界の権威、中島中将が來郡満蒙と国防なる題下に軍事講演せられる筈で非常なる盛況を呈するであろう」と伝えた。

(2) のどかな田舎の風景

世界恐慌（一九二九年）が昭和恐慌を呼び、不況、失業などで、漠然とした不安が蔽う都会と比べ、田舎では都会ほどの深刻さはこのころの記事からは感じられない。「稲作もまずまず 祭太鼓の音ひびく 近づいた秋祭り」（一九三一年十月三日付記事の見出し）「スポーツの秋！ 壮快な運動会」（同）。同紙が伝える高等小学校の秋季運動会のプログラムには「決死戦」「血戦」「撃滅」といった勇ましい競技名が並ぶが、戦争に備えるという差し迫った状況ではなく、のんびりムードが漂う。

(3) 戦時色濃厚に

(ア) 労作歌に帰れ

しかし、一九三二年（昭和七）年に入ると、前年の満州事変に続いて、

第一次上海事変が起き、記事にも戦時色が濃厚になる。同年一月一日付同紙は「流行エロ小唄を捨て 郡民よ労作歌にかへれ」との見出しで読者の投書を紹介した。「・・・バーを廃せよ。流行エロ小唄を捨てて吾等の祖先、郷土の生んだ古謡を歌へ・・・」と呼び掛ける投書は、薦めるのは労作歌だとして、田植唄、耨摺唄、嫁入唄、米搗き唄、石つき唄、白挽き唄、糸紡ぎ唄、豊年おどりといった「地唄」を挙げた。記事からは、このご時世、芸者風情が甘ったるい声で歌うのはけしからんとの不満が読み取れる。逆に暗い世相だからこそ、流行小唄は庶民の楽しみだった面もうかがえる。

(イ) ジャズが消える

また、「この頃目につく 街頭の軍国風景」「流行に、趣味に、色に、音にすべて時代の相」の見出し（一九三二年三月十八日付）で、上海事変の挿話の一つ、「爆弾三勇士」が映画、演劇、レビュで大流行し、ファッション分野では鉄兜型の少女の帽子が流行していると伝えた。さらに、書店の書棚は満洲問題を扱った雑誌で溢れ、「軍神古賀聯隊長」「太平洋問題」「深み行く日米の危機」が飛ぶように売れ、子供のおもちゃも「ゼンマイで回転する高射砲、タンク、装甲自動車、飛行機等が盛んに売れ、男の子は勿論女の児までが着物に上等兵の肩章をつけて得意がっているのは、独り山崎町のみならず山奥にも浸透している街頭風景の一つである」と報じている。同紙は「甘ったるいジャズ、リング映画主題歌を圧倒して蓄音機店の飾窓を埋めてしまったのは新発売の軍歌レコードのポスター・・・」とも伝えた。ジャズなど「米英音楽の追放」の実施要項が情報局編集『週報』（三二八号）で発表されたのは、日米開戦間もない一九四三（昭和十八）年一月二十七日。山崎町では情報局の追放発

表より十年早くジャズが店頭から姿を消している。田舎の方が都会に比べ、お上の意向に忠実、疑いを持たないということだろうか。

(ウ) 女学校の入学試験は満洲事変から出題

県立山崎高等女学校の入学試験は満洲事変に関するものから出題された（一九三二年・昭和七年四月三日付）。満洲事変のため満洲に出征する兄についての文を読ませた上で、満洲事変勃発の理由、日本と満洲の貿易、姫路から奉天（現遼寧省瀋陽）までの所要時間を問うた。満洲事変は関東軍の謀略によって起こされたが、中国軍のしわざだとされ、当時、国民は真相を知らなかった。

(エ) 学校教育にも事変の影響

満洲事変から盧溝橋事件（一九三七年・昭和十二年七月七日）を経て日中戦争に入っていく中で、教育も大きな影響を受けた。子供たちは出征兵士宛に慰問文を書かされた。

「感謝」と題する高等小学校一年の児童の作文（一九三八年・昭和十三年一月一日付）の概略は次の通りであり、当時は誤った教育が行われていたことが分かる。

「戦争をしておられる兵隊さんありがとう。心から感謝いたします。今支那の少年達はお父さんが何時死なれたやら、兄さんが何処へ行かれたか分からないことだろう。自国の兵隊に食べる物や道具をさらわれ、税を沢山取られたりして大変な事だろう。・・・此の頃は毎日の如く支那は退却退却で日本軍におしめられていますね。それを聞くと僕は飛びたつ思いです。思わず日本軍万歳を叫ばずにはいられません。亦支那兵が足に鎖をつけられ、くいにくくられて戦い

をしていると聞いている日本国民は幸福だと思わない事はありません。・・・」

(オ) 前線の兵士から陣中便り

一方、「日本刀の切れ味」との見出しで、「南京攻撃に武勇を揮った」(一九三八年一月二十五日付) 郷土出身兵士の陣中便りも紹介している。

6、廃刊の挨拶

日中戦争の発端となる盧溝橋事件が起き、翌一九三八年(昭和十三年)四月には国家総動員法、同八月に新聞用紙制限令が公布された。『山崎新聞』も発行停止に追い込まれ、一九三九年(昭和十四年)五月二十五日、「廃刊と更生の御挨拶」を掲載、山崎新聞二十五年の歴史に幕を閉じた。

「長期経済戦は愈々深刻化してきましたが、今回全国的に地方新聞が統制せられることになり、二十余年の永い伝統人を持つ山崎新聞も本号を以て廃刊光輝ある歴史の幕を閉じることになりました。多年の御厚誼を深謝致します。改めて『播磨合同新聞』の旗幟の下に六月中旬から組織を改組し陣容を拡充し、更に筆硯を新たにして読者諸彦の知遇に酬いたいと存じます。昭和十四年五月下旬山崎新聞社」

この中で、『山崎新聞』の『播磨合同新聞』への吸収が示唆されているが、『播磨合同新聞』の存在は確認されていない。

三木露風の作品の掲載は一九二七(昭和二年)六月から一九三〇

(昭和五年) 年十二月まで続いた。発行兼編集人が本條俊一に代わってからは、寄稿はない。『山崎新聞』への寄稿について、露風は「山崎新聞社の山下郁三君とは龍野中学時代に同級であった。又郁三君の令兄駿治君からは先日其妹さんの事について手紙を寄越されたりして親しい関係もあるので、今度この文を寄稿する事にした」と、一九二七(昭和二年)年六月六日付紙面で述べている。『山崎新聞』という地方の小規模新聞への露風の大量寄稿の背景に親密な人間関係があったことが分かる。また、山崎町と露風の出身地、龍野町は兵庫県の南西部を流れる揖保川沿いにあり、風土を同じくし、露風にとっては、山崎町も「ふるさと」との親近感も寄稿につながった要因の一つと言えるかもしれない。

ちなみに、一九八九(平成元)年発行の『播磨の100年』(神戸新聞姫路支社編)や二〇一九(平成三十一)年発行の『山崎郷土会報』(二三三号、山崎郷土研究会編)などによると、大正から昭和初期にかけて、山崎町では山崎新聞以外に、地方紙の神戸又新日報、神戸新聞、小地域新聞の鷺城新聞(姫路)、龍野新聞(のちに西播磨新聞と改名)、山崎民報、山崎タイムス、播磨民報山崎付録、中国日日新聞(鷺城新聞と播磨民報の合併により誕生) 宍粟附録などが販売されていた。

また、一九六七(昭和四十二)年発行の『兵庫県百年史』(兵庫県史編集委員会編)によると、一九二二(大正元)年、八十三紙あった兵庫県下の新聞は、一九二六(昭和元)年には、二百五十六紙と約三倍に増え、その五、六十%が神戸で発行されていた。神戸以外の小地域の新聞は一九二六年、約六十紙に上った。一九五六(昭和三十一年)年発行の『地方別新聞史』(日本新聞協会編)によると、

太平洋戦争前（一九三九年から一九四一年）の新聞統制で県下の新聞は一般紙一、業界紙一に減少。戦後、統制の撤廃で、新興紙の発刊、廃刊紙の復刊が相次ぎ、戦前に近い数に戻った。山崎新聞も「昭和二十四年に再刊した」と、一九七七（昭和五十二）年発行の『山崎町史』（山崎町史編集委員会編）は述べているが、一九三九（昭和十四）年に廃刊を宣言した『山崎新聞』とは、どのような関わりがあるのかは明らかにっていない。

三、忘れられた露風・よみがえる露風

三木露風は、意外と知られていない。北原白秋と並んで明治末期に「白露時代」を築いた詩人と答える人は少ない。象徴詩を提唱した露風は、現代の人々に忘れられている。童謡「赤とんぼ」の作詞者として記憶されているが、その詩作に触れる人は限られている。書店で購入し、手軽に読むことができる文庫本にしても、『三木露風詩集』（新潮社）、『日本の詩歌』（中央文庫）、『日本童謡集』（岩波文庫）くらいである。

小・中学生においても、露風の作品を読む機会は少なくなっている。露風作品の教科書掲載は、かつての勢いはなく、近年のほとんどが「赤とんぼ」である。例えば小学生用では、『国語 銀河5上』（光村図書、二〇一七年）に「晴間」が掲載されていたが、『こくご 二下』（光村図書、二〇二〇年用）には「赤とんぼ」に替わっている。中学生用では、『現代の国語3』（三省堂、一九八七年）で「ふるさと」が掲載されていたが、二〇一〇年頃には露風の作品は掲載されなくなった。「赤とんぼ」は、音楽の教科書に長く掲載され、現在

でも継続している。例えば、『小学校の音楽5』（二〇二〇年用、教育芸術社）に「赤とんぼ」が「詩と音楽を味わおう」の領域に掲載され、中学では『中学の音楽1』（二〇一六年、教育芸術社）に掲載されている。このような現状も、露風と言え「赤とんぼ」というイメージが定着している一因と言えよう。

かつて、露風に対して厳しい批評があった。象徴詩人としての露風に対する批評は、「忘れられた詩人」や「大正十五年をもって第一線を退いた」というものである。窪田般弥は、「つねに白秋と並称されてきた露風氏の詩人生命は大正五、六年頃で終わる。……以後歌人として、小唄作者としてジャーナリズムに迎えられる。そして露風氏は、孤独な宗教的な世界に入り、次第に忘れられていった」と評している^{注1}。また、佐藤房儀は、「活躍は、大正五、六年で終わり、それ以後は詩壇の第一線から退いたと見られている。……以後の露風は宗教詩人となり、作品の魅力に於いて乏しく、詩壇を離れた処で創作を続けたと理解されている。……彼の活躍は大正十五年までで、この年をもって第一線を退いたといえる」と否定的な評価をしている^{注2}。

当時の輝かしい名声に対して、あまりにも淋しい評価を与えられていたのである。その否定的な評価の原因や理由について、中島洋一は「露風文芸の現代人に訴える要素」と「象徴主義の実態の捉え難さ」の問題をあげている^{注3}。また、露風の作品について佐藤房儀は、「過去の詩人」であり「明治の詩そのまま戦後にもたらしたような作風だった」と述べて、新しい時代に受け入れられなかったことと指摘している^{注4}。さらに、窪田般弥は、『虚間の幻影』を刊行した一九二〇（大正九）年頃には、「自負と確信をもって、繰り返し語る『象

徴主義』はいちじるしく観念的となり、感情は涸れ、詩語はみずみずしさを失っていた」と、新鮮さを失っていたことを述べている。^{注5}

露風が忘れられていった要因は、他にもいくつか考えられる。例えば、「中央における活躍期間の短さ」がある。露風は「早熟な詩人」と言われるように、十七歳で最初の詩歌集『夏姫』、二十歳で代表作の詩集『廃園』を出版して、詩壇に確固たる地位を築いた。しかし、その後は「詩壇から離脱」していく。旧新詩社系と自由詩系の詩人たちが反目し、北原白秋と三木露風が詩壇の中心になり始めたころ、彼らの下に派閥が生じる。そして萩原朔太郎の「三木露風一派の詩を放逐せよ」で有名な詩壇論争が、一九一六（大正五）年から一九一八（大正七）年まで二年間にわたって続けられた。この頃から露風は、しだいに詩壇から離れていくのであった。そして露風の象徴詩や詩論は、徐徐に理解されなくなるのである。

また、大正期になり露風は積極的にカトリックに近づき、当時の日本では数少ない「宗教詩人」と呼ばれるようになったことも要因であろう。露風の作品は、時を経るに従いカトリックの影響を受けた詩が多くなる。そしてカトリックという特殊な世界に入り、やがて象徴主義詩人としての活動を終え、求道的、神秘的な宗教詩の世界に生きることになる。一九二〇（大正九）年五月から一九二四（大正十三）年までトラピスト修道院付属の学校講師として赴任することで、信仰は深まり一段と詩壇から遠ざかるのである。修道院を辞して上京した後は、宣布者であるかのように各地に出かけ、カトリックにおける講演活動を精力的に行った。

さらに、まるで集大成のように「大正十五年に多くの著書を出版した」ことも要因と考えられる。一九二六（大正十五）年には、歌

集『トラピスト歌集』（六月）、詩集『神と人』（七月）・『三木露風詩集』（十一月）、随筆『修道院生活』（二月）・『神への道』（七月）、童謡集『お日さま』（十月）・『小鳥の友』（十一月）の七冊を発行した。まだ三十七歳であった。その後は作品集の出版はなく、一九二八（昭和三）年八月の自叙伝『我が歩める道』と一九二九（昭和四）年三月の『日本カトリック教史』だけである。それ以降の作品は『三木露風全集』（昭和四十七年～四十九年）が刊行されるまで、まとめて読むことができなかった。また、全集に収録されない作品も埋もれたままであった。

三木露風という名を文学史上に刻み、いくつかの詩集を残しているが、このような要因により今日読まれなくなっていた。しかし、露風生誕一三〇年を迎えて発掘された『山崎新聞』には、第一線を退いたといわれる大正十五年の五月から六月にかけて岩手県、青森県、秋田県、山形県へと、東北の旅をしたことの紀行文「北日本の旅と自然と」をはじめ、一九三〇（昭和五）年までの露風の作品が掲載されているのである。その多くが、全集にも収録されていない未公開作品であることから貴重なものである。今回の発掘により、その意味で露風は現代にのみがえったと言えよう。また、生誕を祝うかのようにインターネット上の電子図書館である青空文庫において、露風作品の公開が始まった。さらには、若者に人気のゲームに露風が登場したのである。今日の若者たちの間に、露風はよみがえってきたのである。例えば、その兆しは次のようであった。

（一）二〇一七年五月六日、同人誌即売会「コミティア」にギャグマンガ『白露時代と山田くん』登場

(2) 二〇一九年五月二十二日、インターネットゲーム「文豪アルケミスト」に新文豪キャラクターとして露風が登場

(3) 二〇一九年六月二十三日、インターネット上の電子図書館「青空文庫」に「トラピスト天使園の童貞」が初公開

(4) 二〇一九年八月、オンラインコミュニティ「Pixiv」に小説『大和守安定と三木露風の濃厚プリン』（有坂海月）が投稿

現代の若者たちにおいては、象徴詩人というよりもメディア化、キャラクター化した露風がいる。若者たちは、小説などを読むときに、ストーリーではなくキャラクターを読む^まという。登場人物の性格、個性、特徴、持ち味に興味を持ち共感するのである。

前掲の(1)は、北原白秋、三木露風、山田耕筰が登場する学園風コメディの四コマ漫画である。詩人の二人と作曲家をめぐるストーリーであるが、詩や音楽とは離れたキャグ漫画である。三人は、現代的な美男子として登場する。

(2)の「文豪アルケミスト」は、女性のシュミレーションゲームである。平和な時代に突如として文学書の全ページが黒く染まってしまう異常現象が起きる。書物の世界を破壊する浸食者に対抗するために特殊能力者、アルケミスト（錬金術師）と呼ばれる者たちがこの世に転生する。文学書を守るため 文学の持つ力を知っている文豪をこの世に生き返らせ、文豪の力をもって戦わせるのである。彼らは、「僕たちが生きた証を消させはしない」と言う。露風は美男のアルケミストとして、新文豪キャラクターとして現代にのみがえったのである。ここで露風は「私は騎士の称号をいただきたい

ものとして、皆を導いてゆかなければなりません」というキャラである。実際に露風は、一九二七（昭和二年）三月にローマ教皇から勲四等の勲記・勲章（シュバリエ・サン・セブルクル）とホーリーナイト（聖墳墓騎士）の称号を受けている。

(3)の「青空文庫」へ初登場は、露風の誕生日六月二十三日であった。作業中の「白き手の獵人」など、今後続いて登場する。

(4)の「大和守安定」は、『刀剣乱舞』に登場するキャラクターである。『刀剣乱舞』は、日本刀の名刀を男性に擬人化した「刀剣男士」を収集・強化し、敵を討伐する刀剣育成シュミレーションゲーム・ブラウザゲームであり、ミュージカル化・舞台化・アニメ化・実写映画化と、メディアミックスされて人気である。露風は、「大和守安定」が濃厚プリンを食べるため作っているところに訪ねてきて手伝うというキャラクターとして登場する。この「プリンは正義」であり、多く作ったプリンは刀や文豪用であるという。

このように露風は、多様なキャラクターとして現代の若者たちの世界によりがえってきた。露風の作品を読んでいる若者たちも、これらのキャラクターに感情移入することで共感し、露風の詩歌に興味を持つに違いない。

四、『山崎新聞』から見える露風

1、北原白秋に対抗意識を示す露風

露風と白秋は、「白露時代」と呼ばれる一時代を画した。しかし、白露時代は、両者の対立の時代でもあった。当時、詩壇では、一九一七（大正六）年、白秋陣営が「三木露風一派の詩を放逐せよ」

と題する一文を雑誌に発表するなど、双方の門下生の間で、露風と白秋の優劣論が繰り広げられていた。

当の二人は、この論争に関して沈黙を貫き、無関心を装っていたと言われている。ところが、今回見つかった『山崎新聞』に掲載されている露風の文章には、わずかだが白秋への対抗意識も垣間見える。

『山崎新聞』には、一九二六（大正十五）年五月に東北を訪れた際の紀行文「北日本の旅と自然と」が五十九回にわたって連載されている。一九二八（昭和三）年三月六日付の「北日本の旅と自然と（四）」には、盛岡を訪れた際に地元の詩人から露風と白秋の優劣論について感想を求められたとあり、露風は「自分で自分のことは云われないよ」と答えている。また、三月十六日付けの同紙では露風の門下生である柳澤健が評論集『現代の詩及び詩人』（尚文堂、一九二〇年）で、露風を本質的詩人、白秋を偶然的詩人と断じたことについて問われ、「それは私に問うべきことではない」と言う。しかし、その一方で「白秋の詩を善いと思うか」という質問には「善いとは思ってゐない」と明言する。続いて、白秋門下の大木篤夫が一九二五（大正十四）年に出版した詩集『風、光、木の葉』（アルス）について、白秋の詩より良いとの見方もあるがと聞かれ、「大木君の詩は白秋君より成程よい」と述べ、白秋の弟子を褒めている。白秋への対抗意識が、ほのかに見えているのである。

2、自分の「詩の道」を松尾芭蕉の句で示す露風

三月十六日付け同紙には、盛岡のある詩人のさらなる質問が載っている。露風と白秋と一緒にするのは本質的詩人の三木先生に対する冒瀆と、文壇で議論になっていると水を向けられると、「一体ね、

詩壇は政界とは違うよ。詩人は、詩に終始すべしだね」と答えたところがある。詩人は、争いなどしないで、すべてをできるかぎり切り離して可能な限り、詩の創作に没頭しなければならぬというのである。そして自分の「詩の道」を松尾芭蕉の次の俳句で示している。

此の道や行く人なしに秋の暮れ

右は、芭蕉が亡くなる一か月前の作である。生涯を賭けて追及してきた俳句の道、いまは理解者が少ないが必ずこの道を辿ってくれる者が現れることを信じているというのである。露風は、文学の道を歩む自分の境遇と重ね、尊敬する芭蕉の生き方に共感して、詩人の道の孤独を「秋の暮れ」と超然と説いていたのである。

露風は、一九〇五（明治三十五）年八月二十日に上京する。間もなく歌壇雑誌『文庫』に投稿し、十一月（短歌十六首）、十二月（九首）と巻頭を飾る勢いであった。十一月十六日に友人の村田詩泉に「文壇の人として死ぬ」と、文学の道を歩む自信と決意を記した手紙を送っている。十七歳で上京しての決意は、大正十五年の三十七歳になっても変わっていないからである。

露風の詩人としての道は、険しいものであった。露風は、白秋派と露風派の二派に別れての詩壇論争にあつても直接的な反論はしなかったとされている。しかし、一九一八（大正七）年一月になり『詩歌』に発表した「表象活動の生活」と「閑語」に、論争を意識した詩論的文章を発表している。「表象活動の生活」では、「詩人としての生活態度の在り方について」「詩人は詩の上で、我を覚悟しなければならぬ。詩人にとって最も合理的で、また最も良い行為は、詩の中に己を打ち任すことである。すべての物を棄却して（若しさういふことが出来れば）直観と表象との関係に生きることが出来れば、

それが詩人としては、理想的な行為である」と述べている。^{注8} この世において人々は、「雑多なものに取り巻かれ」て生きていて、それ故に直観と表象との関係の中に「純全を妨げる諸相がわりこんで来る」という。その諸相のために「詩人の意識は分裂して直観生活に曇りを生ずる」と説いている。詩壇の論争も「雑多なもの」であり「直観と表象の関係を妨げる諸相」であると婉曲に言うのである。

同時掲載の「閑語」では、論争の当事者に対して今少し批判的な詩論を展開している。例えば「詩の事は概論ばかりしてゐたのでは仕方がない。この頃の論は概論で片付けて行かうとするやうな風があつて面白くない。詩を愛重するといふ風もこの頃では失はれて来てゐる」という。また「詩壇瞰望論などはよい加減にしたがよい。真面目な詩人のすることぢやない。流派を論ずるといふやうな事ですら權道だ。詩の一義は然ういふことではない。自分に関する批評も澤山讀んだ。一つも相手を尊敬さすやうな批評がない。・・・神經質は神經質でよい。考をもつと高めないとかかぬ。信念さへあれば、詩人は他人の事や流派を論じなくても、詩を作れる」と述べている。^{注9}

そして末尾に、露風の思ひを暗示させる熊谷武雄の短歌三首が掲載されている。熊谷は、この『詩歌』の創刊に参加し、同時に短歌結社「白日社」の同人でもあった。おそらく露風は、田園歌人として全国に名を馳せた熊谷の短歌に共感し、芭蕉の俳句と同様の手法を用いて、論争の当事者を暗に批判したのであろう。

さかしまに唐辛子つる柴戸口賤顔出し物いひにけり
小さき角ふりてにげしもあめ牛の小牛の鼻をなでんとよれば

山原の刈りそぎ萱根ふみならしかり人走る吹雪の中を

邪氣の侵入を防ぎながら物を言う賤しい顔の人、上等な牛だが、鼻を撫でようと近寄っただけなのに逃げてしまつた小さき角を有する小さな牛、すでに刈り捨てた萱根を踏み吹雪の中を走る狩人、これらは論争の当事者の行動と人柄を比喩していると解される。

3、「人の道と文の道」に生きる露風

詩壇から遠ざかつた露風は、自分の信じる詩の道を歩き続けた。露風の詩の道に対する考えは、一九二八（昭和三）年九月二十六日付の『山崎新聞』に掲載された次の短歌に詠まれている。

「人の道と文の道と」（短歌六首）

寡聞なる人はもだしてあるべきを他をばそしりて身をばせば
むる
（第一首）

その人の名を聞くだにもまことなる道をまぐるとおぞましき
かも
（第二首）

文の道あゆまばただにまことのみ求むるぞよきひがごとなせ
そ
（第三首）

博士らがいとまめやかかふみをしてこの道問ふに国は栄える
（第四首）

さかしらのざれごと言ひて寡聞をば恥ぢざる徒より村は衰え
る
（第五首）

すぐやかに心も身をものばせかし道を行くには心してあれ
（第六首）

見聞が狭いのに他をそしる人、そのひとの名を聞くだけで誠の道筋を分からなくさせる人、利口ぶって筋の通らない放言をいう人、また文の道を歩む人などに対する教訓的な歌である。文の道と人の道は、同じであり「まこと」の道を歩むべきという。

このことに關して、ひと月ほど前の八月十八日に出版した自叙伝『わが歩める道』では、次のように述べている。^{註10}

「私は人としての歩みも詩人としての歩みも同一である。故に私はたゞの詩匠であることを嫌ふ。心の真実を、觀照した自然・人生と共に表現する態度を私は常に持つ。私の行く道は、内觀に於いては真理であり、表現においては、ゆたかな文芸の華である」

露風の行く道は、人の道では内觀における「真理」、つまり倫理的・宗教的に正しい生き方をすることであり、文の道ではゆたかな文芸、表現技巧の美しさ、輝きであると述べている。

また、その三日後の八月二十一日付の『山崎新聞』には、次の六首が掲載されている。

「炎暑」(六首)

わが歩む道にしたがひ世に書をばいだと今日も暮れ果てにけり (第一首)

暑き日を旅する時に重き荷を積みたる車見れば勇みぬ

(第二首)

国のため人のためにと尽す身は重荷を負ふにたがはざりけり (第三首)

用もなき言葉綴りて国のため人のためにも害あらば死せ (第四首)

世にありてたま／＼いともおろかなる人に会いてぞそしる、憂さ (第五首)

さかしらにのべたる言葉よく聞けばよこしまなるに驚きにけり (第六首)

露風は、自分の歩む道に従い書物を出すことは、国や人のために身を尽くすことで、重荷を負うことであるという。短歌において、用もなく言葉を綴る人、いともおろかな人、賢そうに聞こえるが邪惡なことを話す人に対し、道理に従った「まこと」の文の道を説いている。露風自身は、歌に詠んだような「まこと」の人の道と詩の道を歩み続けたのであった。

五、露風からのメッセージ

東京で活躍する露風が『山崎新聞』に寄稿した理由は、山崎町に住む龍野中学の同級生山下郁三との関係である。また、露風の出身地龍野町と山崎町は揖保川沿いにあり、風土を同じくする揖保川流域の「ふるさと」との関わりであった。東京に出た露風にとって、ふるさとの山や川、そこに住む人々への強い思いがあったと思われる。

その思いは、例えば大正十五年十月に刊行された童謡集『おひさ

ま』(アルス)所収の「揖保川」に端的に表れている。

「揖保川の河原の小さい小石／わたしは拾ふて都に帰り、／箱の中にと、おさめておいた、／揖保の流れを思はうと。」

(第四連)

また『山崎新聞』には、ふるさとへの思いを詠んだ次のような歌が多く掲載されている。

(1)「塚本清治氏より揖保川の鮎を贈られて」(短歌八首、一九二七年・昭和二年六月二十一日付)

揖保川の清き流れをのほりゆく鮎の影見ゆ都なれども

(第一首)

ふるさとを同じうすれば此の鮎に心こもりて見ゆるうれしさ

(第三首)

都にも青葉繁りて揖保川の流れの色をはるかに偲ぶ(第六首)

(2)「ふるさと」(短歌四首、一九二八年・昭和三年九月二十六日付)

ふるさとのたよりに夏を忘れつゝ都に昔偲びけるかな

(第一首)

ふるさとの我がおさなどちいかにせし年を経れども忘れぬかな

(第四首)

(3)「故郷の図書館」(短歌一首、一九二八年・昭和三年八月一日付)

ふるさとに文読む人の多ければ国のさかえと我れよろこびぬ

このように遠く東京から露風は、ふるさとへ思いを馳せていたのである。そしてその思いには、あるメッセージが感じられる。露風

が『山崎新聞』に寄稿した作品は、紀行文、随筆、教科書に掲載された詩文、詩歌と、大きく四つに分類できる。実は、これらの作品を寄稿する発想には、露風が「ふるさとの文読む人」たちに送ったメッセージが込められていると思われる。

例えば紀行文は、「北日本の旅と自然と」(五十九回)と「四国の旅と自然と」(三十一回)である。北日本は、露風が大正十五年五月から六月にかけて岩手県、青森県、秋田県、山形県を旅した時のものであり、四国は、同年十一月四日から十九日までの旅のものである。北日本の旅は、カトリックの講演、友人訪問、自然観賞を目的としたものであったが、紀行文には各地の名所や風土、文化、ゆかりの文化人、文学者などについても詳細に記している。兵庫県山崎町に住む人々にとって、あまり馴染みのない地方であり、東北四県一周に関する紀行文は、ある意味で観光や文化の案内書でもあったに違いない。四国の旅は、カトリック教会と新聞社が主催した講演の旅であったが、四国四県一周の紀行文は、馴染みのあるお遍路の旅とはまた違った新たな旅を紹介している。露風は、行く先々で短歌や俳句を詠み、詩を作っている。これなども詩歌の創作を志している人々にとっては、良きお手本である。

随筆は「東京の春と夏と」(三回)、「最近の東京郊外」(二回)、「山科より近江へこえて」(一回)、「御大典と明治節とに対し微衷を述ぶ」(一回)、「慶應大学病院より」(三回)、「現代音楽の状況」(一回)、「児童の文芸と教育」(一回)、「現代美術界の傾向」(五回)、「俳句の歴史並びに鑑賞」(四回)、「三大湖の十和田湖風景」(一回)、「浜名湖其他の小湖」(一回)、「西洋の大画家に就いて」(四回)である。これらの随筆に書かれているのは、タイトルの「最近」「現代」が象

徴するように、東京、音楽、絵画、文芸などに関する最新の教養的情報である。露風は、ふるさとに最新の情報を送ったのであろう。

「教科書に有る我が詩文」は、教科書に掲載された露風の詩文について、自身が詩の鑑賞や文章の経営について説いたものである。これらを十三回にわたり『山崎新聞』に寄稿した目的の一つには、揖保川流域の人々における文化、文学などの知識の涵養にあったと思われる。自身の作品が掲載されている教科書として取り上げたのは、『農村用高等小学校読本』、『最新女子国文』、『改訂女子国文』、『新制女子国語読本』、『帝国読本』である。

露風は、一九二九（昭和四）年七月一日付の『山崎新聞』で、国民教育のため文部省が作った『農村用高等小学校読本』について詳しく説明している。そこで、この教科書を作成した理由の第一は、農村の人口減や経済の貧弱による農村の疲弊の対策であるという。また露風は、地方の専門学校や高等学校では同盟休校・ストライキが起き、農村部では不道德な者、遊情を好む者、不良になるか、怠惰になって農事をおろそかにするかなる者が多いことに対して、『農村用高等小学校読本』は、「さう云ふ弊害を矯正するために、文部省にて、編纂されたものだから充分それを重んじなければならぬ」と述べて共感している。農村の疲弊の問題は、一九二三（大正十二）年二月十一日付『山崎新聞』においても、「国家の實力は田舎にある／農村の疲弊は地方／青年子女の無自覺を語る」という見出しの記事が掲載され、「田舎は将来の大人物のひな鳥を育くむ所であると思つてよろしく農村を開拓し農會にも文明の花を咲かせることをつとめなければなりません」とある。農村においては深刻な問題であり、青年子女の教育について早急に対策を講じる必要が

あったと説く。

続いて露風は、一九二九（昭和四）年七月十一日付の『山崎新聞』で、農村の弊害の矯正のために学生だけでなく、農村の青年や少年などの「若い年頃において、人格養成の基礎を造っておかなければならぬ」と説き、「茲に於て農村の教育と言ふことが甚だ大事なことになる。それは、単に子女ばかりでなくて成人した者にも必要であるのだ」と、農村の教育の必要性を強く訴えている。また、文部省の『農村高等小学校読本』編纂の二大方針を要約して、「今上天皇陛下の御高德を知らしめる為に、其の教課をいれること」「農村の知識を涵養せしめること」として、「道徳」と「知識」をあげて重要性を説いている。

さらにまた、同年六月一日付の『山崎新聞』では、『帝国読本』に載る詩「いかるがの宮」について述べている。この詩については、「此の詩を読む一般の人々も亦中学や師範や女学校などで講義をする人々は、之れが太子の事を諷詠した詩であるから、やはりそれに就て参考になることを知っておくがよいと思ふ」と説明している。つまり、教科書を読む若い生徒だけでなく、それを教える教師、また詩を読む一般人をも対象としていることがうかがえる。

他に『最新女子国文』の「文章の経営」をとりあげ、文章について記している。この教科書は、女学校や女子師範学校などで用いた。当時の山崎町には、尋常高等小学校と高等女学校があった。おそらく露風は、ふるさとの揖保川流域の人々に対して農村の教育の重要性、生徒や若者の人格育成のために基礎造りをする必要があるというメッセージを送ったのであろう。そのための紀行文、随筆、詩歌、詩歌の鑑賞に関することであり、文化や教養の基礎となるもの

として最新の情報を二年半にわたり送り続けたと思われる。

「短歌や俳句」を寄稿したことは、一般的な人々は、象徴詩などよりも伝統的な短歌や俳句のほうが身近に感じたからと解される。そして山崎町には、それらを受け入れる文学的風土があった。

六、露風作品の読者たち

露風の生まれた龍野は、城下町である。揖保川流域の港と山陽道、出雲街道が交差する交通の要衝であり地域を中心として栄えた。人と物の交流が盛んであり、高い文化を誇っていた。また、山崎町は、龍野町より揖保川の上流に位置する。江戸時代に山崎城が築城され、その城下町として栄え、地域の経済、文化、交通の中心として重要な役割を果たしてきた。因幡街道による山陽と山陰との結節点であり、農林業と蠶業を中心として揖保川水運により発展してきた。

山崎町の文学的風土は、露風が寄稿した頃の『山崎新聞』に表れている。例えば「山崎アラギ会」(俳句)、「山崎光風会」(俳句)、「山崎詞壇」(短歌)、「山崎歌壇」(短歌)、「不死鳥社」(短歌)、「川柳会」(山崎詞壇) (詩歌)、短歌雑誌『水甕』の山崎支社があった。また山崎新聞社では、「新年文芸募集」を企画して、和歌、短歌、俳句、川柳、狂歌、狂句、小品文、童話、童謡、都都逸、端唄、漢詩などの作品を掲載していた。さらに、短歌雑誌『歌人』は毎月発行、「不死鳥社」や「水甕社支部」主催の歌会は毎月二回開催した。山崎新聞社内には事務所を置く「光風会」は、例会と即吟会を開催し、即吟会では龍野と山崎の同人が同席するなど、句会も活発であった。

このような文学的風土の中に、兵庫県立山崎高等女学校があった。

この女学校では、一九二七(昭和二)年十二月一日に歌集『くさのみ』(第一詠草集)を発行している。「あとがき」によると、女学生たちの「草の實會」の詠草を集めて小さな歌集を作ろうという話があったが、会の創立当初から世話をしてくれた中原先生が家庭の事情で京都に帰ったので校友会文学部の発行となったという。中原先生とは、歌集に短歌を掲載している中原義教である。また、中原は中原竹鳳の名で、一九二七(昭和二)年七月一日付の『山崎新聞』の「草の實會詠草」に、八名の教え子たちと短歌二首を載せている。

この中原竹鳳は、のちの「光桂山保福寺」の第二十七代住職で、花鳥風月を題材にして「京都画壇の俊英たち」と評された人物である。多才であり、早くに一九二三(大正十二)年六月六日付の『山崎新聞』の「山崎詞壇」に「五月抄」と題する短歌七首が見える。同紙連載の「五月抄」には、「山崎はいよき街かもま静かに晝など思ふにいよき街かも」(六月十六日付)、「身も果てむ心も果てむそれまでは畫筆はなさじ教え子の前」(六月二十一日付)と、山崎町や教師としての思いを詠んだ歌がある。その後も作品を『山崎新聞』に寄稿し、山崎町を去っても京都から詩歌や随筆を数多く寄稿している。露風の寄稿と同時期には、共に第一面を飾り、露風が寄稿を止めた後も寄稿を続けていた。

歌集『くさのみ』には、女学生三十七名の作品のほか、巻頭には奥村奥右衛門校長、巻末には教員の安田喜一郎の作品が掲載されている。この歌集の発行人でもある安田喜一郎は、歌人の安田青風である。姫路師範卒業の安田は、一九一五(大正四)年に前田夕暮主宰の「詩歌」に入り、一九二七(昭和二)年に尾上柴舟の『水甕』に移り、この頃は『水甕』の山崎支部や短歌雑誌『歌人』を主宰し

ていた。

歌集には、宇野定憲や梅沢辰起（樹）の作品も掲載されている。両名について詳細は不明であるが、一九二九（昭和四）年五月二十六日付の『山崎新聞』の「歌會通信」欄には、五月二十日に奥村女学校長宅において催された二十数名出席の例会に参加した折に詠んだ短歌が載っている。そこには、奥村や安田の短歌も載る。山崎町の文学的風土には、山崎高等女学校も重要な役割を担っていたのである。

この文学的風土にあふれた山崎町を「詩郷」と呼び、『山崎新聞』に随筆と詩を寄稿した人物がいた。

大学入学のため東京に出たらしい山崎町出身者で、筆名を「駒澤鈴馨樹」、「駒澤孤草」、「駒澤正雄」と使い分けている。「鈴馨樹」の読み方と意味は、不明である。もしズバカケ（プラタナスの和名）としたなら、花言葉は「天才」「好奇心」である。「山崎町の天才・好奇心」男とでもつけたのであろうか。その彼は、一九二九（昭和四）年八月六日付の『山崎新聞』の「詩郷山崎（一）」において、山崎の文学的風土を次のように記している。

「詩郷……なんと^{あせがれ}言ふ憧憬の都だらう詩人にとりて喧響と尽

風の盛夏の都会より逃れて独り夢を追ひ自然を唄ひ友と語り

真夜の野辺に彷徨ふ、其んな感傷的な詩人にとりて好適の都である……剣と恋の紅ないに色どられた昔の夢を城跡の廢墟

に夢見して女心に似た赤い襷の下に微笑める瞳を秘めて稲田に立つ田舎娘の恋しさ……唯もうふるう様な夜の鍾余韻の淋しさ……漁火の燃ゆる灯の下に唄ひ行く民謡等々……斯

の間も東京のT大学の友人遂に山崎を詩郷と言つてしまつた」

また同紙で、その詩的発想は「山崎の有形無形の動き」から生じたと述べ、「淵を見つめて 揖保川に泳ぎて」と題する詩を載せている。その一部は、次のようである。

「人々は山崎の中から美的印象を全々受け入まいかも知れぬ。然し僕の様な譯の解らぬ人間でさへいくつかの詩を斯の山崎の有形無形の動きの中から生まれるべく余儀なくされた」

「大空に雲は歩み／清流に鮎のたわむる／四方の山緑なす／揖保の流れの岩角に立てば／想ひ出は再び訪る……」

（詩 山崎風景より）

『山崎新聞』に掲載された露風作品の読者は、このような山崎の文学風土に育まれた人々であつたに違いない。また、『山崎新聞』において露風の作品を一面トップに、同一紙面に地元文壇の詩人や歌人の投稿作品を掲載することが可能だったのは、このような読者と豊かな文学的風土の支えがあつたからであろう。

七、『山崎新聞』に掲載された露風の作品

ここに至って、『山崎新聞』に掲載された露風の作品について、号数、発行年月日、作品の題名、作品数の順に明記する。なお、随筆・紀行文の中に含まれる短歌・俳句・詩の題名とその数を山括弧

でくくって示した。

歌二首

五九四号、昭和二年六月六日、「東京の春と夏と（一）」

五九五号、昭和二年六月十一日、「東京の春と夏と（二）」・〈短歌一首〉

五九六号、昭和二年六月十六日、「東京の春と夏と（三）」

五九七号、昭和二年六月二十一日、「日本文藝の最近の傾向を論ず」（一）、「塚本誠治氏より揖斐川の鮎を贈られて」（八首）

（二）、「日本文藝の最近の傾向を論ず」（八首）

五九八号、昭和二年六月二十六日、「日本文藝の最近の傾向を論ず」（二）、「初夏十句」

（二）、「初夏十句」

五九九号、昭和二年七月一日、「四國の旅と自然と（一）」、「新緑十句」

六〇〇号、昭和二年七月六日、「四國の旅と自然と（二）」・〈短歌一首〉、「千代田城」（六首）

（二）、「千代田城」（六首）

六〇一号、昭和二年七月十一日、「四國の旅と自然と（三）」、「近什十句」

（三）、「近什十句」

六〇二号、昭和二年七月十六日、「四國の旅と自然と（四）」、「夏の山」（二首）

（二）、「夏の山」（二首）

六〇三号、昭和二年七月二十一日、「四國の旅と自然と（五）」・〈短歌二首〉、「夏の山」（四首）

（五）、「夏の山」（四首）

六〇四号、昭和二年八月一日、「四國の旅と自然と（六）」

六〇五号、昭和二年八月六日、「四國の旅と自然と（七）」・〈短歌一首〉

六〇六号、昭和二年八月十一日、「四國の旅と自然と（八）」、「石山七句」、「雲の峰」（十句）

（十）、「雲の峰」（十句）

六〇七号、昭和二年八月十六日、「四國の旅と自然と（九）」・〈短歌二首〉

（九）、「短歌二首」

六〇八号、昭和二年八月二十一日、「四國の旅と自然と（十）」・〈短

六〇九号、昭和二年九月一日、「四國の旅と自然と（十一）」

六一〇号、昭和二年九月六日、「四國の旅と自然と（十二）」・〈屋

島を歌へる長詩」（一篇）

六一一号、昭和二年九月十一日、「四國の旅と自然と（十三）」、「涼

しき風」（四首）

六一二号、昭和二年九月十六日、「四國の旅と自然と（十四）」、「涼

しき風」（四首）

六一三号、昭和二年九月二十一日、「四國の旅と自然と（十五）」・〈俳

句一句〉

六一四号、昭和二年九月二十八日、「四國の旅と自然と（十六）」・〈松

山詩篇」（一篇）、「夏の花」（五首）

六一五号、昭和二年十月六日、「四國の旅と自然と（十七）」、「生命」

（五首）

六一六号、昭和二年十月十一日、「四國の旅と自然と（十八）」

六一七号、昭和二年十月十六日、「四國の旅と自然と（十九）」

六一八号、昭和二年十月二十一日、「四國の旅と自然と（二十）」、「微

風」（四首）

六一九号、昭和二年十月二十六日、「四國の旅と自然と（廿一）」、「金

魚売」（八句）

六二〇号、昭和二年十一月一日、「四國の旅と自然と（廿二）」

六二一号、昭和二年十一月十一日、「四國の旅と自然と（廿三）」・〈詩

一篇〉

六二二号、昭和二年十一月十六日、「四國の旅と自然と（廿四）」・〈短

歌三首〉

六二三号、昭和二年十一月二十一日、「四國の旅と自然と（廿五）」
六二四号、昭和二年十一月二十六日、「四國の旅と自然と（廿六）」・
〈民謡宇和島の唄〉（長詩一篇）

六二五号、昭和二年十二月一日、「四國の旅と自然と（廿七）」
六二六号、昭和二年十二月六日、「四國の旅と自然と（廿八）」
六二七号、昭和二年十二月十一日、「四國の旅と自然と（廿九）」
六二八号、昭和二年十二月二十日、「唐澤文彦君に答ふ」

六二九号、昭和三年一月一日、「聖代の新年を祝ふ」

六三〇号、昭和三年一月十一日、「四國の旅と自然と（三十）」

六三一号、昭和三年一月十六日、「四國の旅と自然と（卅一）」・「松
の内」（十句）

六三二号、昭和三年一月二十一日、「最近の東京郊外」・「初春」（十句）

六三三号、昭和三年二月一日、「最近の東京郊外（二）」・「冬十句」

六三四号、昭和三年二月六日、「山科より近江へ越えて」・「俳句二句」

六三五号、昭和三年二月十一日、「露風の寄稿なし」

六三六号、昭和三年二月十六日、「北日本の旅と自然と（一）」・「春寒
（十句）」

六三七号、昭和三年二月二十六日、「北日本の旅と自然と（二）」

六三八号、昭和三年三月一日、「北日本の旅と自然と（三）」

六三九号、昭和三年三月六日、「北日本の旅と自然と（四）」

六四〇号、昭和三年三月十一日、「北日本の旅と自然と（五）」・「桜
雲莊歌抄」（十首）・文章

六四一号、昭和三年三月十六日、「北日本の旅と自然と（六）」

六四二号、昭和三年三月二十六日、「北日本の旅と自然と（七）」

六四三号、昭和三年四月一日、「北日本の旅と自然と（八）」・「羈旅」

（過去の詩一篇を再録）

六四四号、昭和三年四月六日、「北日本の旅と自然と（九）」・「桜雲
莊歌抄（二）」（十五首）

六四五号、昭和三年四月十一日、「北日本の旅と自然と（十）」・「桜
雲莊歌抄（三）」（十四首）

六四六号、昭和三年四月十六日、「北日本の旅と自然と（十一）」・「桜
雲莊歌抄（四）」（十八首）

六四七号、昭和三年四月二十一日、「北日本の旅と自然と（十二）」・
「桜雲莊歌抄（五）」（十二首）

六四八号、昭和三年五月一日、「北日本の旅と自然と（十三）」・「桜
雲莊歌抄（六）」（十首）

六四九号、昭和三年五月六日、「北日本の旅と自然と（十四）」・「短
歌四首」・「梅花七句」・「春雨七句」

六五〇号、昭和三年五月十一日、「北日本の旅と自然と（十五）」・「連
翹七句」・「彌生六句」

六五一号、昭和三年五月十六日、「北日本の旅と自然と（十六）」・「永
日七句」・「霞七句」

六五二号、昭和三年五月二十一日、「北日本の旅と自然と（十七）」・
〈詩一篇〉・「雲雀七句」

六五三号、昭和三年六月一日、「北日本の旅と自然と（十八）」・「俳
句十三句」

六五四号、昭和三年六月六日、「北日本の旅と自然と（十九）」・「短
歌四首」

六五五号、昭和三年六月十一日、「北日本の旅と自然と（二十）」・
〈毛馬内城に立ちて〉（詩一篇）・「短歌二首」

六五六号、昭和三年六月十六日、「北日本の旅と自然と（廿一）」・〈若き梨の実〉（過去の詩一篇を再録）

六五七号、昭和三年六月二十六日、「北日本の旅と自然と（廿二）」

六五八号、昭和三年七月一日、「北日本の旅と自然と（廿三）」・〈俳句二句〉

六五九号、昭和三年七月六日、「北日本の旅と自然と（廿四）」・〈青風（四首）〉

六六〇号、昭和三年七月十一日、「北日本の旅と自然と（廿五）」

六六一号、昭和三年七月十六日、「北日本の旅と自然と（廿六）」

六六二号、昭和三年七月二十一日、「北日本の旅と自然と（廿七）」

六六三号、昭和三年八月一日、「北日本の旅と自然と（廿八）」・〈短歌一首〉・〈青葉若葉〉（六首）

六六四号、昭和三年八月十一日、「北日本の旅と自然と（廿九）」

六六五号、昭和三年八月十六日、「北日本の旅と自然と（三十）」・〈俳句三句〉・〈露草〉（七首）

六六六号、昭和三年八月二十一日、「北日本の旅と自然と（卅一）」・〈炎暑〉（六首）

六六七号、昭和三年八月二十六日、「北日本の旅と自然と（卅二）」・〈「文月七句」〉

六六八号、昭和三年九月一日、「北日本の旅と自然と（卅三）」・〈短歌三首〉・〈残暑〉（六首）

六六九号、昭和三年九月八日、「北日本の旅と自然と（卅四）」・〈詩一篇〉・〈「白百合」〉（十首）

六七〇号、昭和三年九月十一日、「北日本の旅と自然と（卅五）」

六七一号、昭和三年九月十八日、「北日本の旅と自然と（卅六）」・〈俳

句一九句〉・〈「葉月集」〉（十一句）・〈「偶感の句」〉（七句）

六七二号、昭和三年九月二十六日、「北日本の旅と自然と（卅七）」・

〈「平泉にて」〉（詩一篇）・短歌（八首）・〈「ふるさと」〉（四首）・〈「人の道と文の道と」〉（六首）

六七三号、昭和三年十月一日、「北日本の旅と自然と（卅八）」・〈「涼味」（六首）〉・〈「驟雨」〉（七首）

六七四号、昭和三年十月六日、「北日本の旅と自然と（卅九）」・〈「松島」〉（詩一篇）・〈「夏より秋へ」〉（六首）

六七五号、昭和三年十月十一日、「北日本の旅と自然と（四十）」・〈俳句二句〉・〈「夏の郊外」〉（十首）

六七六号、昭和三年十月二十一日、「北日本の旅と自然と（四十一）」・〈「秋晴」〉（六首）

六七七号、昭和三年十月二十六日、「北日本の旅と自然と（四十二）」・〈「嵐の後」〉（六首）

六七八号、昭和三年十一月一日、「北日本の旅と自然と（四十三）」・〈「秋雑句」〉（十首）

六七九号、昭和三年十一月十日、「御大禮奉祝の辭」（第一面）・〈「御大禮奉祝の詩」（一篇・第一面）〉・〈「御大典と明治節とに對し微衷を述ぶ」〉（第六面）

六八〇号、昭和三年十一月二十六日、露風の寄稿なし

六八一号、昭和三年十二月一日、「北日本の旅と自然と（四十四）」・〈「武蔵野」〉（六首）

六八二号、昭和三年十二月六日、「北日本の旅と自然と（四十五）」・〈「初秋」〉（七首）

六八三号、昭和三年十二月十一日、「北日本の旅と自然と（四十六）」・

「翠檜」(六句)、「秋風」(六句)

六八四号、昭和三年十二月十六日、「北日本の旅と自然と」(四十七)・
〈俳句五句〉、「ゆく雲」(六首)

六八五号、昭和三年十二月二十一日、「北日本の旅と自然と」(四十八)・
「秋の燭」(七句)

六八六号、昭和四年一月一日、「新春五十首」(五十首)

六八七号、昭和四年一月十一日、「北日本の旅と自然と」(四十九)・

六八八号、昭和四年一月十六日、「北日本の旅と自然と」(五十)・〈俳
句七句〉、「富士」(七句)

六八九号、昭和四年二月二十一日、「北日本の旅と自然と」(五十一)・

〈短歌七首〉

六九〇号、昭和四年二月二十六日、「北日本の旅と自然と」(五十二)・

「近詠」(六首)

六九一号、昭和四年二月一日、「北日本の旅と自然と」(五十三)・〈七
つの森」(詩一篇)〉

六九二号、昭和四年二月六日、「北日本の旅と自然と」(五十四)・〈俳
句二句〉

六九三号、昭和四年二月十一日、「北日本の旅と自然と」(五十五)・

「青空と松と」(五首)

六九四号、昭和四年二月十六日、「北日本の旅と自然と」(五十六)・

〈俳句一句〉、「如月」(六句)

六九五号、昭和四年三月一日、「北日本の旅と自然と」(五十七)・〈短
歌一首〉、「余寒」(六句)

六九六号、昭和四年三月十一日、「北日本の旅と自然と」(五十八)・

六九七号、昭和四年三月二十一日、「北日本の旅と自然と」(五十九)・

「霞立つ」(五首)

六九八号、昭和四年三月二十六日、「朝寒」(六句)
六九九号、昭和四年四月一日、「春光」(六句)

七〇〇号、昭和四年四月六日、「早春の歌」(六首)「新月ヶ瀬」(六首)
七〇一号、未入手

七〇二号、未入手

七〇三号、未入手

七〇四号、未入手

七〇五号、未入手

七〇六号、昭和四年五月十六日、「教科書に有る我が詩文」(四)・「菜
の花」(七句)、「惜春」(七句)

七〇七号、未入手

七〇八号、昭和四年五月二十六日、「妹と友」(六首)、「山桜」(七首)

七〇九号、昭和四年六月一日、「教科書に有る我が詩文」(四)・「蛙
の歌」(六首)、「たちね」(七首)

七一〇号、昭和四年六月七日、「教科書に有る我が詩文」(六)・「蛙」
(八句)、「閑古鳥」(五句)

七一一号、昭和四年六月十六日、「泉月」(六首)、「春より夏へ」(七句)

七一二号、昭和四年六月二十一日、「慶応大学病院より」・〈俳句一句・
短歌一首〉、「初夏吟」(二句)、「鳥の聲」(六首)

七一二号、昭和四年六月二十六日、「教科書に有る我が詩文」(七)・

〈短歌一首〉、「病床吟」(十三句)

七一二号、昭和四年七月一日、「教科書に有る我が詩文」(五)・「病
める日」(七首)、「久方の空」(六首) (七一二号は誤植
につき「再び慶応大学病院より」に訂正とある)

七二五号、昭和四年七月六日、「三度慶応病大病院より」、「病中

小閑」(七句)、「都の路」(七首)

七二六号、昭和四年七月十一日、「教科書に有る我が詩文(六)」、「蠅

(六句)

七二七号、昭和四年七月二十一日、「教科書に有る我が詩文(七)」、「紫

竹」(六句)、「夏日吟行」(十二句)、「青嵐」(七句)

七二八号、昭和四年七月二十六日、「教科書に有る我が詩文(八)」、「

「夏の荘」(八句)、「百合」(四首)、「夏祭」(十句)、「暑氣」

(六首)、「現代音楽界の情勢」(第三面)

七二九号、昭和四年八月一日、「教科書に有る我が詩文(九)」、「遠近

(九首)、「頬白」(八首)

七三〇号、昭和四年八月六日、「暑熱」(八句)、「夕立」(七句)、「金

剛」(四首)、「蘇鉄」(八句)

七三一号、昭和四年八月十一日、「教科書に有る我が詩文(十)」、「夏

の旅」(六句)、「泉」(四首)、「蚊」(七句)、「蟲の聲」(七

句)、「児童の文藝と教育」(第三面)

七三二号、昭和四年八月十六日、「教科書に有る我が詩文(十一)」、

「湖の歌」(十八首)

七三三号、昭和四年八月二十三日、「教科書に有る我が詩文(十二)」、

「青苔」(九首)、「合歡の花」(八首)

七三四号、昭和四年九月一日、「教科書に有る我が詩文(十三)」、「薬

の香」(九句)、「白光」(八句)

七三五号、昭和四年九月八日、「現代美術界の傾向(一)」、「苦舟」

(十八首)

七三六号、昭和四年九月十二日、「現代美術界の傾向(二)」、「歌を

詠じて」(六首)

七二七号、未入手

七二八号、昭和四年九月二十六日、「現代美術の傾向(四)」、「赤蜻蛉」

(十七句)

七二九号、昭和四年十月一日、「現代美術界の傾向(五)」

七三〇号、昭和四年十月七日、「俳句の歴史並びに鑑賞(一)」、「法

師蟬」(十七句)

七三一号、昭和四年十月十一日、「俳句の歴史並びに鑑賞(二)」、「秋

十句」(十句)、「広野原」(七句)、「くぬぎの葉」(四首)

七三二号、昭和四年十月二十一日、「俳句の歴史並びに鑑賞(三)」、

「秋風」(四首)、「コスモス」(六首)

七三三号、昭和四年十月二十六日、「俳句の歴史並びに鑑賞(四)」、

「赭土」(七首)、「端木」(六首)

七三四号、昭和四年十一月六日、「三大湖の十和田湖風景」、「秋雑吟」

(十六句)

七三五号、昭和四年十一月十一日、「浜名湖其他小湖」

七三六号、昭和四年十一月十六日、「西洋の大画家に就いて(一)」、

「故保呂儀」(八首)

七三七号、昭和四年十一月二十一日、「西洋の大画家に就いて(二)」、

「秋の湖」(八首)

七三八号、昭和四年十一月二十六日、「西洋の大画家に就いて(三)」、

「秋月」(十一句)

七三九号、昭和四年十二月一日、「西洋の大画家に就いて(四)」、「霞

の葉」(九句)

七四〇号、未入手、(昭和四年十二月六日「西洋の大画家に就いて

(五)「の原稿を三鷹市が所蔵」

七四一号、未入手

七四二号、未入手

七四三号、昭和五年一月一日、露風の寄稿なし

七四四号、昭和五年一月十一日、露風の寄稿なし

七四五号、昭和五年一月十六日、露風の寄稿なし

七四六号、昭和五年一月二十二日、露風の寄稿なし

七四七号、昭和五年一月二十六日、露風の寄稿なし

七四八号、昭和五年二月一日、露風の寄稿なし

七四九号、昭和五年二月六日、露風の寄稿なし

七五〇号、昭和五年二月十一日、露風の寄稿なし

七五一号、昭和五年二月十六日、露風の寄稿なし

七五二号、昭和五年二月二十一日、露風の寄稿なし

七五三号、昭和五年二月二十六日、露風の寄稿なし

七五四号、昭和五年三月六日、露風の寄稿なし

七五五号、昭和五年三月十一日、露風の寄稿なし

七五六号、昭和五年三月十六日、露風の寄稿なし

七五七号、昭和五年三月二十一日、露風の寄稿なし

七五八号、昭和五年三月二十六日、「春の朝」(四首)

七五九号、未入手

七六〇号、昭和五年四月六日、「日光と鳥」(六句)

七六一号、昭和五年四月十一日、「永日閑吟」(六句)

七六二号、昭和五年四月二十一日、「閑古鳥」(六句)

七六三号、未入手

七六四号、未入手

七六五号、未入手

七六六号、昭和五年五月十六日、「青葉若葉」(七句)

七六七号、昭和五年五月二十一日、「杜鵑」(五句)

七六八号、昭和五年五月二十六日、「白き月」(六首)

七六九号、昭和五年六月六日、「白雲」(六首)

七七〇号、未入手

七七一号、昭和五年六月十六日、「青田」(十七句)

七七二号、昭和五年七月一日、「夏草」(九句)

七七三号、昭和五年七月十一日、「百合」(六句)

七七四号、未入手

七七五号、昭和五年八月一日、「月と雲」(七句)

七七六号、昭和五年八月十一日、「掘割」(八句)

七七七号、昭和五年八月二十一日、「暑気」(十句)

七七八号、未入手

七七九号、昭和五年九月十一日、「遠樹」(八首)

七八〇号、昭和五年九月二十一日、「秋蟬」(八句)

七八一号、昭和五年十月一日、「五位鷺」(九句)

七八二号、未入手

七八三号、昭和五年十月二十一日、「小山田」(八首)、「秋風の歌」(八首)

七八四号、未入手

七八五号、未入手

七八六号、未入手

七八七号、昭和五年十二月一日、「時雨」(八首)、「秋風來」(八首)

七八八号、昭和五年十二月二十一日、「秋草集」(十八首)

八、おわりに

『山崎新聞』は、創刊者の山下駿治が「創刊の辞」において、「新聞は社会の耳目にして亦木鐸なり」とし「郡民に今少しく進取的に活動せんことを望むなり」と示したように、宍粟郡民を覚醒させ教え導くものとなり、また、郡民はみずから進んで事をなすことを願って発刊したものである。そのためには率先してその任務を果たすと強く表明している。二代目の山下郁三は、初代駿治の編集方法を引き継ぎながらも「今は国家・社会或いは地方の公的機関」と述べ、「社会と共に読者と共に明るき正しき愉快味に満ちたものにならなければならぬ」と新方針を出す。

露風は、その新聞に一九二七（昭和二）年六月から二年半にわたる寄稿したのである。寄稿を始める前年の一九二六（大正十五）年に東北巡講の旅（五月～六月）、四国巡講の旅（十一月）と相次いで出かけた。東北の旅をした動機の一つに、「東京における仕事も一段落を告げたので」とあった。この年に七冊もの著書を出版するという仕事有一段落して旅に出たのである。おそらく、その頃にも、ふるさとの山下駿治と郁三の兄弟から『山崎新聞』への寄稿依頼があったのであろう。露風は、『山崎新聞』の創刊の趣旨を理解し、また、二代目の方針に沿った作品を寄稿した。それは、宍粟郡における子女たちの人格養成の基礎を造るため、また成人した者たちにも知識を涵養させるために役立つものであった。

露風と『山崎新聞』に関する資料や作品は、他にも残されたままである。露風の遺族三木家、子息の三木豊晴氏から寄贈された原稿

や詩稿などの資料が、兵庫県たつの市「霞城館」と東京都三鷹市に所蔵されている。

その三鷹市が所蔵する資料の多くは、『三木露風全集』収録からもれたまま三鷹市の旧宅に残されたものである。例えば、そこには東北巡講の旅で盛岡を訪れた時に揮毫したと思われる作品が、肉筆の便箋四枚としてあった。それは、「千九百貳拾六年羅風」と署名があり、「沢田一美 弟に、川村氏に一首、後藤清 氏に一首、三浦氏に 聖母一首、神父ドシエ師に一首、欠畑氏に一首、野間氏に 切支丹一首、上田漢一氏に盛岡にて一首、神の恵一首」と記した、詩一篇と短歌八首であった。これらの人々に関しては、カトリックの機関紙『声』や地方紙『岩手日報』に載っている。盛岡滞在中に交流した川村庄（尚）五郎、後藤清朗（岩手日報主筆）、盛岡天主教會ドシエ神父、カトリックの信者であり、露風が代父を務めた欠畑右兵衛（岩手県警察部長）、天主教會上田漢一である。また、高知市における記念写真を掲載したカトリック新聞もあった。露風の他に六名が写っていて、霊父カルボー師、伝教士牧山衆吉と記載がある。四国ドミニコ会会長で高知天主堂のカルボー霊父、高松市から同行してくれた高知天主教會の伝教士牧山衆吉である。撮影地の高知市は、四国巡講の旅における最終地であり、大正十五年十一月十六日から三日間滞在したことが判明した。

この他にも、東北巡講の旅に関わる秋田県毛馬内町や大湯村における短歌や俳句の肉筆原稿、四国巡講の旅に関わると思われる詩「宇和島」の草稿、『山崎新聞』の未入手部分の原稿などがある。今後の課題として、これらの資料と『山崎新聞』との関わりについての検討も残った。改めて別稿を用意したい。

引用文献

- 注1 窪田般弥「忘れられた詩人・露風」『日本の象徴詩人』一九六三（昭和三十八）年、紀伊国屋書店、一〇二頁
- 注2 佐藤房儀「三木露風論（承前）」『国文と研究』八〇、一九八三（昭和五十八）年、七七頁
- 注3 中島洋一「露風の象徴詩論」『象徴詩の研究―白萩・露風を中心として』一九八二（昭和五十七）年、桜楓社、一九〇頁
- 注4 佐藤房儀「三木露風論」『国文学研究』七九、一九八三（昭和五十八）年、六四頁
- 注5 注1に同じ。一〇一頁
- 注6 千野拓政「東アジアにおけるサブカルチャー、文学の変貌と若者の心―アニメ・マンガ・ライトノベル・コスプレ・そして村上春樹―」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』（二）二〇一三（平成二十五）年十月
- 注7 二〇一九（平成三十一）年四月七日、新発見発表、龍野歴史文化資料館
- 注8 『詩歌』（8）白日社、一九一八（大正七）年一月、四頁
- 注9 注8に同じ、一〇七・一〇八頁
- 注10 三木露風、「自序」『わが歩める道』、一九二八（昭和三）年八月十八日、厚生閣書店 一頁
- 注11 「盛岡における三木羅風氏の講演」『声』（六〇五号）、一九二六（大正十五）年六月。「ドシエ師の晩餐会／三木氏を招いて」『岩手日報』同年五月二十五日付夕刊
- 注12 写真「四国巡廻講演中の三木露風氏」[THE CATHOLIC TIMES] (No. 一三一、第三面)、一九二七（昭和二）年一月二十一日

付記

本稿を草するにあたり、露風が寄稿した『山崎新聞』と関連する貴重な資料の閲覧にご協力くださった兵庫県宍粟市教育委員会社会文化財課

並びに東京都三鷹市スポーツと文化部芸術文化課に感謝申し上げます。また本稿は、二〇一九年十月五日、兵庫県たつの市「霞城館」主催の三木露風生誕一三〇年記念講演「現代にみえる三木露風と『山崎新聞』」の草稿に加筆したものである。よって『山崎新聞』の第一発掘者であり、共に現地に赴き調査や講演をした高田智之氏（ジャーナリスト・元共同通信社記者）と共著とした次第である。なお、引用の旧漢字は、ほぼ新字に改めた。

へうわさ」に縛られる六条御息所

木村 一

1 六条御息所という人

六条御息所という人は、前坊（先の皇太子）の妻である。前坊はすでに亡くなつていて、忘れ形見の娘が卜定により新斎宮と決まつている。源氏より七歳年上。初出は夕顔巻冒頭に「六条わたりの御忍び歩きのところ」と語られる。厳密にいえば、この時点で「六条わたり」が誰とは語られていないが、読み進むうちに源氏が通つてゐる「六条わたりの御忍び歩き」の女は六条御息所と知られることになる。「六条」は前坊の邸がある場所であり、御息所はその邸の女主人である。

源氏と六条御息所との関係は、源氏の執拗な求愛の末のことである。そうであるにも関わらず、源氏の気持ちに離れがちである。秋、源氏は六条御息所邸を訪う。そこでひと夜を過ごし、男が霧深き朝に帰ろうとする場面。女は頭を上げて視線を送ることが精いっぱいである。起き上がれぬ女主人に代わり源氏の相手をするのは、「中将のおもと」（中将の君）という女房である。

霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる

気色にうち嘆きつつ出でたまふを、中将のおもと、御格子一間を上げて、見たてまつり送りたまへとおほしく、御几帳ひきやりたれば、御頭もたげて見出したまへり。前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。廊の方へおはするに、中将の君、御供に参る。紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかにひき結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見送らたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪の下がり端めざましくもと見たまふ。

「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔
いかすべき」とて、手をとらへたまへれば、いと馴れて、とく、
朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる
と公事にぞ聞こえなす。

夕顔の花と対比的に朝顔の花が用いられている。夕顔その人が必然的に思い起こされる。物語は夕顔と六条御息所とを対比的に語りたいのである。源氏が霧深き庭を眺めている。美しく咲く朝顔は、ここでは「中将のおもと」のことである。「咲く花に……」と源氏は「中将のおもと」を朝顔に喩え、その手をとらえて詠みかけるが、「中将のおもと」はそれを主人である六条御息所のこととして

するりとかわす。恋愛の手練れである。

新編全集頭注は、その「中将のおもと」を絶賛する。^{注2}「上臈である」と注するのも、その教養の高さが裏打ちされていることであろう。源氏とのやり取りにおいても、教養高くそのアプローチを軽くないあたりは、色好みを相手としてもまったく動じぬ者として語られている。もちろんこの場面は、手あたり次第に口説いてくる源氏を皮肉めいて表現している場面ではある。ただ、その源氏の目を通して描かれる「中将のおもと」の姿は、教養高く美しい。大野晋と丸谷才一との掛け合いも思い出される。^{注3}この場面から六条御息所邸がどのような雰囲気の間所であるのか、その女主人も含めて、読み手の想像力を大いに掻き立てる。

また、「中将のおもと」は、「明け暮れうちとけてしもおはせぬを、こころもとなくことと思ふべかめり」という状態なのである。つまりは、この場面では、六条御息所が、「中将のおもと」としてはこの女主人が、源氏にとつてどのような関係であるかが必然的に明らかにされる。賢しき女房の言動からもわれわれ物語の読み手は、六条御息所の物語の立ち位置を思い知らされることになる。

2 源氏と六条御息所

その六条御息所と源氏との関係はどのようなものであるのか。葵巻巻頭に次のように語られる。御代替わりにより、世の中が変わり源氏自身の身分も重くなり（右大将に昇進、物語では「大将」以前のような軽々しい忍び歩きもできなくなる。その結果、都中にいるらしい女たちも源氏の訪れが途絶えがちであるのを嘆いている。

六条御息所もそのうちの一人ということになる。物語は「まことや」とさと思い出したように御息所のことを語り出す。「御腹の前坊の姫宮」が斎宮に卜定されいずれば伊勢に下向することになる。物語は御息所の心情を「大将の御心ばへもいと頼もしげなき」と吐露する。御息所としては、自分との関係を源氏にはつきりしてほしいのであるが、どうも源氏は煮え切らない。

讓位した桐壺院は、源氏の御息所とのつき合い方に意見する場面がある。父院は六条御息所という人は「故院のいとやむごとく思し時めかしたまひし」のであるにも関わらず、源氏が「軽々しうおしなべたるさまにもてなするがいとほしきこと」と立腹である。さらに、「斎宮をもこの皇女たちの列になむ思へば」というのは、この父院の帝時代からの常套句のようなもので、藤壺のこともそのように公言している。^{注4}つまりは、その方をわが娘同然に大切に扱うということなのであるが、この院には愛する桐壺更衣を亡くした苦い記憶がある。それだけに「いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ」・「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」という言葉は非常に重い。一夫多妻制を体现する帝であったからこそその発言である。また、物語を読むわれわれには、この院が帝時代に更衣に対して盲目的に前後不覚の状態になったことを思い出させるが、更衣を失った後の父帝としての確固とした印象もまた持ち合わせている。この場面での院は、そのような確固とした源氏の父親としての発言である。

その父院からすれば源氏の六条御息所に対するつき合い方は「心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」ということなのである。源氏の六条御息所に対するつ

き合い方は、色好みのそれではなく、「心のすさびにまかせ」た「すきわざ」であると、かなり強い言葉で非難している。

つまりは、源氏の六条御息所へのつき合い方は、父院のひいき目でみても決して褒められたものではないということになる。

また、六条御息所はそのような源氏の態度に、もはや何を期待するのではなく、斎宮に卜定された娘が幼いことにことつけて、ともに伊勢へ下向してしまおうかとも思っているのである。この場面においても、御息所は「似げなき御年のほどを恥づかしう」と源氏よりも年上であることもあって「心とけたまはぬ気色」状態なのであり、そのことが源氏との関係にも影響を及ぼしている。そのことに源氏もことつけて（「それにつつまたるさまにもてなし」）御息所との関係がうまくいっていないという状況である。物語は源氏の御息所への心情が「深うしもあらぬ御心」と語り、御息所もそれを嘆いている。二人の関係はすでに冷め切っているということになる。

ここで、一つ留意すべきことは、「世の中の人も知らぬなくなりたる」という箇所である。二人の関係が世間の知るところとなっているということである。御息所はここでも世間体を気にかけている。

3 もの言わぬ葵上

六条御息所と対比的に表現されているのが、葵上である。葵上は左大臣家の姫君で一人娘である。源氏の正妻である。桐壺巻において、源氏の元服の際、添ひ臥しとして登場しそのまま正妻となる。葵上は、若紫巻に次のように語られる。

殿にも、おはしますらむと心づかひしたまひて、久しう見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを、大臣切に聞こえたまひて、かろうじて渡りたまへり。ただ、絵に描きたる姫君のやうにしすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山路の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしううち答へたまはばこそあはれならめ、世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく思はずに、

源氏は左大臣邸にもしばらく訪れていなかったようである。「女君、例の」とあるように、源氏と葵上との仲は良くはないようである。女君は、「這ひ隠れてとみにも出でたまはぬ」状態で、父左大臣からの催促で「かろうじて渡りたまへり」の状態である。「絵に描きたる姫君」と形容される葵上は、まさに「お姫様」然とした姿であることがわかる。大切にかしずかれた深窓の姫君という表現がふさわしからう。この葵上も世が世ならば、后であった人物なのである。

思えば、物語冒頭から右大臣方との関係はそれなりに語られてはきているものの、左大臣方は源氏の元服まで一切語られてこなかった。それを考えれば、それなりの役割を担って、物語に登場しているということになる。父左大臣の思惑は語られていないものの、東宮からの申し出にも同じなかった（春宮よりも御気色あるを、思しわづらふことありける^注）ことからそれはうかがえよう。その葵上であるが、気がかりなのは源氏との仲で、その関係はあまりうま

くはいってないようである。

さて、この葵上、めったにものを言わぬ存在である。そのような中で、先の引用に続く次のような場面がある。

「時々世の常なる御気色を見ばや。たへがたうわづらひはべりしをも、いかとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど、なほ恨めしう」と聞こえたまふ。からうじて、「問はぬはつらきものにやあらん」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。「まれまれはあさましの御言や。問わぬなどいふ際は異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにはしたなき御もてなしを、もし思しうとむなめりかし。よしや、命だに」とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、ふとも入りたまはず。聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱るること多かり。

「問はぬはつらきものにやあらん」は、引き歌であり、葵上の珍しい発言である。葵上は言葉少なに源氏に恨みを述べる。その後の「後目」も源氏に対する非難の所作ではあるものの、物語はそれを「いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり」と語る。それはそのまま源氏の目線でもあろう。葵上の一言に対して、源氏は雄弁である。葵上の気を引くための弁解で四苦八苦した挙句に、「とかう世を思し乱ること多かり」と男女の仲の難しさを痛感しているのである。この場面は葵上と源氏との夫婦仲がよくないことを語る場面であり、物語も源氏の心休まらぬ左大臣邸と対照的に、その

心は北山の若紫へと転じていく過程を語る。

このように、葵上は誇り高く美しい女性である。源氏より四歳年上で、父左大臣と母大宮により「お姫様教育」を受けてきた存在である。紅葉賀巻には次のようにある。

内裏より、大殿にまかでたまへれば、例の、うるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ、「今年よりだに、すこし世づきてあらためたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、わざと人すゑてかしづきたまふと聞きたまひしよりは、やむごとく思し定めたることにこそはと心のみおかれて、いと疎く恥づかしく思さるべし、しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひにはえしも心強からず、御答へなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはことなり。四年ばかりこのかみにおはすれば、うちすぐし恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。

葵上の美しさが「うるはしうよそほしき御さまにて」と語られるが、その葵上の整った美しさは、また親しみにくい印象をも与えている。源氏はそのよそよそしさが辛くて何とか語りかけはするものの、葵上の態度はそつけない。それでもかううじて二人のコミュニケーションはなされている様子である（「えしも心強からず、御答へなどうち聞こえたまへる」。先の引用にもあるように、「例の」と語られるのは、二人の間柄がいつもそのような状態であるからである。葵上が源氏より「四年ばかりこのかみにおはすれば」ではあるが、源氏にとっては「うちすぐし恥づかしげに、盛りにととのほ

りて見えたまふ」と美德として映じている。

葵上はほとんど自らは語らないが、その容姿や性格は物語や源氏の目を通して語られている。一体、葵上が語らないことに、どのような意味があるのか。それは高貴な女性は人前でべらべらと語ることは、はしたないという当時の社会一般の通念によるものという意味合いもあるのか。あるいは、葵上にあえて語らせないことによって、その内面を雄弁に語る六条御息所との対比を物語りたいということなのだろうか。

4 車の所争い

六条御息所が生霊として出現する原因の一つに、新斎宮御禊の日

の騒動があげられる。いわゆる車争いである。

斎宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひ聞こゆらむ」など言ふを、その御方の人をもまじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。つひに御車をども立てつづけつれば、副車の奥に押しやられてものも見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すずるなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろく、悔しう何に来つらんと思ふにかひなし。

ものも見で帰らんとしたまへど、通り出でん隙もなきに、「事な

りぬ」と言へば、さすがにつらき人の御前渡りの待たるも心弱しや、笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。げに、常よりも好みととのへたる車どもの、我も我もと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ笑みつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のはしるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人々うちかしこまり心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさまをこよなう思さる。影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるると、涙のこぼるるを人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さま容貌のいとしう出でばえを見ざらましかばと思さる。

六条御息所として、自身の身の程をわきまえてはいるわけで、それでもこのところの源氏との関係において、「もの思し乱るる慰めに」と「忍びて」見物に向いたのである。

御代替わりで新斎宮が卜定されたように、新斎院も卜定されている。

斎院御禊は、賀茂の祭の日以前に、賀茂河原に出て御禊をするのであるが、その際に本院から賀茂河原までを群行の列が通る。その群行の列に源氏が「とりわきたる宣旨にて」加わることになった。都中はその話題で持ちきりであり、群行の通り路である一条大路は立錫の余地もなく混雑している状態である。

六条御息所も、その〈うわさ〉を聞いて、源氏の晴れ姿を一目見ようと、一条大路に陣取っていた一人であったのだ。

左大臣家の姫君葵上は懷妊して、「かやうの御歩きもをささしたまはぬに、御心地さへなやましなければ思しかげざりつる」状

態であつた。しかし、若い女房たちがそれでは満足できず、「おほよそ人だに、今日の物見には、大将そのをこそは、あやしき山がつさへ見たてまつらんとすなれ。遠き国々より妻子をひき具しつとも参で来るを」などと、かしがましく浮足立っている様子である。そこで葵上の母大宮の鶴の一声がかかる。「御心地もよろしき隙なり。さぶらふ人々もさうざうしげなめり」とあり、にわかに外出することになる。

日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまにて出でたまへり。隙のう立ちわたりたるに、よそほしうひきつづきて立ちわづらふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさする中に、網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたうひき入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にあらず」と、口強くて手触れさせず。いづ方にも、若き者ども酔ひすぎた騒ぎたるほどのことはえしたためあへず。おとなおとなしき御前の人々は、「かくな」など言へど、とどめあへず。

出発が遅かった葵上一行が一条大路に着いたころは、「日たけゆきて」とあり、日盛りのころであるのがわかる。一条大路はすでに「隙のう立ちわたりたる」状態である。そのような折、見出したのが雑人どものいないわずかな隙間であつた。葵上一行は、そのわずかな隙間に強引に割り込んでくる。左大臣家の威厳をもって、まるで他の車を蹴散らすように。その中に、「網代のすこし馴れたるが、

下簾のさまなどよしばめる」車を二つ見つける。これこそが六条御息所の車だったのである。

物語は、ここで六条御息所方に「きよら」と形容していることに留意したい。物事の価値観というものは、常に何らかの対象をもつてそれと判断される。この場面で六条御息所方を「きよら」と形容するということは、それよりも劣る（きよげ）である対象が常に付き纏うということになる。それが葵上一行であるということになる。言うまでもなく、源氏の正妻は葵上であり、六条御息所は数多い愛人の一人ではない。つまりは、物語は六条御息所の目線でもって物語を語っているのだということなのであり、われわれ物語を読む者もここにいたって、改めてその目線の主体に気づかされることになる。正妻と愛人との区別はあつても、この場面において六条御息所側に非はない。むしろ、権勢にものを言わせ強引に割り込んできた葵上一行に非があるのである。

ただし、物語は、ここで何を語りたいのか。少なくとも善悪の判断基準ではない。御息所側の供人が葵上一行の乱暴狼藉を止めようとするものの、年若い供人などは既に酒に酔っていて、興奮した者たちの暴力はもはや止めようにもない。六条御息所の車は、気づけば「副車の奥に押しやられてものも見えず」の状態であつた。これでは、一体何のために出てきたのか、御息所の心中を推し量ることはさほど難しいことではない。何せわれわれ物語の読み手は、葵巻このかたずつと六条御息所の目線で物語をたどってきたのである。葵上の何と横暴なことか。正妻と愛人との隔たりは何と広大なことか。なんとという屈辱感であることか。世が世ならば、自分とて後の地位にあつたはずであるのに。この場面での六条御息所の精神的衝

撃は、左大臣家の乱暴狼藉もさることながら、「忍び妻と正室との地位の差を、白日の下で見せつけられてしま^注」ったことである。御息所は常に世間体というものを気にしている。この世間体にこそ六条御息所自身の本質にかかわるところがあるのではなからうか。その世間体との関りにおいては、後ほど述べる。

さて、この車争いの場面である。葵上方の従者たちによって御息所の車は壊され、今やその車は「すずろなる車の筒にうちかけ」られている状態で、副車の陰となつて肝心の通りもよく見えない。車の外の乱暴狼藉の様子は、車の中にいる御息所にはよくわからなかった状況であつただろう。酒に酔つた従者たちの乱暴な口調や荒々しい物音だけが耳に入ってくる。いっそ車の中から声をかけようとしたのかも知れない。しかし、それも無駄なことであつたであろう。同乗している女房とともども、車は上下左右に振り回され、かなりの衝撃もあつたはずである。ようやくその衝撃も収まり、気づけば車から見えるその景色は大きく変わつてしまつていた。

もうこうなつてしまつては、見物もやめて帰ろうとするも、その場を抜け出る隙間すらない。まさにそのときである、「事なりぬ」の声に自然に御息所の視線は通りへと注がれる。つい先ほどまでひどい目に遭わされ、もう何も見ずに帰ろうとさえ思つていたその心の内は、その一声で反転する。そうだ、私はこれを見に来たのだと。「さすがにつらき人の御前渡りの待たるも心弱しや」を、新編全集は「女心の弱さというものよ」と訳する。

当の源氏は、通りの左右の女車にさりげなく流し目を送っている。その度に上がる黄色い歓声が聞こえるようである。御息所はそれを車の陰で聞きとがめるだけである。なんと源氏と関りを持つ女

の多いことか。つまりは、自分もその一人であるということもこの場にいたつて突き付けられている。源氏の面持ちが変化した。左大臣家の車の前ではまじめな顔を作つて通り過ぎる。ああ、ここでも正妻と愛人との差をことごとく突き付けられる。本来ならあの場所は、私がいるべき場所であつたのに。「あの場所」は一条大路の車の場所だけではなく、六条御息所の夢想する源氏との関係における「場所」でもあるというのは、深読みに過ぎるか。御息所は車の陰から無念を忍ぶしかない。源氏は自分には気づきもしなかった。「笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふ」、自分は「笹の隈」ですらない。古歌の一説を引用させるのは、御息所の教養の高さも現わすが、ここでは悲しいだけである。「影をのみ……」はその末の詠歌である。

何もない場面に歌は出てこない。ここには六条御息所のどうにもやるせない心情が、歌となつて表出されているのである。次の瞬間、御息所の頬を一筋の涙が伝う。この涙さえも御息所は、「人に見えるもはしたなけれど」と思う。ここでの「人の目」とは車に同乗している女房の目しかない。気心知れた女房にすらも、御息所は涙を流すことを見せたくはないのだ。六条御息所とはそのような人物なのである。このように人の目を気にしつつも、一方では源氏の「目もあやなる御さま容貌のいとしう出でばえを見ざらましかば」とも思う。御息所は、車の陰からわずかに見えた源氏の晴れ姿にささやかな満足すら覚える。つまりは、そうまでしても御息所は源氏の晴れ姿を一目見たかつたということなのである。

この車争いの騒動が、後の物の怪出現の一端を担うことは明らかであろう。しかし、それはきっかけでしかなかったのではなからう

か。六条御息所自身、閉鎖的な空間でいつも世間体を気にし、そして源氏のことを延々と考え続けているのではなかったか。われわれ物語を読む者は、そのような六条御息所の物語をこれまで読まされてきていたのではないのか。

5 車争いの後で

この車争いの様子は、「まねびきこゆる人」によって源氏の知るところとなる。ここで源氏は、騒動の当事者である葵上と六条御息所のことをそれぞれ心の内で語る。

なほ、あたは、重りかにおはする人の、ものに情おくれ、すくすくしきところつきたまへるあまりに、みづからはさしも思さざりけども、かかるなからひは情かはすべきものとも思ひいたらぬ御掟に従ひて、次々よからぬ人のせさせたるならむかし、

葵上は、「重りかにおはする」が、「ものに情おくれ、すくすくしきところつきたまへる」という。この印象はこれまでの葵上像を裏切るものではなく、源氏の目を通して語られている葵上そのものであるのだろう。そして源氏は車争いの騒動を「次々よからぬ人のせさせたるならむかし」と分析するが、それは結果的に葵上自身が「かかるなからひは情かはすべきものとも思ひいたらぬ」ことが原因であるとしている。

ここにおいて、物語の読み手であるわれわれも、はたと気づかされる。あの車争いの騒動を先導したのは葵上ではなかったのだと。

なにせ葵上は「もの言わぬ」存在である。先の「4節」で左大臣家側からの乱暴狼藉を働かれた車の中の六条御息所を推察したが、一方の葵上方の車の中はどうであつたらうか。葵上の車の中にも騒動の様子は聞こえていたであろう。車の相手が六条御息所であろうことも簾の内から分かつていたかも知れない。それでも、葵上からの指示はなかったはずで、あの車争いの場面において酒に酔った従者たちが乱暴を働いた、ということであろう。ただし、それをあえて止めなかったということもうかがえよう。それを源氏は「かかるなからひは情かはすべきものとも思ひいたらぬ」から、「よからぬ人」がそうなってしまうと判断したのである。

一方の御息所については、

御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん、といとはしくて参でたまへりけれど、齋宮のまだ本の宮におはしませば、榊の憚りにことつけて、心やすくも対面したまはず。ことわりとは思しながら、「なぞや。かくかたみにそばそばしからでおはせかし」と、うちつぶやかれたまふ。

と心の内で語る。御息所の心情を理解している源氏であるからこそ、「心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん」といたく同情する。その憐憫の思いで六条御息所邸を訪問するが、「榊の憚りにことつけて、心やすくも対面したまはず」であつた。もちろん「榊の憚り」は体のいい言い訳であり、拒絶である。物語を六条御息所目線で読まされてきている読み手は、

六条御息所に同情する。それゆえ、源氏の『なぞや。かくかたみにそばそばしからおはせかし』と、うちつぶやかれたまふ』というのもしささか滑稽なものとか映らず、いかに男というものが身勝手な感慨をするものであるかという思いばかりが先行していく。

源氏はあの車争いの騒動を知らず、一体何をしていたのだろうか。もちろん、源氏はそのような騒動のことを知らず、一身に与えられた勤めを果たすことを一義としていたのだ。ゆえに、御息所がそのようなことになっていることなどは露知らず、馬上にあったのだ。左大臣家の車には目もくれず、ひたすら正面だけを見据えて通り過ぎた。それ以外の関係のある車に対しては少しばかり悪い癖が出たかも知れぬが。ただし、他の車の陰に押しやられた御息所には、そのすべてが屈辱的であったのだ。源氏が左大臣家の車の前で見る自分には見せない真面目な顔、源氏が他の関係のある車車にする流し目のなんと多いこと、そして自分もその「流し目」を受ける立場であったことをあらためて思い知らされたこと。自分もあの「流し目」を期待してあの場所にいたこと。ついには、正妻との圧倒的な違いを白日の下に晒されてしまったこと。そして、そのことを世間の目がいつせいに笑っているであろうこと。

ここでは一向に物語の舞台に登場しない六条御息所ではあるが、われわれ六条御息所の物語を読まされてきた者は、皮肉にも語られない六条御息所の心情を雄弁に慮ることになる。

この場面において、源氏と六条御息所とのすれ違いは決定的であることを改めて確認させられていることになるう。

6 〈うわさ〉に縛られる六条御息所

六条御息所が生霊として源氏と再会する。物語の中でも有名な場面であるが、まずはその場面を引用する、

「いで、あらずや。身の上のいと苦しきをしばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂は、げにあくがるものになむありける」と、なつかしげに言ひて、

嘆きわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつまとのたまふ声、けはひ、その人にもあらず、変はりたまへり。「いとあやし」と思しめぐらすに、ただ、かの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることも、聞きにくく思ひて、のたまひ消つを、目に見す見す、世には、かかることこそはありけれど、疎ましうなりぬ。

葵巻において、葵上が出産しようとする場面である。験者衆の祈りにも屈せず執拗に葵上の身体に取り憑いたまま離れない物の怪がひとつ。験者衆も首を捻るばかりである。そのうち、(葵上物の怪)が源氏に申し上げたいことがあると言う。ここでの葵上は、葵上ではない。つまり、物の怪が葵上の口を借りて発言をしているのだ。源氏はもちろんそのようなことは知る由もない。先の節(3節)で触れた「もの言わぬ葵上」であるからこそ、この場面において語り出すさまは、やはり常軌を逸した印象がある。ここで着目すべきこ

とは、〈葵上（物の怪）〉の発言である。「もの思ふ人の魂は、げにあくがるものになむありける」と言う。物思いに苦しむ者の魂は、なるほど身から抜け出してしまふものでした、とは、一体何のことを言っているのか。これは、この場面よりも前の場面に、そのようなことも物語っている。

大殿には、御物の怪いたう起こりていみじうわづたひたまふ。この御生霊、故父大臣の御霊など言うものありと聞きたまふにつけて、思しつづくれば、身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなければ、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむと思し知らるることもあり。

その出所は明らかではないが、どうやら当時、物思いが過ぎると魂が肉体を離れてさまようという言い伝えが存在したようなのである。現在の都市伝説といったところか。ただ、都市伝説のようなものだと一笑に付してしまうにはいささか尚早で、新編全集も頭注で指摘する和泉式部の詠や伊勢物語の例もある。そうなると、民間の伝承の次元において広く膾炙されていた、という判断が妥当なものではないか。

つまり、この場面で、六条御息所は当時広く人口に膾炙していたその言い伝えを耳にしていた、ということなのであり、それを自身の身をもって体現しているということになる。

ところで、六条御息所の生活空間とはどのようなものであるのか。その邸は前坊のもので、都の六条にある。留意すべきはその邸自体のことではなく、御息所の身の周りの生活空間のことである。

御息所は高貴な女性ゆえ、あまり外界には触れることはなからう。そうであつてみれば、その生活空間はごく限られていて、閉鎖的な空間で日常を送っていることになり、それは想像に難くない。ゆえに、例の車争いの際の外出は、いかに一念発起の末のことであつたかと思ひ知らされる。

それならば、御息所は先のような言い伝えをどこで耳にするのか。それは、女房の口を介してのことであらう。高貴な御息所付きの女房であるのだから、知識も教養も高く美しい者が仕えている。それは、例の「中将のおもと」の下りからも判断できよう。御息所付きの女房は、あれやこれや身の周りの世話をしつつ、同時に内に籠りがちな女主人のために外界の情報をその耳に入れて差し上げるのである。御息所にしてみれば、外界の貴重な情報源なのであり、源氏の訪れを待つだけの御息所にしてみれば、日がな一日源氏のことを考えつつ、口さがない女房たちのおしゃべりに耳を傾けているのであらう。先の言い伝えにしても、そのような女房たちのおしゃべりから得られた情報であるのだらう。女房たちとて、女主人の幸福を願うからこそその奉仕なのであり、おしゃべりなのである。

そのおしゃべりには、源氏や左大臣家のことも含まれている、というのは当然のこと。女房たちの口から、源氏や左大臣家のことが出れば、御息所の耳は敏感に反応し貪欲に情報を摂取する。そしてその話題が終われば、語られた話をもとにあれやこれやと空想に耽る、といった状態なのではないか。それこそが六条御息所の生活空間ということなのであり、そうであつてみれば、六条御息所はこれまでの物語がそうであつたように、常に世間体というものを異常にまで気にかけて生活していることもうなづけるのではないか。下手

をすれば、それはときに「人笑われ」（葵卷）であり、ときに「人の漏り聞かむ」（夕顔卷）と語られる。御息所が常に世間体を気にかけながら日常を送っているということが、物語のどこどころで顔を出すのである。

御息所は、ものを思し乱ること年ごろより多く添ひにけり。つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんことと思す。さりとて立ちとまらるべく思しなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべくかめるも安からず、釣りする海人のうけなれや、と起き臥し思しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、なやましうしたまふ。大將殿には、下りたまはむことを、もて離れて、あるまじきことなども妨げきこえたまはず、「数ならぬ身を見まうく思し棄てむもことわりなれど、今は、なほいふかひなきにても、御覧じはてむや浅からぬにはあらん」と聞こえかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もや慰むと立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり。

この引用は車争いの騒動の後で、御息所自身のこのところの心情が改めて語られている部分である。御息所は「ものを思し乱ること年ごろより多く添ひにけり」と語られる。要するに源氏との関係が生じて以来の物思いである。もう源氏の心が自分に戻ることはないときとあきらめている。それではもういつそのまま源氏を思い切つて伊勢へ下向しようにも、ここでもまた世間体を気にかけている。そうかといって「こよなきさまにみな思ひくたすべくかめるも安

からず」で、進むも地獄、留まるのもまた地獄という状態なのである。自身を「釣りする海人のうけ」に喩え、波風によって右に倒れ左に倒れる「うけ」だとするのである。この表現は引き歌であるが、御息所自身そのような自己分析をもする聡明な存在でもある。常日頃から延々とこのようなことを考え続けているということなのである。頼みの源氏に伊勢下向を相談してみても、からんだような言われ方をして話にはならない。源氏との隔たりは、やはり大きいのである。その定めかねてい気持ちも紛れようか、として出かけたのが、あの御禊の日だった、というのである。

そもそも、物語というものも、その語り手によって語られるというものである。葵卷冒頭での御代替わりが語られた後、「まことや」と語り出された六条御息所の物語でも、御息所は何を気にしていたのか。その場面には直接語られていなくとも、それに前後する御息所の物語では、源氏との関係において、常に世間体ということが意識されていたと語られていたのではなかったか。御息所が源氏よりも七歳年上であることは、御息所にしてみれば、「いい歳をしてみっともない」という世間の「うわさ」となっているのだということになり、娘の伊勢下向に際していつそのこと源氏との関係を思い切ろうとすれば、「それ見たことか、源氏に捨てられた」という「うわさ」ということになって御息所自身を苦しめているのである。自身が少しでも引け目を感じてしまっていることや女房の口を介して語られた少しばかりの情報が、御息所の中で徐々に悪い方向に変容されていくのではないか。それらの「うわさ」の数々がやがては御息所自身の中で自分を貶める情報として醸成されてしまうという理屈である。御息所の逡巡とは、そのようなものではないか。ただ、そ

のような女主人に対する非難めいた情報が直接女房たちの口から語られるはずはなく、女房たちのときには行き過ぎてしまうおしゃべりのはしばしから、御息所はその想像をたくましくしているということなのであろう。

物語の行間を読む行為というのは、実際には語られていないことであっても、その背後にあるであろう語られていない物語をも読むということにつながっている。

7 六条御息所の逡巡、なおも深まる

左大臣家では懷妊している葵上が、物の怪のために苦しんでいる。験者の者たちが祈りを続け、次々と憑坐に移すものの、葵上の身体に憑りついたまま離れようとしないうちに執念深い物の怪が一つある。

左大臣家は都随一の者たちを招集し、その験者衆が祈っても離れない物の怪は異常な存在である。それは、葵上の身体に取り憑くものの特に苦しめるわけでもないが、片時も離れようもしない。そうであっても懷妊している葵上は「ただ、つくづくと音をのみ泣きたまひて、をりをりは胸をせき上げつついみじうたへがたげにまどうわざをしたまへば」という状態で、周りの世話を焼く者たちの心配も「いかにおはすべきにかとゆゆしう悲しく思しあわてたり」と語られる。葵巻ではこのように、左大臣家（葵上）と六条御息所とを交互に物語るが、新編全集頭注が鑑賞を付すように、御息所の屈辱的心情と物の怪の距離が徐々に近づきつつある。次の引用は、そのような御息所の心情をよく物語っているように。

院よりも御とぶらひ隙なく、御祈禱のことまで思しよらせたまふさまのかたじけなさにつけても、いとど惜しげなる人の御身なり。世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争ひに人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまでも思しよらざり。

御息所はここでも、正妻と愛人との圧倒的な格差を思い知らされることになる。葵上の容態が思わしくないのを院も心配し、あれやこれやと手を尽くす。その心配は院や左大臣家だけではなく、「世の中あまねく」であるという。ここでも御息所は「聞きたまふ」と（うわさ）によつて情報を得ている。その情報をもたらずのは、女房の口によるものであろう。「いとど惜しげなる人の御身」とは、葵上の身体のことと、〈我が身のことではないのだ〉と。その六条御息所の心情を物語はついに「ただならず思さる」と語る。さらには、これまで何年もそれほどでもなかった「御いどみ心」が、「はかなかりし所の車争ひ」によつて、御息所の「御心の動きにける」となつてしまったのだとも語る。車争ひは、やはり発端の一つだったのである。そして、左大臣家では事の重要性を把握していない。社会的地位のある者ほど、どれほどの人間を犠牲にできたのかという自覚に乏しいものである。ここにおいて、物語は御息所の心情が絶望的な状況であることを語る。

それでも、物語はひと息にたどり着くべき場所には到達しない。葵上の容態は危機的状况にあつても、物語は六条御息所のことを語り続ける。

うちとけぬ朝ぼらけに出でたまふ御さまのをかしきにも、なほふり離れなむことは思し返さる。やむごとなき方に、いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、ひとつ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと、なかなかもの思ひのおどろかさるる心地したまふに、御文ばかりぞ暮れつ方ある。「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいという苦しげにはべるを、え引き避かなむ」とあるを、例のことつけと見たまふものから、

袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき

山の井の水もことわりに」とぞある。御手はなほここの人の中にすぐれたりかしと見たまひつつ、いかにぞやもある世かな、心も容貌もとどりに、棄つべくもなく、また思ひ定むべきもなきを苦しう思さる。御返り、いと暗うなりにたれど、「袖のみ濡るるやいかに。深からぬ御事になむ。

浅みにや人は下り立つわが方は身もそぼつまで深きこひぢをおぼろけにてや、この御返りをみづから聞こえさせぬ」などあり。

同じ葵巻である。その身体が思わしくないのは、葵上だけではなかった。思えば、御息所はずつと長い間、源氏との関係に悩み続けていたのではなかったか。その気を紛らわせるための御禊の日の外出だったのではなかったか。御息所の身体も「かかる御もの思ひの乱れ」により思わしくなく、邸には斎宮が潔斎をしているので、他所

に移り病平癒の御修法などを行う。源氏も見舞いに訪れ、これまでの無沙汰などを詫びる。その詫び言の中には葵上の病状のことも含まれていて、御息所としては、あえて聞きたくはなくとも気にかかることではある。

ひと夜を過ごし、「うちとけぬ朝ぼらけ」に御息所は源氏を見送る。「1節」の夕顔巻の場面では、頭をもたげることが精いっぱいであったが、今回はしっかりとしている様子である。この辺りが結局は「うちとけぬ」ということにもなるか。ただ、この場面では、御息所の目を通して改めて源氏の美しさが語られる。目の前の源氏は「御さまのをかしき」であり、御息所の思いは「なほふり離れなむことは思し返さる」となる。つまりは、六条御息所という人は、いかに源氏に心惹かれていたのか、ということなのである。これまで幾度も繰り返された逡巡は、「ふり離れなむ」ということだったのである。御息所は世間体ということをも振り捨てて、源氏との別れを決断していたのである。それがひと夜の逢瀬でことごとく覆されてしまった。たとえ「うちとけぬ朝ぼらけ」の状態であってもである。その後、数行ばかり御息所の逡巡が語られる。一度覆ってしまった自らの意思は、結局元に戻ったということなのであり、源氏との別れを止めたことは、つまりは、このまま関係が続けていくということである。こうなると、「やむごとなき方（葵上）」が懷妊しているのだから、「いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば」「ひとつ方に思ししづまりたまひなむ」となるのは当然の帰結である。御息所は出口のない逡巡をくり返すばかりである。

そうこうするうちに、手紙だけが暮れ方に届いた、というのである。改めて引用部分を見直すと、源氏を送り出した「うちとけぬ朝

ほらけ」からわずか数行で「暮れつ方」となっている。これは、いかに御息所の逡巡が、長い堂々巡りであるかを語らずして物語っているよう。御息所は、日がな一日源氏のことばかりを考えて過ごし、今夜も源氏の訪れを待っていたのである。ところが、その暮れつ方に届いたのは「御文ばかり」であった。しかもその内容は、葵上の病状を心配する内容だけであった。御息所は、「例のことつけ」と突き放すものの、歌が口をついて出る。何もないところには、歌は生じないのである。この御息所の歌に源氏が歌を返す。その源氏の歌は、御息所の心情を理解していないようで、言葉の上面ばかりのやり取りに終始してしまっている。この期に及んで、御息所は決心を覆してしまったことを後悔しているように思われるのであるが、どうであろうか。源氏を振り捨てて、というあの決心は、一時の気の迷いだと自身に言い聞かせているのであろうか。

8 思わぬところでの源氏との再会

物語は左大臣家の葵上の様子を語るが、それがいつしか六条御息所のことになる。

この御生きすたま、故大臣の御霊など言ふものありと聞きたまふにつけて、思しつづくれば、身ひとつのうき嘆きによりほかに、人をあしかれなど思ふ心もなけれど、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむと思し知らるることもあり。年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれど、かうしも碎けぬを、はかなきことのをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御禊

の後、一ふしに思し浮かれにし心、鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君とおほしき人の、いときよらにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、現にも似ず、猛いかきひたぶる心出で来て、うちかなぐるなど見えたまふこと、度重なりにつけり。あな、心憂や。げに、身を棄ててや往にけむと、うつし心ならずおぼえたまふおりもあれば、さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれは、いとう言ひなしつべきたよりなりと思すに、いと名だたしう、ひたすら世に亡くなりて、後に恨み残すは世の常のことなり、それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを、現のわが身ながら、さる疎ましきことを言ひつけらるる宿世のうきこと、すべてつれなき人にいかで心もかけきこえじ、と思し返せど、「思ふものを」なり。

御息所は、左大臣家の様子をつぶさに耳にする。葵上から取り除けられる物の怪が、様々であると「聞きたまふ」ている。やはり、耳による情報である。ところがここで、御息所は、わが身を顧みる。「人をあしかれなど思ふ心もなけれど」の「人」は葵上のことであろう。そして、例の「もの思ひにあくがるなる魂」の言い伝えのことをわが身に照らしてみる。その契機としての「御禊」の後の夢なのだという。「かの姫君とおほしき人の、いときよらにてある所」とあり、この姫も葵上である。ここで留意すべきは、〈きよら〉の語が「姫君」に用いられていることである。かつての車争いの場面では乱暴を働かれる側の御息所に用いられた〈きよら〉が、ここに至り姫君方に用いられている。夢は御息所自身の夢なのであり、そ

の夢の中で「とかくひきまざぐり、現にも似ず、猛くいかきひたぶる心出で来て、うちかなぐる」といった乱暴狼藉はこの度は、御息所自身の行為である。そこで「身を棄ててや往にけむ」と古今和歌集の歌が想起される。まさに、そのような言い伝えがまことしやかに信じられていたのである。もともと、御息所にしてみれば、わが心の不安定さを理屈では説明できないと悟った結果、巷に流布しているあやしき言い伝えこそが、自身の心情を分析するよすがとして眼前にあるということなのであろう。ただ、もうこうなってしまうと、「人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世」であることを御息所はよく知っていて、自身の「宿世」を呪うしかない。さて、葵上の状態は変わらず、物の怪に対する祈りが続けられている。例の執念き物の怪も葵上の身体に取り憑いたまま離れない。語らぬはずの〈葵上〉が、「すこしゆるべたまへや。大将に聞こゆべきことあり」と発言する。これは物の怪の発言であるが、周囲の者はそれを葵上の言葉ととらえている。そこで語られるのは、源氏の目を通した葵上の姿である。

御几帳の帷子引き上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思ふことわりなり。白き御衣に、色あひいと華やかにて、御髪のいと長うこちたきを、ひき結ひてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしけれと見ゆ。御手とらへて、「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらわしう恥づかしげなる御まみを、いとた

ゆたげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。

源氏の目を通し、改めて捉えられる葵上の美しさである。美しいが「御腹はいみじう高うて臥したまへるさま」は、「よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし」という。白と黒とのコントラストも鮮やかに、「かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしけれ」と思う。目の前で葵上の苦しんでいる様を見て、源氏は手を取り涙を流す。それを〈葵上〉は「いとたゆたげに見上げてうちまもりきこえたまふ」と、次の瞬間〈葵上〉の目からも涙が流れる。この場面の葵上は、これまで読まされてきた葵上像とは異なるものがあり、それは物の怪の所作であるからである。源氏は、葵上が普段見せないような心弱さを見せることから、既に死を想定し語りかける。もし万が一のことがあつても、必ず巡り合うことができるのだという慰めなどをさまざまに語る。

ところが、〈葵上〉はそうではないのだと語る。それが、6節の冒頭で引用したこの場面である。つまりは、今、源氏と対面している葵上は、葵上本人なのではなく物の怪に取り憑かれた〈葵上〉で、その語りもそのまなざしも物の怪のものであったということなのである。普段はもの言わぬ存在であるからこそその異常性なのであり、その所作は葵上のそれではない。その物の怪こそが、験者衆の祈りにも屈せず葵上の身体に取り憑いて離れなかつた執念き物の怪だったのである。それでは、その物の怪の正体とは。

「いで、あらずや。身の上のいと苦しきをしばしやすめたまへ

と聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」と、なつかしげに言ひて、

嘆きわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変はりたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることと、聞きにくく思ひてのたまひ消つを、目に見す見す、世にはかかることこそはありけれど、疎ましうなりぬ。あな心憂と思されて、「かくのたまへど、誰とこそ知らね。たしかにのたまへ」とのたまへば、ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々近う参るも、かたはらいたう思さる。

「いで、あらずや。……」は、葵上の身体を借りた物の怪の発言である。どおりで「身の上のいと苦しきをしばしやすめたまへ」であり、どおりでまた「もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」と例の言い伝えの解釈も思い出されましょう。そして物の怪が不思議な歌を詠じる。新編全集は「信仰があつたらしい」と注する。源氏に語りかける言葉、源氏を見上げるまなざしのそれは、六条御息所のそれだったのである。

これまでも述べてきたように、六条御息所は聡明であり様々な分析をもし逡巡をくり返してきた。そのような人物がわが身とわが心とを制しかね、世間に言われているようなあやしき言い伝えをよすがとするしかない状態にまで陥り、その結果としてのこのような源氏との再会であつたのだ。もはや、御息所を救うのは、尊い真言で

も法華経でも呪文でもない。あやしき民間伝承のあやしき信仰しかない、ということなのであろう。そして、それをかなえることができるのは、今、目の前で見上げている源氏その人だったのである。

注1 六条御息所についての研究は様々あるが、例えば、檜原茂子『《嫉妬》―源氏物語の行動の基点―』・「むらさき」第二六輯、一九八九年七月。増田繁夫「葵巻の六条御息所」・『国文学解釈と鑑賞』別冊「人物造型からみた『源氏物語』」、一九九八年五月。藤本勝義『源氏物語の《物の怪》』、一九九四年、笠間書院、など

注2 新編日本古典文学全集、小学館。夕顔巻P147注二七・P148注七
なお、本稿の源氏物語本文の引用は、新編日本古典文学全集、小学館に拠る

注3 大野晋・丸谷才一『光る源氏の物語』上 中公文庫、一九九四年八月

注4 桐壺巻に「ただ、わが女御子たちの同じ列に思ひきこえむ」とある
注5 新編日本古典文学全集、小学館。桐壺巻P46

注6 新編日本古典文学全集、小学館。葵巻P24頭注鑑賞・批評
注7 「物思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」後拾遺和歌集・雑六・和泉式部

「思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えば魂結びせよ」伊勢物語・百十段

「身を捨ててゆきやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりける」古今和歌集・雑下・躬恒

注8 新編日本古典文学全集、小学館。葵巻P33頭注鑑賞・批評
注9 新編日本古典文学全集、小学館。葵巻P40注二

寛文期における長崎唐人と地役人に関する覚書

―「唐通事会所日録」所収記事から―

鍋本 由徳

はじめに

著者は以前、唐人踊を通じた長崎の唐人文化について論ずる機会があった。^①そこでは、唐人屋敷内に設置された舞台で催される二月の唐人踊のように、唐人自身の故郷の文化を再現するものがあれば、他方、日本人、特に長崎町人が唐人文化を模したのもあったことを指摘した。唐人屋敷に住む唐人にとり、日本人による演奏や演舞であつても「望郷の念」を抱くもので、また、長崎町人が異国文化を体感できる機会であつたことを述べた。

唐人をめぐる研究は、日本のみならず、中国をはじめとした東アジアからのアプローチも多数みられる。特に「華夷変態」をめぐる日中両国の研究史については、郭陽氏の研究にて、詳細に紹介・評価されている。^②

もつとも、明清交替期のなかでも、主要な典拠となる『華夷変態』の所収風説書などから、先行研究ではすでに、鄭氏政権によつて幕府へ援軍要請する日本乞師の時期、三藩の乱の時期、定高仕法の時期、海船互市新例（正徳新例）の四期に分けられるとする。国内での研究に目を向けると、一六七三（延宝元）年以後の分析が多数を

占める傾向にある。その要因の一つは、『華夷変態』に収められる唐船風説書が一六七四年以後、大量の収録されていることに拠る。またその時期は、鄭氏政権による日本乞師が終わる時でもあり、その点で、日本における延宝期は長崎唐人たちの活動に変化が見られる一つの画期となるのである。^③

他方、『華夷変態』は情報伝達の側面からの研究もあり、三藩の乱をめぐる鄭経の行動をめぐる研究や、それらの情報が日本へ伝達される経路をめぐる研究などが知られる。^④

また、長崎唐人の活動については、唐人文化をはじめ、長崎奉行や唐通事をはじめとした、役職に関わる研究が主となる。長崎唐人にかかる史料は『唐通事会所日録』や『唐人番日記』にみられる公務記録に近いもの、あるいは犯罪について記した「犯科帳」などに限定され、いわゆる唐人達の日常生活を知ることとはかなり難しい。唐通事については、制度分析や唐通事の家系研究、彼らを通じた長崎交易の実態解明が中心である。^⑤

以上のようなことから、十七世紀における長崎唐人については、延宝年間以後の状況が詳細に分析されてきたことは明白であるが、『唐通事会所日録』巻一に記載される寛文年間（一六六一―一七三）にかかる唐人についてはほとんど触れられないようである。

たとえば、日本乞師にかかる情報は、鄭氏の動きとそれに対する幕藩領主の動向は詳細に知られるが、唐船が来航する長崎に何らかの影響は与えていなかったのだろうか。また、唐通事会所が開設される以前、唐通事と唐人、長崎奉行らとの関わりはどうだったのだろうか。

わずかではあるが、残された記録のなかから、日本へ渡航した唐人たちと唐通事との関わりや、唐人と長崎奉行との関係を読み取ることが可能である。ここでは『唐通事会所日録』一（寛文期）に記されている内容を対象、特に寛文三年の唐船をめぐる一件を中心に紹介し、交易以外の事例に着眼点を充てていく。

一、日本乞師と唐人屋敷設置前の唐人

（一）日本乞師

十七世紀半ばの大陸は、明から清への王朝交替、いわゆる華夷変態の時期にあたる。日本における貞享年間、清国の影響下に置かれた商人や清国から認められた「公儀船」が長崎へ来航するようになった。明から清への王朝交替は、長崎に来る唐人にも影響を及ぼすのは必然であった。事実、十八・十九世紀における唐人屋敷の絵画や、長崎を描いた地誌の挿絵にみられる唐人の多くは辮髪となっている⁽⁶⁾。

鄭成功らにみられる明の遺臣たちの清への抵抗は直接的であるが、長崎に来る唐人たちへの影響はどうであったか。そもそも長崎に来る唐人は、国と国との交易をおこなうものではない。江戸時代、唐船が頻繁に来航したことは事実だが、大陸からの商船の多くは私

貿易であり、明の許可を受けた上での来航ではなかった。明との交易は朝貢貿易で、海禁政策が緩和されてきたとはいえ、公に日本や琉球への渡航は許可されていなかったからである。

一六四四年（和暦寛永二十一年・正保元年）、清が北京を占領して中国支配を宣言すると、中国南部にいた明の皇族と官僚は南明を建て清に抵抗した。その後、永曆帝を最後に明は滅び、そのなかで、明の遺臣として知られる鄭成功が台湾を拠点にして鄭氏政権を建て引き続き抵抗し、鄭成功の死後も鄭経らによって意思が引き継がれたものの、一六八三年、清に降伏した。

明の遺臣が江戸幕府へ援軍要請したことは「日本乞師」として知られる⁽⁷⁾。明から清への交替にかかる情報は日本へもたらされた。幕府は日本へ来る唐船からの情報収集につとめ、それらの情報は通訳である唐通事を介して翻訳され、江戸幕府へ伝達された。明の状況は長崎にいる明の商人によって伝えられ、長崎奉行へ注進された⁽⁸⁾。そこでは明の亡命政権樹立にまで言及され、微に入り細にわたって記されているが、「何も唐人共に色々相尋候へども、北京へ遠き国之もの共にて御座候故、十人は十色に申候、一圓口揃不申候へども、風聞之通書付指上申候、以上」とあるように⁽⁹⁾、唐人が伝える情報は必ずしも一致していなかった。

最初の日本乞師は一六四五（正保二）年、周崔芝が日本へ救援要請した時である。二通の書翰が長崎経由で江戸へ伝達された。この件については、林鶯峰が書翰を將軍へ読み上げ、老中松平信綱が井伊直孝宅にて鶯峰から内容を知らされた。長崎奉行馬場利重は江戸に、山崎正信は長崎におり、オランダ商館や長崎唐人の交易に関わっていた大目付井上政重が、これに関わった。

参考付表 1644～1689 蘭船・唐船来航数

年	西暦	蘭船	唐船	備 考
正保元年	1644	8		清の北京占領、崇禎帝の自殺
正保2年	1645	7		周崔芝長崎渡航（日本乞師開始）
正保3年	1646	5		黄徴明長崎渡航（援軍要請） 南京船渡来禁止
正保4年	1647	4		
慶安元年	1648	6	20	
慶安2年	1649	7	59	黄斌卿長崎渡航（援軍要請） 鄭成功の援軍要請
慶安3年	1650	7	70	
慶安4年	1651	8	40	
承応元年	1652	9	50	
承応2年	1653	5	56	
承応3年	1654	4	51	
明暦元年	1655	4	45	
明暦2年	1656	8	57	
明暦3年	1657	9	51	
万治元年	1658	10	43	
万治2年	1659	11	39	
万治3年	1660	8	42	
寛文元年	1661	11	39	清の遷界令
寛文2年	1662	8	42	鄭成功、台湾を奪還 鄭成功死去
寛文3年	1663	6	29	鄭経が長崎へ書翰（預り銀）
寛文4年	1664	8	38	
寛文5年	1665	12	36	
寛文6年	1666	7	37	長崎 宿町 / 附町制度
寛文7年	1667	8	33	
寛文8年	1668	9	43	
寛文9年	1669	5	38	
寛文10年	1670	6	36	
寛文11年	1671	7	38	
寛文12年	1672	7	43	
延宝元年	1673	6	20	
延宝2年	1674	6	22	最後の援軍要請（日本乞師終了）
延宝3年	1675	4	29	
延宝4年	1676	4	24	
延宝5年	1677	3	29	
延宝6年	1678	3	26	
延宝7年	1679	4	23	
延宝8年	1680	4	29	
天和元年	1681	4	9	
天和2年	1682	4	26	
天和3年	1683	5	24	鄭氏政権崩壊
貞享元年	1684	5	24	清による展海令
貞享2年	1685	4	73	※急激な唐船の増加
貞享3年	1686	4	84	
貞享4年	1687	3	115	唐人封込を計画
元禄元年	1688	3	117	唐人屋敷建設開始
元禄2年	1689	4	70	唐人屋敷の完成 中国人の移住

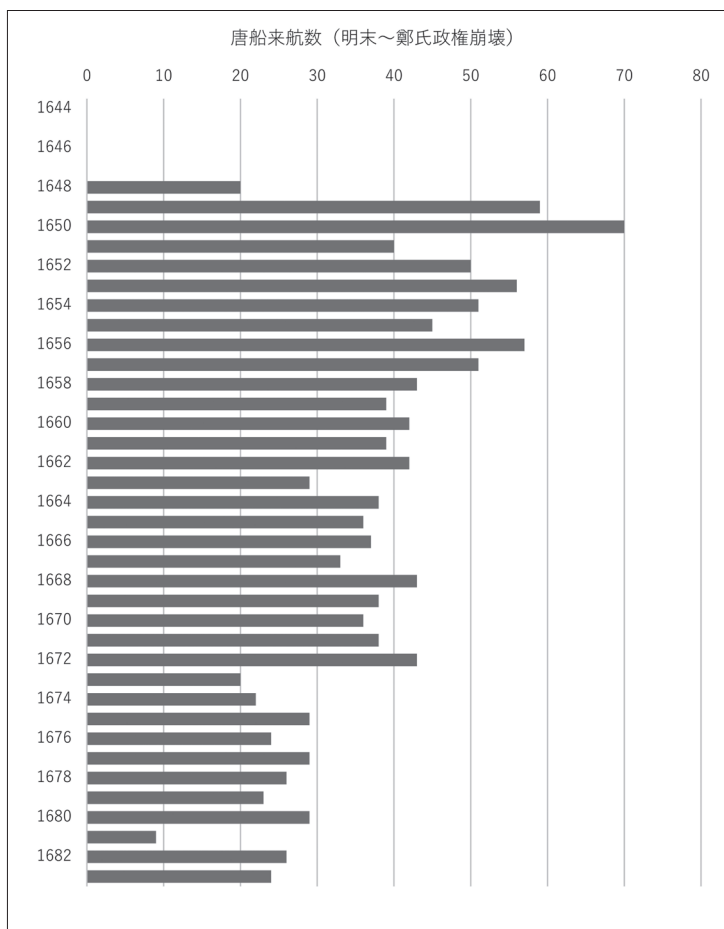
※船数は暫定として『長崎実録大成』記載記事による。

※表の網掛部分は「日本乞師」の時期にあたる

この援軍要請に対し、大名のなかには、京都所司代板倉重宗が甥の重矩に充てた文書に、「日本之御手柄此上無之候、御加勢遣申度候、我ら年より久敷御奉公成かたく奉存候間、同ハ大明へ渡申度候」とあることから、積極的な援軍を支持する者もいた。^⑩江戸時代において、一六一四、一五（慶長十九・二十）年の大坂の陣、一六三七、三八（寛永十四）年の島原天草一揆以来、日本国内では

武家による大規模な軍事行動はみられない。そのことが「御奉公成かたく」として大名家に意識づけられ、この明の遺臣に協力することは、軍事行動としての奉公を実現させる絶好の機会であると考えていたであろう。

その一方、在江戸の長崎奉行馬場正重と大目付井上政重は、在長崎の長崎奉行である山崎正信へ「日本と大明と勘合百年に及て無之



によりて、日本人唐へ出入無之候、唐船年末長崎江商賈に參候といへども、密々にて渡候よしに候間」と、たとえ唐船が長崎に來航して商売していようと、それは日本と明との「勘合」によるものではなく、私貿易（密貿易）としての交易である以上、幕府が公式に援軍要請の応えるものではないとして、要請を拒絶するよう指示している。^①

以後、三十年間にわたって日本へ援軍要請を送っているが、明の遺臣に対しては、鄭氏の交易利権（長崎貿易）を黙認するだけであっ

た。唐船による交易が、どこまで鄭氏政権の資金援助に寄与したのかをここで詳述することはできない。結果、明に近い立場の唐船と清に近い立場の唐船とがともに長崎へ入港することになるのである。そして、グラフにみられるように、長崎に來航する船数は、徐々に減少する傾向にあったことは明白で、最後の援軍要請である一六七四年前後で一気に減少した点に特徴がみられる。

（2）寛永から正保頃の長崎唐人

次に明清交替期における、長崎唐人の状況について確認しておこう。長崎へ来て、そのまま居を構えた者を住宅唐人と呼んでいる。十七世紀における住宅唐人の数は必ずしも確定的なものではないが、十八世紀に成立した「長崎実録大成」（長崎志）には「日本住居唐人之事」として、高寿寛以下、総勢三十五名を列記する。唐通事をつとめた家について、分家を含めて四十九家以上が存在し、^②「長崎実録大成」に記された住宅唐人の家は、その後、日本名を名乗る唐通事となっている。寛永期前後、唐人と日本人との日常的な接触は、唐年行司・唐通事ら、住宅唐人の家が中心であった。

いわゆる「鎖国」政策によって交易制限が進むと、唐人の活動へも影響が見られた。事実、一六三五（寛永十二）年、奉書船以外の異国渡航が許可されなくなった。さらに付帯事項として「日本住宅之異国人」も同前とされた。つまり、寛永初年までに日本に住宅を

持っていた住宅唐人も許可なく国外へ出ることはできず、故郷である明へ行くことも許されなくなったのである。徐々に長崎における自由交易にも制限が加えられていった。

唐人の場合、一六八九（元禄二）年に唐人屋敷への集住が義務化されるまで、行動範囲を限定されることはなかった。^⑮唐人屋敷へ集住する前、一六八八（貞享五）年七月、「唐人とも儀阿蘭陀人差置日本人与出合申不申様にいたし可然候」との指示が江戸幕府老中から長崎奉行山岡景助と宮城和澄に充てて出された。^⑯これは唐人屋敷への集住を前提とする法令に他ならない。

唐人屋敷が完成し、移住後も、当面の間は唐人の屋敷と長崎との往来制限は比較的緩かった。一六九三（元禄六）年、長崎奉行川口宗恒・山岡景助から「唐人共、常ニ用事無之時分、二ノ門合出候事

表 住宅唐人

家名	住宅唐人	家名	住宅唐人
平野	馮六※	吉島	鄭崇明
穎川	陳冲一	西村	陳潜明
穎川	陳九官	清川	張三峯
穎川	陳一官	呉	呉榮宗（一官）
矢島	陳奕山	呉	呉宗円
彭城	劉一水	周	周辰官
彭城	劉焜臺	王	王心渠
陽	欧陽雲臺	薛	薛八官
林	林公琰	薛	薛性由
林	林楚玉	楊	楊鳴悟（一官）
河間	俞惟和	蔡	蔡昆山（三官）
何	何毓楚	井手	曾二官
何	何存阿	黄	黄二官
高尾	樊玉環	陸	陸應元（一官）
中山	馬榮宇	鉅鹿	魏之琰
東海	叙敬雲	陳	陳九官
盧	盧君玉	江	江七官
鄭	鄭二官		

※長崎実録大成には出てこない

可為無用、用事有之、出候とても、乙名部屋・通事部屋之外ニ一切立寄申間敷候事」との指示が出された。^⑰これにより、唐人は、用事を出る際は通事へ告げる必要があり、用事がない時は、二ノ門から出ることを許されず、仮に用事があつたとしても、立ち寄れる部屋や乙名部屋と通事部屋に限定された。さらにその四年後には、唐通事を含め、地役人であっても、私用での唐人屋敷出入りは禁じられたのである。^⑱

制度としては、一六六六（寛文六）年に定められた宿町と附町がある。唐人商人は指定の宿町と補助の附町へ宿泊する制度であるが、それ以外に大きな制限、喧嘩禁止、火の用心、交易期限を記した法令は翌年に発布された。密貿易や喧嘩・騒動は厳しく取り締まられたが、彼らの服飾・食文化・歌舞音曲などは制限されていない。屋敷移住前、交易では規則により制限が加えられていったとはいえ、日常生活の上で、長崎町人と唐人との間に大きな障害はなかったといってもよいだろう。

二、寛文三年、オランダ船による唐船攻撃

（一）唐船拿捕と船員の思惑

さて、明遣臣たちによる日本乞師が展開された正保〜延宝期、長崎には鄭泰によって預けられた銀があつた。この餘銀問題をめぐる長崎での動向が『唐通事会所日録』の一六六三（寛文三）年以後に記されている。その発端を簡単に書けば、鄭氏一族によって長崎へ預けておいた銀の返還をめぐり、鄭成功の子である鄭経が返還を求め、それに対して、銀を預けた鄭泰の一族も返還を求めた一件であ

る。明清交替期における唐人研究の多くが延享年間以後を対象にしていることは先に述べたが、餘銀をめぐる動きについてまったく論じられていないわけではない。⁽¹⁷⁾ 先述の通り、明清交替にともない、船数は限られていたとはいえず、長崎には明に近い商船と清に近い商船とが入港する状態にあった。鄭氏政権内部で餘銀をめぐる争いが起こっているなか、長崎ではどのような出来事があったのであろうか。

一六六三（寛文三）年、オランダ船が女島沖で唐船を攻撃する事件があった。このことについて、『唐通事会所日録』では次のように記している。⁽¹⁸⁾

【史料1】

一 寛文四甲辰之年正月五日、今日承者、五島之沖ニておらんだ唐船を取候を久太郎様江戸ニ而被仰上候處ニ、御意被成候者、今度之儀者おらんだ御赦免被成候、重而之儀者、何国ニ而も日本江赴ク唐船取候儀被聞召上候ハ、御法度ニ可被仰付候之よし、おらんだ人ニ仰渡候由、此御申渡し高木作右衛門殿御出ニて何レもへ被仰渡候由、……（中略）……同六日、今日為御意高木作右衛門殿藤左衛門所江御出ニて被仰渡候覺、江戸へ申來候ハ、今度女嶋之沖ニておらんだ唐船を取候儀、不便ニ被思召上候間、御法度ニも可被仰付之處ニ、又おらんだ人訴訟申上候者、今度高砂を國姓森官ニとられ申候故、唐人者かたきニ而御座候ニ付取申候段申上候、就夫、今度ハ先ツおらんだ人を御赦免被成候、重而ハ何之國遠所ニ而も手さし仕、唐船を取申候ハ急度曲事ニ可被仰付候旨、おらんだ人江も被仰渡候間、……

一六二三年、台湾に進出したオランダが城砦を築き、その翌年に明

と交戦し、オランダの台湾進出を認めることが講和条件の一つとなっていた。そして城砦はゼーランディア城として再建され、オランダ東インド会社の拠点の一つとなっていた。大陸を追われてた鄭成功らが台湾に拠点をつくるため、一六六一年から一六六二年にかけゼーランディア城を攻撃して、陥落させた。オランダは台湾の拠点を失うことになった。「高砂を國姓森官にとられ」たことにより、唐人を目の敵にしたオランダ船が、いわば意趣返しとして、日本へ向かっている唐船を攻撃したことになる。

日本へ来る唐船を攻撃することは、幕府にとって許しがたいことであり、家康の頃も、日本へ来航する船は幕府による保護下に置かれていた。今回、幕府はオランダ船に対して、次に同じようなことをした場合は処罰することを告げた上で、今回の件を赦免したという。オランダ側は台湾を鄭成功に奪われたため、清と提携することによって、鄭氏政権に対峙することになる。事実、一六六二年には厦門や金門において鄭氏攻撃に赴いている。

オランダ船に攻撃された唐船の乗組員について、『唐通事会所日録』正月七日条に次のようにある。⁽¹⁹⁾

【史料2】

昨日被仰渡候段ニ、又中間江申來候ハ、我等旦那潮州之こうりよんハ國姓森官とハ敵対ニ而候間、只今此貳拾四番船ニ便乞罷り渡り候ハ、中々迷惑ニ逢、財命共ニ召とられ候儀ニ候間、當六月頃迄當御地江被召置被下候へのよし御訴訟被成可被下由申來候ニ付、中間相談ニ而此段被仰上候處ニ、与兵衛様殊外ニ中間御しかり被成候、左様ニ國姓と敵対ならハ、本台此段中間へ不申候哉と御しかり被成候、就夫、今度初官儀是非卯ノ貳拾四

番船帰帆之節便乞セ可被遣候、後貳拾四番船之船頭江も能々中間今申付、後初官大明ニ罷帰り候とても、何たる而さしも不仕候様ニ可申遣候、さなくハ与兵衛様御方今後貳拾四番船頭江御申含可被遣候よし、兎角今度之貳拾四番船ニ乗遣し可申候由御意被成候……………同十日、…左候へハ、追付私旦那之船潮州へ罷渡り候者、其船ニ乗り帰帆可仕候、今度国姓船ニ乗罷渡り候得者、身命無御座候段申上候、則被聞召上候而御赦免被成候、訴訟者御前へ御留メ被成、御扣者平石二郎左衛門ニ有之

オランダ人によって攻撃された唐船の船員たちは、幕府（長崎奉行）によって「二十四番船」に乗って帰国することを命ぜられていた。しかし、五島から送られてきた二十九名の船員のうち、一名は江戸からの指示があるまでそのまま待機するようにと長崎町年寄の高木作右衛門から伝えられていた。

このような状況のなかで、船員の一部が唐通事仲間へ話したことが【史料2】の内容となる。船員の雇い主は広東にある潮州の人で、この人物が鄭成功と敵対する側にあると書かれている。そのため、幕府から二十四番船で帰国せよと言われても、その二十四番船に乗るのは迷惑であると話したのである。ここから、二十四番船は、手鄭氏政権に近い船であること、一方、攻撃された唐船は鄭氏政権ではなく清側に近い船であったことは明白である。

台湾が鄭氏政権の掌中に収まって以来、オランダ東インド会社のバタヴィア政庁が清と軍事提携を結んでいたにもかかわらず、オランダ船が五島沖で攻撃した唐船は、清政権に近い船であった。政庁や台湾当事者のレベルでは明らかに「オランダ東インド会社+清」²⁴ 鄭氏政権」の構図があったが、末端のオランダ船にとっては、

唐船が鄭氏政権側であろうと清側であろうと、唐船であれば関係なく攻撃するといった考え方があったのであろうか。それとも清の船であることを知らず、鄭氏政権側の船と認知して攻撃したのであろうか。この件については後述する。

（2）長崎奉行の対応

これらの事実は日本にとってどのような影響を与えていたのかを改めてみておこう。

長崎に預けて置いた銀は、鄭氏政権内部の問題であったが、その返却をめぐる唐通事が困惑する状態が続いていた。この政権内部で内訌があったとの事実は幕藩領主レベルのみならず、町人レベルにも理解されていた²⁵。

日本乞師は、清に抵抗するため、明の遺臣が江戸幕府の援軍要請したもののだが、それに対して幕府は同意することはなかった。一六四五（正保二）年の鄭芝龍による援軍要請以来、日本乞師への態度は一貫して「援軍を送らない」立場であり、一方で、鄭氏政権と敵対して清国へ与することもなく、ただ沈黙を守る姿勢を貫いていた。

さて、攻撃された唐船船員は、二十四番船での帰国を拒否するだけではなく、半年間長崎に滞在したいとの要望を出してきた。それについて唐通事の間で話し合いがもたれ、船員の要望を唐通事から長崎奉行黒川正直へ報告することになった。それに対し、長崎奉行は「左様ニ國姓と敵對ならハ、本分此段仲間今不申候哉と御しかり被成候」と唐通事を叱ったという²⁶。

「彼ら船員が鄭氏政権に敵対しているのであれば、元來、唐通事

仲間から（奉行へ）申すことではないのか」とある。なぜ長崎奉行が唐通事を叱ったのか、その真意は記録されていないが、船員の要望を聞いて、その要望に関して奉行へ報告し指示を仰ぐべきことではないと奉行は考えていたのであろう。

鄭氏政権に対して商船が武器を購入して供給することは私貿易の範疇にあり、幕府が直接関与することではない。幕府は鄭氏政権にも清にも与していないのであり、その点で中立的な立場であった。奉行は当時の外交方針にしたがって船員に帰国を命じただけである。唐通事の行為は、それに対して再考することを暗に求めるようなものであり、見方によっては、鄭氏政権に敵対する清に荷担することにもなりかねない。

唐船を攻撃したオランダ船に対し、以後日本へ来る唐船に手出しすることを許さないとしたのは、交易のために日本へ来た唐船だからであり、清を扶けるためではない。ゆえに鄭氏に近い船の来航も許し、先述のように、彼らが鄭氏政権を支援するために武器を船に載せることも禁止しないのである。

奉行は唐通事に対して、長崎滞留を希望する者を説得して二十四番船に乗って帰国させること、船が明に戻ったとしても送り返される船員へ手出ししないように申し含めること、それでなければ、奉行自身が二十四番船の船頭たちへ話してもよいと伝えている。奉行は「兎角今度之貳拾四番船ニ乗遣し可申」と早く船員を長崎から出立させることを求めている⁽²²⁾。

ところが、唐通事仲間が奉行に叱責された数日後、唐通事の頼川藤左衛門は奉行に呼び出され、内々に状況説明を求められ、さらにさらに六、七月頃まで滞在を希望している初官に対して再度滞在の

歎願を出すように伝えている。その内容は、潮州の船が長崎へ到着したら、その船に乗って帰国すること、「今度国姓船ニ乗罷渡候得者、身命無御座候」と、長崎奉行の指示通りに乗船すれば命を落としてしまうと述べていたのである⁽²³⁾。

（3）船頭たちの訴訟と長崎奉行の見解

閏五月八日、潮州の許龍から長崎奉行に宛てて書翰が届けられた。差出の許龍は、オランダ船に攻撃された唐船船員の雇主「こうりょん」である。その内容は『唐通事会所日録』には書かれていないため知ることができない。戻ってこない船員あるいは交易船の安否についてであろうか。

七月十四日、新たに入港した潮州船らの船頭と、去冬にオランダ船によって攻撃された潮州船の船頭らが連判にて訴えを起こした。それによれば、未詳ではあるが、オランダ船によって捕まった蘇四官のことについて書かれているという。唐通事の間ではこの訴えの扱いを思案していたが、すぐには対応しなかった。約二ヶ月経過した九月二十七日、彼らの訴状を長崎奉行黒田正直、次いで島田忠政へ提出した⁽²⁴⁾。

十月六日に両奉行列座にて、オランダ船が唐船を捕らえたことに関する江戸での詮議の様子を唐通事へ伝えている。それによれば、オランダ船はどの船であろうと近づいてくることがわかれば、（オランダ船に唐船が近づいてきた）去年もそのような状況であったため、「さてハ國姓船と存打しつめ申候」と、近づいてきた唐船を鄭氏の船であると判断して攻撃し沈めたという。その上で、幕府は「以來ハ國姓船ニ而も、日本へ参ル船ニ手さしニ而も仕候ハ、急度可被

仰付」と、たとえ敵であっても日本へ来る船へ攻撃した場合は処罰する旨を決定したのだと唐通事へ伝えた⁽²⁵⁾。

十月まで船員が長崎に滞在していたのかは未詳である。もともと長崎奉行が即時帰国を求めていること、しかし奉行の配慮により六、七月までの滞在許可を求めることを認めたことなどを踏まえれば、滞在の再延長はなかったと考えられる。唐通事の一部は訴状の存在を知っていたが、一部は「此方不存候」と知らなかった。此方が誰を指すのかはわからない。

船員が長崎を離れ、そのあとで訴状の存在を知り、改めて奉行へ問うたことは何だったか。明確には書かれていないが、奉行による唐通事へに回答を見る限り、今後の交易の安全性をめぐる問題だったと思われる。鄭氏側と間違えられて船を沈められたことで、交易に不安を感じた船員や唐通事に対して、今後の交易の安全を保障したことになるう。

おわりに

本稿では、明清交替期におけるオランダ船による唐船攻撃をとりあげ、明と清の王朝交替ならびに鄭氏政権の動向が、長崎奉行や唐通事の活動に与えた影響の一端を見た。

一六六三年末、オランダ船によって清側の唐船が攻撃され、船員が長崎へ入るが、幕府は鄭氏の船に乗って帰国することを命じた。奉行は、住宅唐人以外の渡航唐人はただちに帰国しなければならぬという寛永期以来の決まりに従って命じたものであったが、船員は敵船での出国を拒否し、長崎滞留を唐通事を介して求めた。

唐通事はその要望を長崎奉行へ伝えたが、長崎奉行は、唐通事ができるべきことではないとして不快感を示すが、結果として滞在を許可することになった。

明清交替に際し、幕府は鄭氏政権、清のどちらの味方をするわけでもなかった。そして長崎へ来る唐船については、鄭氏であろうと清であろうと、交易船として来航する限り、他国の手出しを認めず、同等に扱っていた。その点で、船員の滞留を認めない原則は、鄭氏と清、どちら側にも与しないとする幕府方針に適ったものであったといえよう。

しかし、唐船の船員たちにとり、王朝交替は自身の身の上に関わる重要な問題であった。間に入る唐通事も自身の行動に注意を払わねばならなかった。

今回とは別のできごとを一例に出すと、一六六九(寛文九)年、長崎崇福寺住持任免をめぐる問題があった。唐寺住持の招聘や決定では長崎奉行の許可が必要である。万福寺の隠元が、崇福寺住持を任命するために僧を二名呼び寄せ、住持として曇瑞に決定したのだが、長崎奉行松平隆見がそれを知らず、曇瑞と崇福寺の即非が叱責され、唐通事の職務へも影響したのである。そこで問題となったのは、書翰の和解である。唐通事は全ての書翰を和解するものではなかった。⁽²⁶⁾

【史料3】

異国参候書簡和ヶ申候者、先年祚爺預銀之儀ニ付御公儀様ニ異国参差上ヶ申候書簡、并通事共江くれ候書簡をハ和ヶ指上ヶ申候、其外之往来之書をば通事共立合改見申候て、きりしたん宗門之事書候物、或者御法度之事書たるもの有之候かと改申迄

にて、御法度事無之書翰をば終ニ和ケ上ケ候覺も無之

と、幕府へ出された書翰や唐通事へ出された書状については和解するが、それ以外については唐通事仲間で相談し、キリスト教をはじめとした違法なものでないかどうかを確認し、違法でないとしたものを和解したことはない、と唐通事は長崎奉行へ弁明した。

奉行は、では今回の件では書状はなかったのかと尋問したところ、以前書翰を提示されたことはあったが、最終的に和解していないと答えている。唐人たちが持参した書翰についても、通事のなかで検討していたことが奉行へ伝わっている。

これは唐通事としての役割は何だったのかを提起するものである。『唐通事会所日録』一を具に見ていくと、唐人屋敷が完成して唐人の行動が大きく制限されていく前の唐通事の問題が随所に現れることがわかるのである。

註

- (1) 拙稿「江戸時代、長崎唐人番・唐通事の記録などにみる日中関係―長崎に残る唐人文化をめぐって―」（『東アジア日本語教育・日本文化研究』第二十二輯 二〇一九年三月）。
- (2) 郭陽「明清交替期の東アジア海域と華人海商：『華夷変態』を中心とって」（学位論文 二〇一四年） https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail.md/?lang=0&amode=MD823&biid=1485055 二〇一九年六月二十五日閲覧。
- (3) 龐新平「『華夷変態』から見た清初の高禁と長崎貿易」（『大阪経大論集』第五五巻第一号 二〇〇四年五月）などが挙げられる。
- (4) 郭陽「唐船風説書に見る鄭經の「西征」」（『九州大学東洋史論集』四二号 二〇一四年三月）、松尾晋一「『華夷変態』と対馬宗家からの「唐兵乱」情報」（『長崎県立大学国際社会学部研究紀要』第一号

二〇一六年）など。

- (5) 宮田安「唐通事家系論攷」（長崎文献社 一九七九年）、李獻璋「長崎唐人の研究」（親和銀行ふるさと振興基金 一九九一年）、林陸朗「長崎唐通事―大通事林道榮とその周辺」（吉川弘文館、二〇〇〇年）など。
- (6) 「長崎古今集覧名勝図絵」（長崎文献社 一九七五年）、『唐館図蘭館図絵巻―長崎県立美術館蔵』（長崎文献社 二〇〇五年第二版改訂）、『長崎唐館図集成―近世日中交渉史料集』（関西大学出版部 二〇〇三年）などで見ることができる。
- (7) 「華夷変態」や「通航一覧」などに鄭芝龍や鄭成功らが幕府へ送った書簡が所収されている。前者は江戸幕府幕閣へ送られた一六四四（正保元）年以来、一七一七（享保二）年までの唐船風説書を編纂したものである。清が建國宣言した年からのものであることから、鄭氏による日本乞師が重要な画期になっていることを江戸幕府も認識していたことを示す。後者の完成は一八五三（嘉永六）年、この年はいわゆる黒船来航年にあたり、幕府の対外政策が大きく展開する頃にあたる。このいずれにも日本乞師は重要な画期として扱われている。
- (8) 「大明兵乱伝聞自長崎注進」（『華夷変態』上冊 東洋文庫叢刊 一九五九年）など。
- (9) 「華夷変態」上冊、八頁。
- (10) 「華夷変態」上冊、八頁。
- (11) 「通航一覧」巻二百十二。
- (12) 宮田前掲「唐通事家系論攷」、同「補遺唐通事家系論攷」「長崎市立博物館館報」第二十五号 一九八五年、同「続補遺唐通事家系論攷」「同前書」第二十六号 一九八六年など。唐通事の家系をまとめたものであり、なかには十七世紀の住宅唐人を祖とする家以外も含まれている。
- (13) 拙稿前掲「江戸時代、長崎唐人番・唐通事の記録などにみる日中関係。李前掲「長崎唐人の研究」。
- (14) 「長崎御役所留 中」（『近世長崎・対外関係史料』 思文閣出版 二〇〇七年）、一三八―一三九頁。
- (15) 大日本近世史料「唐通事会所日録」一（東京大学出版会 一九五五年）、三二九頁。

- (16) 『唐通事会所日録』二、三三九～二四六頁。
- (17) 郭陽前掲「明清交替期の東アジア海域と華人海商」。
- (18) 『唐通事会所日録』一、二二頁。なお、本事件をめぐり、木村直樹「異国船紛争の処理と幕藩制国家―一六六〇年代東アジア海域を中心に―」(藤田覚編『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社 二〇〇〇年)があり、日本とオランダとの交渉が詳述されている。
- (19) 『唐通事会所日録』一、二二頁。
- (20) 中村質「初期の未刊唐蘭風説書と関連史料―幕府の海外情報管理をめぐって―」(田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館 一九八七年)所収、史料3「寛文三年台湾鄭氏内訌風説」五三五～五三六頁。
- (21) 『唐通事会所日録』一、二二頁。
- (22) 『唐通事会所日録』一、二二頁。
- (23) 『唐通事会所日録』一、二三頁。
- (24) 『唐通事会所日録』一、二五頁。
- (25) 『唐通事会所日録』一、二四頁。
- (26) 『唐通事会所日録』一、二三六・二三七頁。

執筆者紹介（執筆順）

近藤 健史 教授（通信教育部）

高田 智之 ジャーナリスト（元共同通信社記者）

木村 一 非常勤講師（通信教育部）

鍋本 由徳 准教授（通信教育部）

猪野 恵也 准教授（通信教育部）

堀井 弘一郎 非常勤講師（通信教育部）

高綱 博文 教授（通信教育部）

Ulysses (1922) 第7挿話 “Aeolus” の「見出し」について —テキスト、解釈、影響—

猪 野 恵 也

はじめに

Ulysses (1922) 第7挿話 “Aeolus” は比較的読み易い挿話であるが、「見出し」が付されており、再読してもその奇抜な文体に読者は驚いてしまう。なぜ Joyce は “Aeolus” に「見出し」を付けたのか。Joyce の意図を探究しても結局絶対的な正解を得ることはできない。例えば、第15挿話 “Circe” は小説の伝統的な表現形式である散文ではなく、ラディカルな劇形式で描かれている。計画表によれば “Circe” の technic は hallucination である。また、Richard Ellmann によれば Otto Weininger (1880-1903) の *Geschlecht und Charakter* (1903) の影響があるという。⁽¹⁾ なぜ Joyce は hallucination を描き、*Geschlecht und Charakter* の枠組みを採用したのか。正確な意図を探るのはやはり無駄な作業である。ならば、各挿話に潜在するいわば文化的コンテキストをその一端であっても明らかにすることに興味が湧く。本稿は少し焦点化して “Aeolus” の「見出し」に着目したい。「見出し」にはどんな背景が潜在しているのだろうか、探ることにしたい。

1. 「見出し」がつけられるまでの創作過程

“Aeolus” の文体の特徴としてまず想起されるのは、すでに述べたように大文字で書かれた63もの「見出し」である。だが、初出の1918年10月号の *Little Review* には「見出し」が付されていない。そこで “Aeolus” の創作過程を追ってみたい。1918年5月18日付 Harriet Shaw Weaver 宛の手紙において Joyce は第6挿話 “Hades” が活字にされており、1日か2日で送られると述べている (“... is now being typed and will be sent in a day or two”).⁽²⁾ 同じく1918年7月29日付 Harriet Shaw Weaver 宛の手紙では、2、3日前 (“A few days[ago]”) に第6挿話 “Hades” を Ezra Pound (1885-1972) に送り、Harriet Shaw Weaver に第7挿話 “Aeolus” を送るつもりだと述べている。⁽³⁾ 同じく1918年8月25日付 Harriet Shaw Weaver 宛の手紙では、“Aeolus” を数日前 (“some days [ago]”) に Ezra Pound に送ったと述べている。⁽⁴⁾ Michael Groden は、これらの内容を踏まえて、現存していない first drafts から autograph fair copy までの創作期間を1918年5月中頃から8月中頃までとし

ている。⁽⁵⁾

その後、manuscript あるいは typescript を経て、1918 年 10 月号の *Little Review* に “Aeolus” が掲載された。この *Little Review* の “Aeolus” にはすでに述べたように「見出し」がない。この *Little Review* の “Aeolus” の冒頭部分を確認しておく。

Grossbooted draymen rolled barrels dullhudding out of Prince's stores and bumped them up on the brewery float. Grossbooted draymen rolled barrels dullhudding out of Prince's stores and bumped them up on the brewery float.

— There it is, John Murray said. Alexander Keyes.

— Just cut it out, will you? Mr. Bloom said, and I'll take it round to the *Telegraph* office.⁽⁶⁾

第一文が繰り返されているが、原文のままである。「見出し」がないことが明白に確認できる。

Joyce の手は *Little Review* の後も緩まないで、創作過程をさらに追いたい。*Little Review* 用の typescript に Joyce は訂正と加筆を続けた。1921 年の中頃、Joyce は、フランスの印刷業者 Maurice Darantiers に加筆訂正した “Aeolus” を送る。⁽⁷⁾ 「見出し」がついた時期は、Groden によると、1921 年 8 月初旬から同年 10 月までという。⁽⁸⁾ 1921 年 10 月 7 日付 Harriet Shaw Weaver 宛の手紙を引用したい。

TO HARRIET SHAW WEAVER

7 October 1921

9, rue de l'Universite, Paris VII

Dear Miss Weaver: A few lines to let you know I am here again with MSS and pencils (red, green and blue) and cases of books and trunks and all the rest of my impedimenta nearly snowed up in proofs and nearly crazed with work. *Ulysses* will be finished in about three weeks, thank God, and (if the French printers don't all leap into the Rhone in despair at the mosaics I send them back) ought to be published early in November. I sent the *Penelope* episode to the printer as Larbaud wants to read it before he finishes his article for the *Nouvelle Revue Française*. The *Ithaca* episode which precedes it I am putting order. It is in reality the end as *Penelope* has no beginning, middle or end. I expect to have early next week about 240 pages of the book as it will appear ready and will send on. *Eolus* is recast. *Hades* and the *Lotus-eaters* much amplified and the other episodes retouched a good deal. Not much change has been made in

the *Telemachia* (the first three episodes of the book).⁽⁹⁾ (下線は筆者による)

この手紙の下線部に着目すると、第 17 挿話 “Ithaca” を「整えている」とあり、“Aeolus” は書き直された (“recast”) という。この手紙において、念入りに作品を完成させようとしている Joyce の意図を窺い知ることができる。

1922 年 2 月 2 日、Shakespeare and Company より出版された *Ulysses* には「見出し」が付されている。書き出しを確認しておこう。

IN THE HEART OF THE HIBERNIAN METROPOLIS

Before Nelson's pillar trams slowed, shunted, changed trolley started for Black-rock, Kingstown and Dalkey, Clonskea, Rathgar and Terenure, Palmerston park and upper Rathmines, Sandymount, Green Rathmines, Ringsend, and Sandymount Tower, Harold's Cross. The hoarse Dublin United Tramway Company's timekeeper bawled them off:

— Rathgar and Terenure!

— Come on, Sandymount Green!⁽¹⁰⁾

“IN THE HEART OF THE HIBERNIAN METROPOLIS” と「見出し」を確認することができる。では、以下に続く 62 の「見出し」を読者はどのように読んだらよいのか。東川正彦によれば「見出し」を付けたのは Myles Crawford であり、63 のそれぞれの「見出し」に東川自身の精読に基づいた丁寧なコメントが付されている。一例を示そう。8 番目の「見出し」についてである。

WE SEE THE CANVASSER AT WORK

ブルームの働きぶりを一体誰が見ているのだろう。「見出し」を書いたクロフォードが、一つお手並み拝見、ということじゃないか、と言っているようである。⁽¹¹⁾

このコメントを読むと Crawford の生身の息吹が「見出し」から伝わってくるようだ。さらに東川は次のような突っ込んだ指摘をしている。

「見出し」そのもの（すなわちそれはクロフォードの編集の仕方ということである）が、本文中のどんな描写よりも、クロフォードという人間を良く描写しているのだ、と言って良いだろう。⁽¹²⁾

「見出し」は「本文中のどんな描写よりも、クロフォードという人間を良く描写して

いるのだ」という示唆的な指摘。東川は、「見出し」を付けたのは Myles Crawford であるという前提から “Aeolus” 中の「見出し」を読んでいる。だが、Crawford 自身が客観視され、何者かによって描写されていると指摘しているのである。何者かによる描写。つまり、東川はメタレベルの語り手の存在に、ひいては作者といういわばブラックボックスを経由した文化的コンテキストに無意識的に言及しているのだ。メタレベルの語り手の存在と文化的コンテキスト。この2点は Joyce の意図の結果というべきなのだろうか。我々は Joyce の意図を相対化することができるのではないだろうか。少し Joyce の意図を相対化する試みをしたい。

2. Joyce の意図

手書き原稿などを確認すると Joyce はかなり念入りに作品の創作をしていることがわかる。だが、Joyce の意図が全てなのだろうか。東川の指摘のように、“Aeolus” を読む読者の解釈ということも念頭に置くべきではないのか。Joyce 文学における「見出し」で思い浮かぶのは *Dubliners* (1914) の “A Painful Case” である。“A Painful Case” を少し考察してみたい。“A Painful Case” に登場する *Dublin Evening Mail* の「見出し」は Mrs Sinico の事故死を伝えている。Great George's Street South にある安食堂で、偶然、その記事が Mr Duffy の目に留まり、彼は自宅の寝室でささやきながら “a paragraph” (108) ⁽¹³⁾ を読み直す。記事の内容がそのままページ上に掲載され、読者の目に直接触れることになる。

DEATH OF A LADY AT SYDNEY PARADE

A PAINFUL CASE

To-day at the City of Dublin Hospital the Deputy Coroner (in the absence of Mr Leverette) held an inquest on the body of Mrs Emily Sinico, aged forty-three years, who was killed at Sydney Parade Station yesterday evening. The evidence showed that the deceased lady, while attempting to cross the line, was knocked down by the engine of the ten o'clock slow train from Kingstown, thereby sustaining injuries of the head and right side which led to her death. (109-111)

以下、Mrs Sinico の死亡記事は、“No blame attached to anyone” というやりきれない結論に至るまで掲載されている。この記事は Mr Duffy が読んだ内容と同じである。同時に読者はこの記事を読む Mr Duffy の心の中を覗きこんでいるようだ。なぜなら彼は一心不乱に記事の最後まで読んでいることが伝わってくるからである。「見

出し」の“DEATH OF A LADY AT SYDNEY PARADE”は、Mrs Sinico に別れを告げた後も内心彼女のことを気にかけていた Mr Duffy の注意を引いただろう。副題の“A PAINFUL CASE”は、Mrs Sinico の事故死ばかりではなく、本当に孤独になってしまった Mr Duffy の絶望的な状況を言及しているようで大変効果的である。Marvin Magalaner はこの新聞記事の文体の特徴について次のように指摘している。

Since this newspaper article in the story is intended to simulate the dead matter-of-factness of mediocre journalistic prose—a level approached by all the Dublin papers of the time that I have examined—one might think that Joyce's painstaking efforts could have been saved for passages more worthy of artistic care. ⁽¹⁴⁾

“the dead matter-of-factness of mediocre journalistic prose”がこの記事の特徴である。Mr Duffy の Mrs Sinico に対する愛情の拒否。そのせいで孤独を感じ、飲酒に耽り、結局事故死した Mrs Sinico。そして彼女の事故死を知って衝撃を受けた Mr Duffy。この密やかな恋愛ドラマと新聞記事の陳腐な文体は対照的である。「・・・を真似ようと意図されている」(“… is intended to simulate …”)、「ジョイスの大変な骨折り」(“Joyce's painstaking efforts”)とあるのは示唆的である。なぜなら、単調な文体を計算する Joyce の意図を Magalaner は前提としているからである。

やはり Joyce の意図が全てなのであろうか。テキストは解釈されうるものという一面もあるのではないだろうか。例えば、C.H. Peake によれば、Mr Duffy は人間関係に対する見方を変えない、彼の痛切な経験は彼のこれからの変化を約束するものではないという読みをしている。⁽¹⁵⁾ この読み方は Mr Duffy の未来を予想する読み手中心の態度であり、創造的な解釈で興味深い。Peake のこのような読み方を踏まえて、テキストに対する立ち位置を読み手中心としてみたい。読者の解釈を強調したいのであればそれなりの手続きが必要である。すなわち、作者の意図を相対化しなければならない。Robert Eaglestone は、“In many novels or plays, several points of view are presented, for example, through different characters. Which point of view is the author's? And even if there are passages written in the first person ‘I’, how do we know if this is the author?”と作者の意図を探ることに疑問を呈している。⁽¹⁶⁾

さらに、ロラン・バルト(1915-80)は「作者の死」において次のような指摘をしている。

われわれは今や知っているが、テキストとは、一列に並んだ語から成り立ち、唯一のいわば神学的な意味(つまり、「作者＝意味」の《メッセージ》ということになるだろう)を出現させるものではない。テキストとは多次元の空間であっ

て、そこではさまざまなエキリチュールが、結びつき、異議をとねえあい、そのどれもが起源となることはない。テキストとは無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である。⁽¹⁷⁾

バルトによればテキストとは「引用の織物」であり、解釈されるものである。もっと言えば、「読者の誕生」を唱えている。⁽¹⁸⁾ バルトはテキストにおける作者の絶対的な地位を相対化している。

A Portrait of the Artist as a Young Man (1916)⁽¹⁹⁾ で Stephen Dedalus は、作品に対する芸術家（作者とも言ってよい）の位置について Lynch を相手に述べている。よく引用される重要な個所の一つである。

The artist, like the God of the creation, remains within or behind or beyond or above his handiwork, invisible, refined out of existence, indifferent, paring his fingernails. (219)

Stephen のこの言葉はどのように理解されるべきなのか。創造物において芸術家の意図を認めるのか認めないのか。この引用文を一般的な問題として捉えてみたい。C.H. Peake はこの一節の読み方を教えてくれる。

Certainly in one sense he[the artist] is detached, but as God may be said to be detached, because all his concern has been projected into the creation, where it fills every person with vital force, as Stephen had seen in his religious period every leaf and twig charged with God's power and love. ⁽²⁰⁾

芸術家は「思いの丈のすべて」（“all his concern”）を作品に込めたなら、もう作品には無関心であり、自己の存在を消し、神のごとく作品から離れる。観賞者（あるいは読み手）は作品を通して人間の生命力なり新しい価値観を感じ取り、解釈をする。このような構図となれば作品における芸術家の意図を探る事自体あまり意味がなくなってしまう、観賞者即ち読者の解釈を強調してもよいということになる。

“Aeolus” に話を戻そう。 *Ulysses* 中の新聞について Kershner の指摘が参考になる。

I want to suggest that Joyce, sensitive to the disturbing political implications of modernist specialization, what we might call the hypertrophy of the author function, is borrowing what Benjamin saw as a potential ‘remedy’ from the newspaper, willfully fragmenting his own authorial voice into the multitude of

forms and voices that, in *Ulysses*, demands the reader's active participation. ⁽²¹⁾

(下線は筆者による)

Joyce はいわば創造主としての声を複数に分断し、*Ulysses* の読者の多様な解釈を促している。それゆえ、読者が「見出し」の意味付けをすべきであり、読者がその背景をあぶりだすべきだということになる。

3. 「見出し」の解釈

それでは「見出し」についての解釈を時系列に沿っていくつか示そう。Hodgart によると「見出し」は“headlines”というよりも、挿絵あるいは写真に対する匿名の編集補佐(“an anonymous sub-editor”)が付けた“captions”の方が適切だとしている ⁽²²⁾。この解釈に Peake は異を唱え、「見出し」は“headlines”、“sub-headlines”であり、“Aeolus”中の“headlines”はジャーナリズムにおけるレトリックの墮落を示していると指摘している。⁽²³⁾ いずれにせよ読み手による意味付けであるが、突っ込んだ解釈とはいえない。だが、Karen Lawrence は少し詳しく解釈している。

The headings function as the sign of language divorced from a single consciousness, however, not only because they are so obviously written and printed but also because they represent anonymous, collective discourse. For the language of the headings is the borrowed language of that agency of collective authorship, the press. ⁽²⁴⁾ (下線は筆者による)

それぞれの「見出し」は匿名のかつ集合的ディスコースを表すという指摘。そして「見出し」に対して複数の語り手の存在を認めること。すなわち、「見出し」をつけた語り手は「第2の語り手」⁽²⁵⁾あるいは“arranger”⁽²⁶⁾という単一の人格の概念にとどまらないということになる。複数の「見出し」を付けたのは単一ではなく、複数の人格であり、それぞれの「見出し」から複数の「声」がそろそろ読者に聴こえてきそうである。

それぞれの「声」には出典があるはずである。ここで「見出し」の出典について辿ってみたい。Francis Phelan によると、“Aeolus”の「見出し」には Arthur Griffith (1872-1922) の新聞 *Scissors and Paste* の影響が見られるという。⁽²⁷⁾ “Aeolus”の「見出し」はカットスクエア、断片、ちぎれた縁の再整理であり、*Scissors and Paste* の「見出し」と類似している。「見出し」にこだわらず、もう少し広げて言えば、当時の新聞の種類について *Scissors and Paste* だけがもちろん 20 世紀末の Dublin の新聞では

ない。Kershner によれば 1904 年の Dublin においてメジャーな新聞は 14 種類に及ぶという。⁽²⁸⁾ Kershner は当時の新聞をめぐる様相について次のように説明している。

Newspapers of the time had no choice but to stake out a position on most of the issues of the day-nationalism versus maintenance of the Union, further Catholic emancipation versus the status quo, support of tenant rights versus support of landlords, Home Rule versus the rule of Parliament, and, of course, the question of whether or not to support Parnell, which continued to be a divisive issue for years after the man's death. Indeed, since newspapers took a rather more active involvement in cultural issues than they do today, and since those cultural issues themselves usually had political ramifications, papers were organs for the arts not only through reviews of and publicity for books, concerts, and plays, but also through the poems and stories printed in them on a regular basis. ⁽²⁹⁾

この引用によれば、各新聞はそれぞれの政治的立場を明らかにしている。しかも各新聞を比較するとそれぞれの立場は対極的となる。例えば、ナショナリズム対ユニオン、ホームルール対議会、パーネル対反パーネルなどである。さらに各新聞は、書評や広告、詩や物語の連載を載せることによって芸術のための機関となっている。たくさんの新聞が発行されていたということは、同時に様々な「声」が当時の Dublin にはあふれていたということである。Patrick Collier も同じような指摘をしている。

Thus in 1904 Ireland, separate newspapers represented competing wings of the nationalist movement and answered back to various Unionist papers. Irish newspapers at the turn of the century may have reified a sense of “Ireland a Nation,” but they also emphasized the ongoing contestation and revision within this project. By the time of *Ulysses*, Joyce had come to emphasize the troubling aspects of this process. ⁽³⁰⁾

この指摘によれば、やはり、ナショナリスト寄りの複数の新聞、ユニオニスト寄りの複数の新聞が存在する。それぞれの新聞がそれぞれの主張をし、応答しあう。突っ込んでいえば、論争し訂正するという。つまり、「声」がただ雑然とあふれていたのではなく、いわば対話をしている「声」があふれていたということになる。ちなみに 1910 年の *Thom's* を調べてみると Dublin で 78 種類もの新聞の存在を確認することができた。⁽³¹⁾ 1904 年の状況とその後の状況を比べても、あまり変わらないというこ

とになる。多様な新聞の「声」の存在に *Ulysses* の “Aeolus” の背景すなわち文化的コンテクストを求められると私は考えたい。“Aeolus” は当時の「うるさい」ジャーナリズムの反映である。ただし、第4挿話 “Calypso” において Leopold Bloom がトイレで用を足した時、彼は雑誌ではあるが *Titbits* でお尻を拭いていた。新聞は一般の人々にとって束の間で軽い存在であることも忘れてはならない。すなわち、新聞の「声」は軽んじられているか、読んでも簡単に忘れ去られてしまうのである。

4. 複数の「声」による複数の「見出し」の影響

それでもやはり、Bloom は *Titbits* に夫婦の連名で何か書いて原稿料をせしめようと反応している。Bloom は新聞や雑誌に何かしらの反応しているのである。20 世紀末の Dublin には各新聞による対話的な「声」があふれていた。このことからさらに何が言えるのだろうか。Cheryl Herr は “Aeolus” 中の「見出し」について次のように述べている。

By the same logic, the headings signify, among other things, the attempt of the press to hold sway over discourse in Irish society. This effort to control becomes critical when we consider that what the press presents as fact is often a seemingly authoritative version of personal opinion. ⁽³²⁾

“Aeolus” の「見出し」はアイルランド社会におけるディスコースを支配しようとする試みであり、「見出し」は事実を簡潔に要約しているのではなく、個人の見解となっている。ここで少し実際に「見出し」の実例を考察してみたい。例として 48 番目の「見出し」を考察したい。Stephen が、二人の敬虔で貧しい老女すなわち Anne Kearns と Florence MacCabe を登場させ、老女二人が Nelson's pillar を登り、Dublin の街を見学するだけの小話を professor MacHugh を相手にしている場面である。

DEAR DIRTY DUBLIN

Dubliners.

— Two Dublin vestals, Stephen said, elderly and pious, have lived fifty and fiftythree years in Fumbally's lane.

— Where is that? the professor asked.

— Off Blackpitts, Stephen said.

Dump night reeking of hungry dough. Against the wall. Face glistening tallow under her fustian shawl. Frantic hearts. Akasic records. Quicker, darlint!

On now. Dare it. Let there be life.

— They want to see the views of Dublin from the top of Nelson's pillar. They save up three and tenpence in a red tin letterbox. They shake out threepenny bits and sixpences and coax out the pennies with the blade of a knife. Two and three in silver and one and seven in coppers. They put on their bonnets and best clothes and take their umbrella for fear it may come on rain.

— Wise virgins, professor MacHugh said. (7.921-937)

Stephenはこの小話をする前に“Dublin. I have much, much to learn.”(17.15)と思っている。Stephenは、Dublinを去ってパリに赴いたものの、母の危篤の電報を受け取り、急遽帰国した。亡き母の霊におびえつつもStephenのDublinに対する見方に変化があったと読みたい。StephenにはもはやDublinがヨーロッパの辺境の地で憎悪する対象ではなくなったのではないか。「見出し」の“DEAR DIRTY DUBLIN”について、18世紀のアイルランドの女性作家Lady Sydney Morganが造り出したという注釈があるが⁽³³⁾、諸説があり、すでに人口に膾炙していた言葉である。この「見出し」はStephen自身が、いや、Stephenの心境を代弁する第三者が付けた「見出し」として見なしたい。それどころか、当時膾炙していた言葉であるならば、Dublinに対する愛着を表現する「見出し」としても読むことができる。

もう一つ例を挙げたい。57番目の「見出し」であり、Stephenの小話のラストである。

DAMES DONATE DUBLIN'S CITS

SPEEDPILLS VELOCITOUS AEROLITHS, BELIEF

—It gives them a crick in their necks, Stephen said, and they are too tired to look up or down or to speak. They put the bag of plums between them and eat the plums out of it, one after another, wiping off with their handkerchiefs the plumjuice that dribbles out of their mouths and spitting the plumstones slowly out between the railings.

He gave a sudden loud young laugh as a close. Lenehan and Mr O'Madden Burke, hearing, turned, beckoned and led on across towards Mooney's.

— Finished? Myles Crawford said. So long as they do no worse. (7.1021-1031)

二人の老婆は首が痛くなり、Nelson's pillarからのDublin見物に飽きてしまい、プラムを食べ、手すりを通してその種を口から吐き出しているだけである。二人の老婆は、“Fumbally's lane”、“Off Blackpitts”というThe Libertiesにある貧しい地区に住んでおり⁽³⁴⁾、決して身分が高くないので「見出し」に“DAMES”とあるのは滑稽であ

る。また単なる老婆が吐き出したプラムの種を「寄付する」というのも大げさである。この「見出し」は小話の内容に対して大げさで滑稽である。Stephen も話し終った後、自分の小話の滑稽さが分かったのだろうか、照れ隠しなのだろうか、彼は「突然大声で若々しく」笑っている。この「見出し」は、くだらない内容に対して大げさな「見出し」の滑稽さを示す者、Stephen の未熟さの揶揄をする者が付けた「見出し」ではないのか。もっといえば、使い慣れていない言葉を駆使して学術的な「見出し」を誰かが付けたのではないのか。もはや「見出し」から単一の語り手の「声」を聞くのは難しい。

ここで Eric D. Smith の “Aeolus” 中の「見出し」についての指摘を引用しておこう。

The Headlines, the novel's first real adumbration of the stylistic innovations to come, represent and embody the ubiquitous power of writing, a technology able to enframe and contextualize human experience. By disrupting the continuity of the normal reading process with bold typographic variation – quite a drastic departure from the version originally printed in the *Little Review* – Joyce foregrounds the mechanism of writing and reading and anticipates (or plunders) the sort of experimentation featured in works like Ronell's *The Telephone Book*.⁽³⁵⁾ (下線は筆者による)

「見出し」の挿入によって、書くことと読むことの方法が前景化される。読者は孤独に読むだけではない。読んでさらに書くこともあるのだ。読むこと書くことは決して孤独の作業ではない。ごくシンプルにインターテクスチュアリティの構図を想起すればよい。

「見出し」に限らないが、“Aeolus” には印刷機械の音や Bloom や Stephen の独白がしばしば紛れ込む。このように読書を阻むナラティブの流れについて Tamara Radak は次のような指摘している。

By disturbing the linear, teleologically oriented progression of the text, the accumulation of intrusions and deliberately caused misreadings in this passage undermine the basic function of a newspaper: presenting information in a straightforward, objective and unambiguous way. The disturbance in the reading process gives the readers pause, jolting them out of their willing suspension of disbelief and indeed making them see the “machinery” behind the material text they are reading. Such self-reflexive interruptions in the textual flow question the very concept of “ultimate unity and coherence” which Smith

considers central “to the reader's experience” of closure. By inviting the reader to look behind the scenes, self-reflexive passages in “Aeolus” expose any ordering principle of narrative, such as the idea of clear-cut beginnings, middles and ends, as artificial constructs.⁽³⁶⁾ (下線は筆者による)

要約すれば、通常の新聞は、客観的かつ明確に情報を提供するので読むのを妨げることは決してしない。新聞がもし変則的に読むことを妨げれば、読者は読むのを止めてしまい、テキストの「からくり」を考える。“Aeolus”を読むことにより、ナラティブの流れの始まり、中間、終結が人工的な構造であることがあらわになる。“Aeolus”の読者は、読むとはどのような行為なのか、積極的に想像しなければならなくなる。繰り返しになるが、Radak の言うように、読み手は読むことによって今度は書きたくなるのではないだろうか。

“Aeolus”の「見出し」の影響について Kershner の指摘は示唆を与えてくれている。

The evolution of the “heads” or “captions” in the “Aeolus” episode, from the wordy, inappropriately, elevated language of Victorian times (“WITH UNFEGINED REGRET IT IS WE ANNOUNCE THE DISSOLUTION OF A RESPECTED DUBLIN BURGESS ” ; *U* 7.61) to the breezy, slangy sporting heads late in the chapter (such as “SOPHIST WALLOPS HAUGHTY HELEN SQUARE ON PROBOSCIS” ; *U* 7.1032) alludes directly to the victory of the new American style in newspaper format, which, in 1904, was still to be realized. But there is no doubt that it is the “new journalism” to which Joyce directs our attention.⁽³⁷⁾ (下線は筆者による)

“Aeolus”における個人の見解を示しかつ複数で対話的な「見出し」は、アメリカの New Journalism へと我々の注意を向けてくれるという。この指摘は少なくとも私にとって思ってもみなかった指摘である。“arranger”の存在は第7挿話で目に留まるほど顕在化し、後の挿話を編集する働きをしていると考えていたからである。周知の通り、アメリカの New Journalism は、1960 年から 70 年に際立ったジャーナリズムの傾向である。客観的報道を避け、筆者の主体性を明確にし、現場の状況や当事者の会話をふんだんに盛り込んでいる。このスタイルは文学に影響を及ぼし、例えば、Tom Wolfe (1900-38)、Norman Mailer (1923-2007)、Truman Capote (1924-84) の *In Cold Blood* (1966) に見られるという。⁽³⁸⁾ “Aeolus”の「見出し」の影響は、こんな所にまでもたらされたのかという思いがする。だが、影響関係についてもう少しリサーチが必要である。今後の研究課題としたい。

結論

はじめに、“Aeolus”の「見出し」の背景を探究してみたいと問いを呈した。“Aeolus”の創作過程を考察すると、「見出し」は1922年の初版の際に付された。それぞれの「見出し」の解釈を突きつめてみると、Joyceの意図を必ずしも強調しなくてもよい。「見出し」についての意味付けは読者にゆだねられている。それぞれの「見出し」は複数の「声」から成り立ち、それぞれの「声」の出典は当時のDublinで発行された大量の新聞に求められる。しかもそれらの「声」は対話的である。“Aeolus”の「見出し」はアメリカのNew Journalismに影響を与えているようだ。だが、New Journalismとの関係については次の課題としたい。本稿の要は、問いの設定から始めて、テキスト、解釈、影響とこれら3つの問題に対する思弁であった。

※本稿は、2019年11月30日に行われた日本大学英文学会11月例会での発表を加筆及び訂正したものである。

使用テキスト

James Joyce. *Ulysses: The Corrected Text*. Ed. Hans Walter Gabler. New York: Random House, 1986. 以下、*Ulysses*からの引用は括弧内に挿話数と行数を示す。

註

- (1) Richard Ellmann, *James Joyce*. New and Revised Edition (New York: Oxford University, 1982) 463.
- (2) James Joyce, *Letters of James Joyce Volume I*. ed. Stuart Gilbert. (New York: The Viking Press) 113.
- (3) James Joyce, *Letters of James Joyce Volume I*, 115.
- (4) James Joyce, *Letters of James Joyce Volume I*, 118.
- (5) Michael Groden, “Ulysses” in *Progress*. (Princeton and New Jersey: Princeton University Press, 1977) 65.
- (6) James Joyce, *The Little Review “Ulysses” James Joyce*. eds Mark Gaipa et al. (New Haven and London: Yale University Press, 2015) 101.
- (7) Michael Groden, 65.
- (8) Michael Groden, 65-66.
- (9) James Joyce, *Letters of James Joyce Volume I*, 172.
- (10) James Joyce, *Ulysses*. An unabridged republication of the original Shakespeare and Company edition, published in Paris by Sylvia Beach, 1922. (Mineola and New York: Dover Publication, INC, 2009) 112.

- (11) 東川正彦「誰が「見出し」をつけたのか」(日本ジェイムズ・ジョイス協会、『Joycean Japan』13、2002) 86 頁。
- (12) 東川正彦、上掲書、86 頁。
- (13) James Joyce, *Dubliners*. Ed. Terence Brown. (London: Penguin, 1992). 以下 *Dubliners* からの引用は括弧内に頁数を示す。
- (14) Marvin Magalaner. *Time of Apprenticeship: The Fiction of Young James Joyce*. (London and New York: Abelard-Schuman, 1959) 89-90.
- (15) C.H.Peake, *James Joyce: The Citizen and the Artist*. (Stanford and California: Stanford University Press, 1977) 35.
- (16) Robert Eaglestone. *Doing English: A Guide for Literature Students*. (London and New York: Routledge, 1999 ; rpt., 2017) 95.
- (17) ロラン・バルト、「作者の死」 花輪光訳、『物語の構造分析』(みすず書房、1979 年)、85-86 頁。
- (18) ロラン・バルト、上掲書、89 頁。
- (19) James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man*. The definitive text corrected from the Dublin holograph by Chester G. Anderson and edited by Richard Ellmann (Bungay and Suffolk: Jonathan Cape). *A Portrait* からの引用については括弧内にページ数を示す。
- (20) C.H. Peake, 89.
- (21) R. Brandon Kershner. *The Culture of Joyce's "Ulysses"*. (New York: Palgrave Mac-Millan, 2010) 116-117.
- (22) M. J. C. Hodgart. "Aeolus," in Clive Hart and David Hayman eds., *James Joyce's "Ulysses" : Critical Essays*. (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1974) 129.
- (23) C.H. Peake, 195.
- (24) Karen Lawrence. *The Odyssey of Style in "Ulysses"*. (Princeton and New Jersey, 1981) 64.
- (25) 川口喬一、『ユリシーズ演義』(研究社出版、1994 年)、126 頁。
- (26) David Hayman は作者や語り手ではなく、テキストを表立ってコントロールする人物または存在を“arranger”と呼んでいる。“arranger”は「語り手」や「作者」とは違う概念であり、*Ulysses* 後半部(前半部もそうだが)の文体を説明するのに有効な概念である。See David Hayman, “Ulysses” : *The Mechanics of Meaning* (Wisconsin and London: The University of Wisconsin Press, 1982) 84.
- (27) Francis Phelan. “A Source For The Headlines of “Aeolus” ?.” *JJQ* 9 (Fall 1971): 146-151.
- (28) R. Brandon Kershner, 98.
- (29) R. Brandon Kershner, 97.
- (30) Patrik Collier. *Modernism on Fleet Street*. (London and New York: Routledge, 2006) 124.
- (31) *Thom's Official Directory of Great Britain & Ireland, 1910*. CD-ROM. (Dublin: Archive CD Books Ireland, 2010) 1397.
- (32) Cheryl Herr. *Joyce's Anatomy of Culture*. (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1986) 76-77.
- (33) Don Gifford with Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated*. Second edition. (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1988) 151.
- (34) Jacinta Prunty. *Dublin Slums, 1805-1925: A Study of in Urban Geography*. (Dublin, 1998) 27.

- (35) Eric. D. Smith. "How a Great Daily Organ is Turned Out: "Aeolus," *Techné*, and the Recording of *Ulysses*." *JJQ* 45 (Spring 2004): 459-460.
- (36) Tamara Radak. "'Aeolus', Interrupted: Heady Headlines and Joycean Negotiations of Closure," in *Publishing in Joyce's Ulysses: Newspapers, Advertising and Printing*, (Leiden and Boston: Brill Rodopi, 2018) 153.
- (37) R. Brandon Kershner, 97.
- (38) 上田和夫・渡辺利雄・海老根宏編、『20世紀英語文学辞典』（研究社、2005年）、1002頁。

参考文献

- Brockman, William S., Tekla Mecsóber, and Sabrina Alonso, eds. *Publishing in Joyce's Ulysses: Newspapers, Advertising and Printing*. Leiden and Boston: Brill Rodopi, 2018.
- Collier, Patrick. *Modernism on Fleet Street*. London and New York: Routledge, 2006.
- Crispi, Luca. *Joyce's Creative Process and the Construction of Characters in "Ulysses": Becoming the Blooms*. Oxford: Oxford University Press, 2015.
- Eagleton, Robert. *Doing English: A Guide for Literature Students*. 4th ed. London and New York: Routledge, 2017.
- Ellmann, Richard. *James Joyce*. Revised edition. New York: Oxford University Press, 1982.
- Gifford, Don, with Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated*. Second edition. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1988.
- Hart, Clive, and David Hayman, eds. *James Joyce's "Ulysses": Critical Essays*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1974.
- Hayman, David. "Ulysses": *The Mechanics of Meaning*. A new edition, revised and expanded. Wisconsin and London: The University of Wisconsin Press, 1982.
- Herr, Cheryl. *Joyce's Anatomy of Culture*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1986.
- Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. The definitive text corrected from the Dublin holograph by Chester G. Anderson and edited by Richard Ellmann. Bungay and Suffolk: Jonathan Cape.
- . *Dubliners*. Ed. Terence Brown. London: Penguin, 1992.
- . *The Little Review "Ulysses"*. Edited by Mark Gapia, Sean Latham and Robert Scholes. New Heaven and London: Yale University Press, 2015.
- . *Ulysses*. An unabridged republication of the original Shakespeare and Company edition, published in Paris by Sylvia Beach, 1922. With a New Introduction by Enda Duffy. Mineola and New York: Dover Publication, INC, 2009.
- . *Letters of James Joyce*. Vol. I. Edited by Stuart Gilbert. New York: Viking Press, 1957. Vol. II and III. Edited by Richard Ellmann. New York: Viking Press, 1966.
- Kershner, R. Brandon. *The Culture of Joyce's "Ulysses"*. New York: Palgrave Macmillan, 2010.
- Lawrence, Karen. *The Odyssey of Style in "Ulysses"*. Princeton and New Jersey, 1981.
- Magalaner, Marvin. *Time of Apprenticeship: The Fiction of Young James Joyce*. London and New York: Abelard-Schuman, 1959.
- Groden, Michael. "Ulysses" in *Progress*. Princeton: Princeton University Press, 1977.
- Peake, C.H. *James Joyce: The Citizen and the Artist*. London: Edward Arnold, 1977.
- Phelan, Francis. "A Source For The Headlines of "Aeolus"?" *James Joyce Quarterly* vol. 9, no. 1 (1971).

- Prunty, Jacinta. *Dublin Slums, 1800-1925: A Study in Urban Geography*. Dublin: Irish Academic Press, 1998.
- Shloss, Carol. "Choice Newseryreels: James Joyce and the *Irish Times*." *James Joyce Quarterly* vol. 15. no. 4 (1978).
- Smith, Eric. D. "How a Great Daily Organ is Turned Out: "Aeolus," *Techne*, and the Recording of *Ulysses*." *James Joyce Quarterly* vol. 45. no. 3 (2004).
- Thom's Official Directory of Great Britain & Ireland*, 1910. CD-ROM. Dublin: Archive CD Books Ireland, 2010.
- 川口喬一 『「ユリシーズ演義」』 研究社出版、1994 年。
- 東川正彦 「誰が「見出し」をつけたのか」 日本ジェイムズ・ジョイス協会 『Joycean Japan』 13 (2002)、71-87。
- ミハイル・バフチン 『ドストエフスキーの詩学』 (1963) 望月哲男・鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫、1995 年。

(受領日：令和元年12月13日)
(受理日：令和2年1月15日)

中華人民共和国建国後，鄭州に 留用された人びとと日本人中学校

堀 井 弘一郎

はじめに — 研究史と本稿の課題

日中戦争終結後，中国にいた大多数の日本人が引揚げていく中であって，中国国民党政府や，あるいは中国共産党側からの「要請」を受けて中国に残留し，様々な産業分野でその事業の継承のために尽力した史実は，今日では広く知られている。そうした残留の形態は一般に「留用」と呼ばれている。

こうした中国での留用については，1990年代以降鹿錫俊，大澤武司，楊大慶らによってその歴史的経緯，国内外の要因，中国経済への影響などが実証的にかなり明らかにされてきた⁽¹⁾。ただ，研究の主要な関心は，時期的には1949年10月の中華人民共和国建国前の時期まで，地域的には東北地方が中心であり，人民共和国建国以降の関内（万里の長城以南）における留用についてはほとんど論じられてこなかった。中国側の研究でも，国民党の留用政策を取りあげたものはあっても，共産党の留用政策を正面から論じた論著はほとんどない⁽²⁾。若干の論著が共産党側による好待遇での処遇，あるいは新中国建設への日本人の貢献という文脈の中で触れているにすぎない。

国民的理解の点ではNHKが2002年に「『留用』された日本人—日中・知られざる戦後史—」という番組を放映し，その翌年には『『留用』された日本人—私たちは中国建国を支えた—』（NHK出版）も出版され，留用という日本人の体験が広く一般にも知られるきっかけとなった。そうした中筆者は，『『満州』から集団連行された鉄道技術者たち—天水「留用」千日の記録—』（創土社，2015年。以下『天水留用』と略記する）において，900人近い人びとが1950年11月頃から1953年3月頃まで甘粛省天水地区に暮らし，日中の技術者らの協力によって天水と蘭州を結ぶ天蘭線の開通をもたらした経緯を日中間の摩擦や相克，生活上の困難や葛藤，子弟の教育問題などを含めて実証的に明らかにした。さらに，「共産党政権下，上海に留用された人びと」（拙編書『上海の戦後一人びとの模索・越境・記憶—』勉誠出版，2019年）において，1949年以降の上海での留用の様子を素描した。それらは，これまであまり論及されなかった建国後の関内における留用の具体的事例を検証しようとするものであった。

『天水留用』では河南省鄭州についても若干言及し，1952年春，同地に関内では唯一の日本人子弟向けの中学校として「鉄道部日籍職工子弟中学校」（通称「（鄭州）鉄日中」）ができたこと，その背景には中国の学校での教育に対する日本人留用者らの

不安があったこと、中国政府側も鉄日中開校をもってこれに応えていったことなどを明らかにした。しかし、まだこの鄭州での留用に関わって残されていた課題があった。それは、鄭州における鉄道や医療関係者の留用の実態、及び鉄日中設立の具体的な経緯、鉄日中の教育環境や学校生活の状況などを解明することであった。本稿は、そうした課題を明らかにすることを狙いとし、戦後日中関係史の中で座視できない留用問題の全体像を解明する作業の一助としていきたい。（「支那」「満州（洲）」などの用語の使用は本来ふさわしくないが、本稿では歴史的用語として用いた。人名については煩を避けるため関係者・研究者ともに敬称を略した。）

1. 共和国建国後の留用

(1) 戦後の留用

1945年8月の終戦時、中国大陸には200万人以上の一般日本人が残されていたが、翌46年の春頃から始まる「前期集団引揚げ」によってその大半が帰国した。しかし、国共内戦の影響もあり引揚げができずに中国に留まった多くの日本人がいた。その大半がいわゆる留用によるものであり、1947年3月時点で国民党側、共産党側双方に計6万人以上の日本人が留用されているとみられていた⁽³⁾。その多くは鉄道や工場、鉱山などの技術者・労働者、医師や看護婦、軍人、その家族などで、戦争で疲弊した産業の復興、技術の継承などに日本人の技術や経験が欠かせないと判断されたからであった。鹿錫俊の研究によれば、1948年10月の中国共産党当局自らの統計の中で、日本人留用者数は軍関係に10000人、政府関係に13600人で、それも非常に不完全で実際は30000～35000人と見られていたという⁽⁴⁾。

日本側でも厚生省援護局は、1949年10月の新政権樹立後の時点でも共産党側に引き続き留用された人びとは家族を含めて35000人ほどと推定していた⁽⁵⁾。また、大澤武司も中国側の檔案資料をもとにして、1950年6月時点で、東北地方に20797人の日本人が残留し、そのうち約15000人が留用者であったと指摘している⁽⁶⁾。共和国建国後に至るまで相当数の日本人が長期間東北地方を中心に留用されていたわけだが、朝鮮戦争の勃発は彼ら、とりわけ鉄道関係者の境遇に大きな変動をもたらした。

(2) 鉄道部門留用者の関内への移動

1950年6月の朝鮮戦争勃発から間もない10月下旬、中国当局の指示によって旧満州の各地域にいた旧満鉄関係者とその家族の大多数は関内に移動した。天津、北京、済南などに一旦移動した日本人留用者らの代表は、北京に集まり早期帰国を求めて中国政府の鉄道部側と交渉した。しかし、当局からは朝鮮戦争が緊迫し危険なのでさらに移動すると告げられ、引き続き鉄道関連の業務にあたる「留用」を求められた。鉄

道技術者らを中心に、医師、看護婦、教師、その家族などで総勢 2 千人近くいたとみられている一行はそれに従わざるを得なかった⁽⁷⁾。11 月 15 日頃、中国鉄道部より指示を受け、関内各地に移動していった。その最終的な配分概数は、北京 50 人、太原 150 人、鄭州 150 人、西安 200 人、天水 200 人、漢口 100 人で計 850 人とみられていた⁽⁸⁾。これには家族の人数は含まれていない。日本政府側では上記の 850 人ほどの技術者らに加えて家族を含めるとおよそ 1880 人が各地に配置されたとみていた（表 1）。

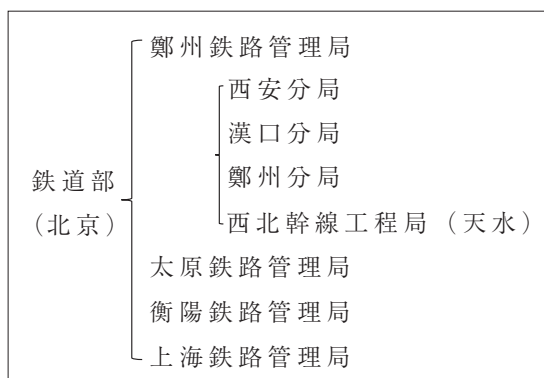
当時の鉄道部（関内）の編成は表 2 の通りであったが、鄭州鐵路管理局は、太原、衡陽、上海とならび関内における 4 つの管理局の一角を占める枢要な位置にあった。そこには西北幹線工程局のあった天水の 1000 人に次いで、家族を含め 250 人もの留用者たちがいると外務省は把握していた（表 1）。

表 1 関内各地に留用された鉄道関係者・家族（1951 年 6 月 15 日）

	北京 鉄道部	鄭州 鐵路 管理局	西安 鐵路 分局	西北 幹線 工程局	漢口 鐵路 分局	太原 鐵路 管理局	石家莊 鐵路 工廠	合計 (人)
通信資料による人数	50	250	200	1000	100	150	130	1880

（外交史料館所蔵資料 K-7-1-2-（2-3-1）『ソ連地区邦人引揚各地状況（含中共地区）中共の部（除く東北区）』『通信資料』第 1 巻所収の外務省管理局引揚課「通信資料第 5 号 鉄道関係留用者の留用状況」より。西北幹線工程局は天水に置かれた。）

表 2 鉄道部（関内）の地方管理局体制（1951 年 6 月 15 日）



（出所は表 1 と同じ）

2. 鄭州における留用

（1）留用機関と政治運動

1950 年 5 月の時点で、河南省では鄭州の他に地陽市、鷄公山、醴陵^{らいりょう}の 3 市に留用者がいたと見られていた⁽⁹⁾。その時点で鄭州では鄭州市辦事処（政府管轄）と公

教医院（軍管轄）の2つの機関に留用者がいたが、人数等是不詳である。その後、鉄道関係者らも鄭州に留用となり、1952年3月時点での留用機関先は表3のとおりであった。鉄道部門のほか、小麦粉や木材関連の工場、病院、学校、旅行社、それに軍関係の衛生部や病院等に配置されているのがわかる。このほか、河南省営鄭州農場では、主に払い下げられた軍馬の防疫等に従事した獣医なども留用となっていた⁽¹⁰⁾。

表3 鄭州市における留用機関（1952年3月）

部門	留用機関名	地点
鉄道	鐵路管理局鄭州分局 …黄河橋工段、電 ^マ ム ^マ 段、發電技術室、機 ^マ ム ^マ 段	鄭州
工廠	新豊麵粉廠 新業鋸木廠 機械廠	東三馬路
病院	鄭州鐵路医院	
学校	鐵路職工子弟学校	鄭州
雑	大華旅社	鄭州
河南軍区	第四野戦軍 後勤部営房管理部兵建処衛生部 第四十二軍後勤衛生部野戦医院 中南軍区衛生材料廠	鄭州 鄭州東大街 鄭州西郊葡萄○

（外交史料館所蔵資料 K-7-1-2-(2-3-3) 外務省アジア局第五課『通信資料第16号 政府関係留用機関一覧（中国本土及内蒙古編）』51～53頁より。「○」は1文字不詳を示す）

鉄道部門に関しては、前述のように約150人、家族を含めると約250人が配属されたとみられていたが、その配属先の詳細は不詳である。このほかに後述する医療関係者がおおよそ50人留用となっており、この2つの職域だけでも合計300人ほどがいたと推定される。1953年の後期集団引揚げで鄭州から引揚げた人数はおおよそ340人であり（後掲の表4参照）、これらの数字から相当数の留用者やその家族が当地に留まったことがわかる。鉄道関係については、本局と分局（鄭州・漢口・西安の3カ所）とがあった鄭州鐵路管理局のうち、少なくとも本局に14、15人が留用となった。鄭州駅のすぐ西側にあったその本局の電務処に1950年10月から1953年5月まで技術員として勤務した一留用者Aは、鉄道技術はその間に「可成りの進歩向上は認められたが」、それでも3年前に離れた元の勤務地のハルピン局と帰国時の鄭州局との技術水準が「略々同様」なので、鄭州は「約三年の遅れを示していた」と帰国後に述べている⁽¹¹⁾。

職場の状況に関しては、1952年にこのAとは別の鄭州の留用者から日本に届いた通信に厳しい政治運動のことがこう記されている⁽¹²⁾。「午後一時半から六時まで学習を行います。……「増産節約運動」「三反運動」の討論に入っています。夜は日籍学

習委員の「整風」に関する小組の会合があります。……最近では人民日報を読むのに忙しい位です。日曜日に入浴後街を散歩するときに一番自由な天地にいるような心持が致します」と（「……」は中略を示す。以下同じ）。1950年代初めの「三反運動」、「五反運動」の苛酷な「相互批判」や「坦白」（自己批判）についてはこれまでも知られているが、鄭州のこの現場ではほぼ午後の時間を費やして「学習」が行われていたようだ。

（2）医療関係者たち

鄭州の留用者には鉄道関係者のほか、医療関係者も少なくなかった。「鄭州市衛生局」の資料はこう記す⁽¹³⁾。

1952年下半年に、（河南—引用者補注）省衛生局が日本籍医務人員24人を鄭州の任務に配置したが、省の第二医院に配置した15人と併せて、鄭州に来たのは49人となる。そのうち、女性は28人、男性は21人で、医師8人、医助4人、化驗技師1人、化驗員1人、……彼らは1952年下半年から54年初めにかけて、いくつかの団に分かれて相前後して48人が帰国した。1人が残り、再び他の場所に移った。（翻訳は引用者による）

同資料中には省幹部療養院にも留用者がいたことが記されており、約50人の医療関係留用者が1952年から1953年ころ、河南省立第二人民医院や省幹部療養院などに配属されていたことが知られる。第二人民医院に配属された日本人留用者について、医院側は次のような厳しい見方を示していた⁽¹⁴⁾。

当病院に配属された12名のうち、……（大橋看護婦や看護助手ら）6名は外来診察の仕事をやったことはあると言っている。しかし、外来の事は十分に理解しておらず、加えて言葉も正しくなく、さらに仕事を進めることは困難で、病棟に来て仕事もこなせない。外来では仕事のしようがなく彼等自身が苦悩し、またことを誤ったり遅れたりした。……（彼らとは別の田村外科医や看護婦ら）は仕事の能力はやや高かったが、これまでに医療看護の仕事をしたことがなかったり、あるいはやった時間が大変短かったりで、何事も熟知しておらず、いつも医療看護の仕事を希望しなかった。大橋（看護婦などの6人）らは皆、事務職の仕事に換えるように要求した。彼らはこの病院（の規模）が大きいことを見て、自分ではよくわからず仕事を把握することができないでいる。林恵三は……面白くなく何日も仕事をせず、衛生課に相談し、仕方なく仕事についた。……（留用者全体を）総じて言えば、仕事の任に堪えることが難しく、

家族のことも心配している者は皆帰国したがっている。仕事の能力が高く中国で家庭ももった人たちは帰国についての考えが少し違うが、それでもやはり彼らも帰国を望んでいる。(() 内は引用者補注) (翻訳は引用者による)

この資料からは、医師を含めた医療関係者らの多くがこの鄭州では必ずしも満足のいく仕事をしていなかった様子や、仕事にそれなりに適応していった留用者らも帰国を待ち望んでいる様子が浮かんでこよう。留用者らもそのことを自問し、中国側もまたそれを認識している。医療関係者の言葉がうまく通じず、外来の「病棟に来ては仕事が出来ない」というのが事実ならば、事務的な仕事への転換を希望する、「仕方なく仕事につく、あるいは帰国を渴望するという事態は当然のなりゆきであったであろう。少なくとも医療関係者らにとって、鄭州におけるこの時点での留用はその技術を活かし仕事に前向きに取り組むという状況ではなかったことが伺える。

鄭州の例ではないが、1950年から1953年まで湖南省の衡陽第5陸軍病院、次いで長沙連合病院に留用となった医師(元軍医中尉)は、帰国間もない1954年にこう語っている。「日本人医師が帰国しても大局的には中共は困っていないと云うのが真相ではないかと思う。私は日本人が残留しては却って弊害があると思っている。……特別の権威を除いては大部の日本人医師の技術は特に優秀とは云えない、又特殊の専門で日本人でなければならぬと云う部門はない、要は量の問題である。大局的に観て帰国の時期にあったと云うべきだろう。」と⁽¹⁵⁾。これは技術のいわば耐用年数の問題であり、医療の現場においてもおこりつつあったとみることができよう。そうした問題をも視野にいれながら、関内の他地域を含め医療関係者全体の留用の実態を明らかにしていくことは、今後の研究課題である⁽¹⁶⁾。

(3) 暮らしむき

鄭州は交通の要衝であり、それなりに都市化がすすんだ街であった。しかしそれでも1950年代初頭当時、一般の人びとの生活レベルは低かったようだ。1952年1月に現地から発せられ外務省に届いた通信には、当時の日本人の生活の一端が示されていた。「電気すら一年余り以前からついたということです。火力発電ですから電燈料が高いので、五ワットしかつけていません。……水道は今のところ見たことがなく、井戸水を桶につめ一輪車に乗せて売りにきます」と⁽¹⁷⁾。電気や水さえも不自由な地域や時期があったことが伺える。ただ、留用者らの生活は全般的にはまずまずだったようで、同地の留用者が帰国後の1953年11月に聴き取り調査で述べた話からも伺える。そこでは、もらう給料で「親子三人食べるだけであったが、生活や保健に対する諸設備が完備しつつあったので、特に困るという程でもなかった」と述べている⁽¹⁸⁾。鉄道電務技術員としてハルビンから鄭州鉄道管理局(本局)に移動となった先述の留用

者Aも、「鄭州に来てやっと人なみの生活が出来る様にな」り、「白米と白麵を半々に食べ」、「七人家族の私の家でも子供に充分なおやつも与えられた」と、やはり聞き取り調査で答えている⁽¹⁹⁾。

留用者のいる職場では、子弟の養育費の面で苦しい日本人留用者世帯に一定の補助金を与えるような規定も作られており⁽²⁰⁾、一定の配慮はなされていたようだ。外務省側でも1951年6月、鉄道関係留用者について、「全般的に東北地区に於けるよりも実質賃金が高く生活にも多少の余裕があると云っている者が多い」と見ていた⁽²¹⁾。しかし、たとえ生活上の便宜が図られていたとしても、留用者たちにとってより深刻な懸念があった。それは子弟の教育の問題だった。

3. 日本人中学校の開校と学校生活

(1) 鉄道部職工子弟学校の役割

鄭州にはもともと鉄道部の中国人職員の子弟のための中学校（日本の中学・高校にあたる）である「鉄道部立鄭州扶輪中学」（1929年創建の「平漢鐵路鄭州扶輪中学」から1930年に改称）という学校があった。日中戦争勃発後は各地に移転し、1942年からは陝西省蔡家坡にあった。1952年9月、元鄭州扶輪中学の教師らが鄭州にもどり、「鄭州鐵路職工子弟中学」（略称「鄭州鉄中」、以下通称で表記）が東三馬路の扶輪中学跡地に再建された⁽²²⁾。それに先立つ同年春、日本人子弟を対象にした中学校である「鉄道部日籍職工子弟中学校」（通称「（鄭州）鉄日中」、以下通称で表記）が、鄭州鉄中の所在地（東三馬路）とは別の小趙寨に開校した。鉄日中は約1年後の1953年春には閉校となり、鉄日中の残った「人、物、財」は鄭州鉄中に吸収された⁽²³⁾。

では、「鐵路職工子弟（中）学校」とはどのような学校であるのか。それは「職工子弟の小中学校を設け、彼等（鉄道建設にかかわる職工－引用者補注）の後顧の憂いを取り除き、輸送の安全の保証のために貢献できるようにした」⁽²⁴⁾ものであった。すなわち、鉄道建設に携わる「職工」（職員と労働者）が、建設路線が延びるにつれて居住地を移動しなければならない場合でも、子弟が親元から離れずに親とともに移動しながらも学校にも継続して通えるように、路線の延長に従って移動する職工の子弟のための学校であった。共和国建国以前からそれはあったが、建国後は鉄道建設の急ピッチ化に伴い鐵路職工子弟小中学校の増設も早く、建国の初期には全国で15カ所の鐵路中学校と205カ所の鐵路小学校があった。鐵路中学校はその後も増設を続け、1994年段階で、全国12の鐵路局などが計470校の鐵路中学校を管轄していたが、鄭州鐵路局がその中で最多の79校であった⁽²⁵⁾。鐵路職工子弟教育の中心地であり続けていたといえよう。後述するが、鄭州に鉄日中ができた理由を考える際、そうした事情があったことも関係していたと推測される。

(2) 鄭州鉄日中の設立

【中国側文献に見る鄭州鉄日中の設立】

この鄭州鉄日中の設立の経緯に関する中国側の公刊された文献としては、鄭州鉄中の後身となった鄭州一零一中学校の校誌に簡単な記事があるほかは、前掲『中国鉄路教育史(1949-2000)』(註 24 参照)の記事が管見の限りほとんど唯一であると思われる。そこで初めにその記事をここで引用する(780 頁)。

日本籍職員の子弟の入学問題を解決し、日本籍技術人員を団結させ、その仕事の意欲を安定させるため、鉄道部は前後して天津、鄭州、西北等の鉄道局子弟小学校に日本籍職員子弟学級を付設したほか、1951 年 7 月、「鄭州鉄路管理局に委託して日籍鉄路中学校を設立する」通達を下ろした。そして、同年 9 月、鉄道部日籍職工子弟学校が鄭州に成立した。① 校長は郭武城で、他日本人副校長が 1 人おり、教師 9 人(日本人 7 人)②、職員 8 人(日本人 3 人)③であった。日本人教職員らは東北、山西、甘肅等から来ていた。九一八事変以前に中国に來た古い鉄道職員(かつてハルピン駅駅長だった副校長)や、鉄道技術職員、侵華戦争の中で武器を捨てて投降した空軍の兵士などもいた。学生は 156 人(女子 73 人)で、4 つのクラスに分かれ、年齢は最高齡で 20 歳であった④。学生の中の 36 人の家庭は生活が困難なため奨学金を受けていた。これらの学生は、東北、山西、陝西、甘肅等からそれぞれ來たが、ある者は現在(他地域の－引用者補注)鉄路中学校の学生であったが、蔡家坡鉄中から転校して來たものが最も多かった⑤。他にも、現在工場で仕事をしている労働者、旋盤工、車輪の補修工などもあった。ある学生は中国語がとてもうまく、校長が話をする時に通訳を担当することもできた。学生らの親の大部分はみな鄭州にはおらず、したがって学生はみな寮で寝食をとにした。(翻訳は引用者による)

若干の補足を加えたい。①の「同年 9 月」、すなわち 1951 年の 9 月に鉄日中が成立したとあり、「日本人副校長」となった ^{こんだ つたえ}近田 傳(本人も周囲も「伝」の字をしばしば用いたので、以下近田伝と略記する)も後に、同月に開校式を挙行したと語っている⁽²⁶⁾。しかし、それは形式上のことで、元学生らのインタビューからは実際には翌 1952 年 3、4 月ころまでに日本人学生が集まり授業がスタートしたものと見られる。開校までに中心的役割を果たしたいわゆる「民族幹事」の中小路静夫(後述)は、1952 年の「三月十五日、開校の運びとなった」と後に述べている⁽²⁷⁾。②に「校長は郭武城」とあるが、鉄日中の設立当初は、鄭州鉄道管理局の要人が名目的に校長を兼任したのち、1952 年春到北京から來た郭武城が専任として着任した⁽²⁸⁾。また、引

用資料中に「かつてハルビン駅駅長だった副校長」とあるのは近田伝のことを指しているが、本人は戦後の「無政府状態の一時、……ソ連軍から押しつけられ」て同駅長を務めたと回想している⁽²⁹⁾。鄭州鉄中の校長でもあった郭武城は鉄日中についてはやはり名目的な存在で、近田が実質的な校長役であった。「教師9人」のうち「日本人7人」を除くと中国人教師は2人となるが、そのうちの1人が中国語担当の裴元佑（1925年生まれ）で、もう1人は屈という名の教師であったとみられる（後述）。

③の「職員8人（日本人3人）」の「日本人3人」の中には太原から来た寮母の足立とみのがいたが（後述）、他の二人は不詳である。残りの中国人5人は食堂で学生らの食事を作っていた料理人などであった。④の「156人」は鉄日中同窓会の名簿（2016年4月22日版）にある154人とほぼ符合する。⑤の「蔡家坡^{サイチアポ}」というのは陝西省の西安西方の地名であり、鉄日中開校当時、当地の中学校には5名の日本人が在籍していた。当地からは他の1人を加えて計6人が鉄日中に転入学することになった（後述）。ただ、転校してきた数として最も多かったのは蔡家坡からではなく、およそ50人の天水鉄路中学（天水鉄中）から来た学生らであった（後述）。

【鉄日中の校舎・設備】

鉄日中の校舎は鄭州市内からは南西の町外れにあたる小趙寨に建設された。同校の国語教師となった岡崎兼吉^{かねよし}は、「忘れられぬ事ども」として校舎の様子を後にこう描写する⁽³⁰⁾。「運動場を三方から囲むように、北がわに図書室－事務室－宿直室、教室、寄宿舎の三棟、西がわに炊事員宿舎－倉庫、南がわに炊事場－食堂兼雨天体操場、そのうしろに教職員宿舎二棟」があったと。平屋造りとはいえ全寮制中学校としての一通りの学校環境が整備されたとみていいだろう。外務省も1952年3月に「鄭州に鉄路経営による施設の完備した邦人中学校が開校された」と把握していた⁽³¹⁾。図書室は4畳半ほどの部屋であったが、よく通ったという学生も少なくない⁽³²⁾。教室も1年生が1教室、2年生が1組と2組の2教室、3年が1教室で計4教室あり、複式学級ではなかった。

鉄日中の学生だった岡田純枝は、「中国人の学校は校舎が不足で、二部教授をしている所が少なく」なかったが、自分たちには「立派な校舎と宿舎、おまけに図書室まで建築してくれた」ことに「国際主義精神」を感じ、「私はただ頭が下るばかり」と帰国直後、中学3年生時の作文に綴っている⁽³³⁾。校舎も「新しいレンガづくりの立派な建物」で、「校舎も机も椅子も備品も何もかも新調なものばかり」だったという⁽³⁴⁾。陝西省の蔡家坡鉄中から来た元学生高松正司も、同校に電気はなく、「教室はガス灯、寄宿舎は蠟燭、共同便所は……穴を穿ってその中に糞便を貯め」るような具合で、それと鉄日中とは「雲泥の差」であったという⁽³⁵⁾。岡崎兼吉は前述の「忘れられぬ事ども」の中で、鉄日中の「建設の速度、規模、設備などは、当時中国のおかれていた国内外の情勢に照らして、日本人民に対する、中国がわのなみなみならぬ好意と支援の現わ

れであった」と評している（5頁）。

2017年8月24日、筆者は鄭州鐵路中学校の後身にあたる鄭州市第一零一中学校を訪問し、李国喜校長から校史、特に1952年の「日籍班」（鉄日中のこと）開設に関わる丁寧な説明を受けた。この日籍班は中央からの指示のもと、日本人残留者の子弟のために設けられた中学校で、中国人教師を配置したり校舎や宿舎を建てたり、当時の限られた条件の中でできる限りの環境を整えた、ということであった。続けて李校長は、当時の中国人教職員らが中国の学生以上に目をかけたこと、その歴史や精神を多くの日本人にも知ってほしいし、ここで育まれた中国人教師と日本人学生との師弟関係は民間交流、両民族友好の証しであると語った。

（3）鉄日中成立の経緯

【「学力低下と思想的傾向」】

鄭州に日本人子弟向きの中学校が設立されることになった背景については、筆者は前述の拙論著の中で、共和国建国後も中国に留まっていた日本人留用者にとって、一つには子弟の教育問題（後述する「学力低下と思想的傾向」）が大きな焦慮の種であったことを指摘した。また、留用者にとってもう一つの大きな焦慮が、留用者自身の技術の耐用年数の問題であることにも言及した⁽³⁶⁾。それらは天水と上海の事例をベースにしたものであったが、本稿ではさらに鄭州の事例にも言及しながら再考する。

共和国建国当時、日本人子弟対象の小学校は東北部（旧満州地区）に30数校が、関内にも北京、太原、鄭州、上海などに10数校が、合計で少なくとも50校ほど設けられていた。また、中学校については、日本人子弟だけを対象としたものではないが「邦人が入学している中国側学校」として天水のほか、瀋陽、哈爾浜、齊齊哈爾など全国に10校余りがあった⁽³⁷⁾。しかし、日本人の子弟だけを対象にした中学校としては少なくとも関内には他にはなく、この鄭州の「鉄日中」が唯一となった。武漢にいた一留用者からは1951年12月、次のような通信が外務省に届いていた⁽³⁸⁾。

教育は日本人のいるところでは学校を開いています。教員は殆んど普通の事務屋が留用となっているので頭のない者が多いようです。教員の給料は鉄道から支給しています。六年までの教育ですが日本人はここを卒業して中国の中学校に入学しています。現在六年生は約四〇名で教員は二名です。

これは武漢の「鐵路工廠発」の通信であり、鉄道関係者の子弟を中心に小学6年生だけで約40名いること、資格のある先生がおらず留用した「普通の事務屋」が代行していること、小学校卒業生を受け入れる日本人対象の中学校がなく中国の中学校に入学している様子がみてとれる。外務省はこの時点で日本人子弟のための「日本人小学

校」が設けられているのは、関内では、河北省（3校）、山西省（3校）、山東省（2校）、江蘇省（1校）、湖北省（3校）、河南省（1校）、陝西省（1校）、甘肅省（2校）の7省に計16校あったと把握していた⁽³⁹⁾。これらの小学校を卒業した中学生の受け皿が求められていた。1951年8月、外務省はそうした状況について端的にこう問題を認識していた。共和国建国後も残留している日本人にとって、「父兄の最大の悩みは児童の学力低下と思想的偏向にある模様」と⁽⁴⁰⁾。小学校を卒業した子どもたちを教える日本人の中学校がないことは「児童の学力低下」に直結する。それに対処するためには、日本人教師が日本語で日本人だけを対象にした中学校を作るしかなかった。

副校長であった近田はこう回想する。「子弟の教育問題は切実な問題だったのである。毎年の様に繰返される帰国運動は只の騒ぎではなく、その根底には子女の教育をどうするかという親の切実な悩みが潜んでいたと思う」と⁽⁴¹⁾。中国側としても、この「悩み」を解決しなければ日本人留用政策はおぼつかないと判断された。先述の『中国鉄路教育史 1949-2000』にあったように、まさに「日本籍職員の子弟の入学問題を解決し、日本籍技術人員を団結させ、その仕事の意欲を安定させるため」の施策であった。

そして、親たちにとって「学力低下」と並んで、ある意味それ以上のもう一つの心配事が子どもらの「思想的偏向」であった。中国の学校ではもともと政治教育が行われていたし、1950年代初頭の三反五反運動の波は容赦なく中国各地の学校にも押し寄せ、それに拍車をかけた。日本人子弟らも学校でその影響を受けた。外務省の記録⁽⁴²⁾はこう記す。「邦人児童に対しては、四年生になると政治教育が課せられ、現在では相当に徹底し児童達は大人以上に思想が過激となっている。甚しいのは、親の行動が児童からばれることもあるので、大人も子供に対し用心している位である」と。まるで後の文化大革命時を想起させるような光景が現出しつつあった。天水の中学校（天水鉄中）に在籍した大沼たみ子が回想するように、「入学してすぐ朝鮮戦争の為に抗美援朝の運動があり、私達も赤旗を振ってスローガンを叫び革命歌を唱って行進した」⁽⁴³⁾というような光景も見られた。

こうした「思想的偏向」の問題について先の外務省の調査（註40の「中共地区残留児童の教育概況」5～6頁）は、「残留児童の教育に対する父兄の悩みは吾々の想像を超える」、「児童の思想的偏向も父兄にとって相当の苦痛となって居り、思想統制の拘束下にある批判力のない白紙のような児童の頭に中国人教師の言葉がそのまま教え込まれ、父兄は之を批判し正否を訊す事も出来ない状態であって一様に児童の将来を憂えている」とまで述べている。

【留用者らの要求と「民族幹事」ら】

こうした子をもつ留用者らの不安と焦慮は、日本人対象の中学校設立へと事態を動かしていく。留用者らと中国政府とを繋ぐパイプ役となったのは、いわゆる「民族幹

事」らであった。「民族幹事」とは日中戦争期に共産党軍側に捕虜となり延安などで再教育を受けた元日本兵らで、中国共産党とともに主に対日本人工作にあたった。鉄日中開設にあたって中心的な役割を果たした民族幹事は中小路静夫であった。東北地方から南下し済南に留用者とその家族が集結し、さらに留用が続くことが伝えられたとき、帰国を求める要求が出された。鉄日中設立の件に関して、「(新民主主義—引用者補注)連盟の親玉の中小路」(註27参照)は後年次のように述べている⁽⁴⁴⁾。

この時困ったのは、このまゝ日本へ帰してくれという要求が出たことだ。それには教育のこともあった。日本人鉄路員工の小学校は、北京、太原、石家荘、鄭州、天水など各地にあり、問題はなかったが、問題は中学校で、これをどうするか、ということだった。先生の人材が少なく、各地には作れない。教室も教材もない。各地から僕の所に、中学を作れと要求が来る。そこで、鉄道部、政治部と交渉して作るようになった。……今度はそれをどこに作るかが問題になった。北京はダメということで、全国の中心にある鄭州がよからう、ということになった。

鉄日中の国語教師岡崎兼吉も、同校設立のいきさつについてこう回想している(前掲「忘れられえぬ事ども」5頁)。

北京で日籍小学校の教師をしていたので、その間の様子を多少聞き知っているが、日本人子弟の保護者代表といった人達と、組合の日本人責任者とが連れ立って鉄路工会—鉄道部に交渉に出かけたり、候補地になりそうなところを見て回ったりした。しかし結局、北京市内には適当な場所が得られず、河南省鄭州市に新しく建設されることになった。

中小路が「全国の中心」と言っていたように、鄭州は江蘇省連雲港と甘肅省天水を結ぶ東西の隴海線と、北京と漢口を結ぶ南北の京漢線という2つの基幹路線が交差する交通の要衝であった。先述した華北・華中・西域の7省にまたがる16校の「日本人小学校」の子弟らを受け入れるのには便利な位置にあった。それに表2で見たとおり、鄭州には関内に置かれた4つの鉄道管理局の1つがあり、鉄道管理行政面でも重要な一角を占めていた。加えて、先述の通り鄭州にはすでに扶輪中学が設けられた経緯があった。こうした諸事情が鄭州での開校の背景にあったと考えられよう。

中小路とともに、鄭州鉄日中の設立に深く関わったのが、同校の音楽教師中島百合子の夫で戦前はハルピンの小学校教師を務めていた中島龍男であった。中島夫妻は中小路から「鉄道の留用者の子弟教育の仕事に戻って来てくれ」と口説かれて、1951

年に太原から鄭州に來た。龍男は鉄日中設立のために鄭州と北京との間を何回も往復しつつ、教材、教室、宿舎などの準備にあたったという⁽⁴⁵⁾。15、16歳の子どもたちの中にもこの交渉に加わった者がいた。1951年7月まで天水で大人に混じって留用となり、後に武漢、鄭州で機関助手の任務についた清末好夫はこう回想する。「鉄道兵団の資材車に便乗し、北京で当時の藤代遠鉄道部長に日本人学校を建設してほしいと三人で直訴したことを、今考えても猪突猛進的であったと冷や汗をかく今日です。後日鄭州に日本人学校が出来あが」ったと⁽⁴⁶⁾。清末はさらに、要旨次のように回想する⁽⁴⁷⁾。「自分も父と同様満鉄の仕事をしながら、同時に天水鉄中の学生でもあった。うらとも浦塘康雄君ともう1人、計3人で北京の鉄道部に直訴しようと鉄道兵団のトラックに便乗した。北京では藤部長ではなく、鉄道部の職員が対応した。当時の留用者のトップは延安組まとめ役の中小路組で、彼らもその場にいた。中小路本人がいたかどうかは彼との面識はなかったのでわからない。日本人の彼等に対して、『新中国憲法の中に民族の教育は重視するとあり、日本人も少数民族であるから学校を作ってもらいたい』と要望したところ、『主旨はわかった、検討させてもらう』という返答をくれた」という。

留用者らやその子弟の声を「民族幹事」が取り次ぎ、鉄道部に持ち込む。中国側としても、留用者からの帰国要求をなだめるには中学校の開設が必要な施策となった。近田伝元副校長はこう回想する。1951年春先、「突然北京から(中国人の—引用者補注)年配の婦人が」やってきて、鄭州に日籍中学校を設立するための準備に着手するよう指示された。「日籍中学誕生の産声が北京の中央から上った」。近田はそれを「思いがけない朗報」と受け止め、「早速北京の中小路さんとも連絡し、細かな指示を仰いだ」と⁽⁴⁸⁾。中国側と留用者との板挟みにあった民族幹事らにとって、中学校設立は確かに「朗報」であった。それは、鉄道建設を国家プロジェクトとして推進する北京中央の方針の下にすすめられた施策であった。

(4) 鉄日中の教師たち

【日本人教師たち】

1952年春、鉄日中が実質的に開校した。前述の中小路によれば、名目上の校長は中国人だが、「実質的な責任をもってもらうには適任ということで、校長には民主連盟の近田伝さんに白羽の矢が立った」⁽⁴⁹⁾。近田はもともとハルビン学院(旧称日露協会学校)卒業のロシア語の通訳であった。戦前は「哈局(ハルピン局—引用者補注)の「総務部分室」という覆面の調査機関で、……北方調査を担当して」おり、およそ教育畑の人物ではなかった。戦後も鉄道関連の留用者の中で活動し、「[「鉄路の近田」で名が通っていた」という⁽⁵⁰⁾。やがて新民主主義連盟鄭州支部の責任者として、当地で「学習を始め、留用者の面倒を見る世話役といった仕事」をしていた1951年春先、

日本人中学校設立の指示を受けたという⁽⁵¹⁾。

近田は「日籍中学の先生探しで四苦八苦し」た⁽⁵²⁾。苦勞して集めた教員集団が、岡崎兼吉（国語）、中島百合子（音楽）、高倉文雄（数学）、小串任（ロシア語・日本語）、森直枝（物理化学、「山田一利」を名のった）、秋山良照（生活指導、「林一良」を名のった）、山口吉國（事務兼体育）、谷典一（政治・歴史、「深谷宏司」を名のった）、浅野清隆（動植物）らであった⁽⁵³⁾。先生といっても教員資格のある職業教師は音楽の中島百合子以外では確認できず、他はいわば急遽先生役を勤めることになった留用者であった。中島によれば自分以外の「全員が鉄道関係者か、延安組だった」という⁽⁵⁴⁾。

岡崎（早稲田大学文学部中退）は、戦後、満州映画から衣替えした東北電影会社の芸術部門で働いていたが、1950年には北京の第二鉄路小学校に教師として転勤した。1952年2月、鄭州で鉄日中の国語教師となり、鉄日中閉校後の1953年5月からは北京大学東方語言系日語科に就任し、退職するまで長く教鞭をとった。日中友好運動にも尽力した。中島百合子は音楽教諭の資格をもっていた（滋賀女子師範卒業）。夫龍男とともに太原の日本人小学校で教育にあたっていたが、夫婦とともに鄭州に移転した。龍男は結核を患い、鉄日中では教壇には立たなかった。数学の高倉文雄は、大阪外語のロシア語科出身だが「鉄道貨物畑の男」で、終戦時には浜江駅の駅長であった。高倉は近田の数学教師への誘いに「とんでもない」と断ったが、近田の説得で着任した⁽⁵⁵⁾。妻の高倉マサも、「親友だった近田先生に勧められて数学の先生になったものゝ、素人なので教材などで苦勞していたよう」と回想している⁽⁵⁶⁾。

「理科と化学」担当は森直枝。東京帝国大学法科出身で旧満州国の官吏であったが、近田から「理科と化学」教師の依頼があったとき、森も「畑違いの任務」で自信が持てないと辞退した。しかし近田は「まげてお引受下さる様必死の懇願をし、漸くご諒承頂いた」⁽⁵⁷⁾。1952年3月発、鄭州の氏名不記載の一「教師」から外務省に届いた通信にはこうある。「化学と物理ということになりました。初めはやれるかどうか自信がなく困りましたが、やらない訳にゆかないので二十年振りに化学を勉強し直しています」と⁽⁵⁸⁾。これは森からの通信とみて間違いのないであろう。体育を教えた山口吉國は「専修大学^{ママ} 経済科卒業」で、鄭州に来る前は天水の西北鉄路幹線工程局の職員として留用されていた。鄭州では「体育の先生と事務長を兼任」した⁽⁵⁹⁾。秋山良照は日中戦争時の日本人反戦同盟の指導者の一人であった。自著の中で鄭州で「中国近代史の教鞭をとることになった」と記している⁽⁶⁰⁾。近田は秋山について「二七年客員として参加」と語っている⁽⁶¹⁾。元学生で後に経済界で活躍した高松正司（東京大学卒業、住友金属システムソリューション社長などを歴任）は、「山田先生や林先生（秋山良照）を囲んでいろいろな話を聞くのが一番の楽しみでした」と回顧し、元学生の室賀雅文も夜の自由時間などに林先生から聞く政治やファシズムの話などが面白かったと回想する⁽⁶²⁾。

以上こうしてみると、教員資格をもった教師は音楽の中島以外には一人もいなかったことになる。近田は言う。「日籍中学の先生で自分の学んだ専攻の学科を教えられるのは皆無に近かった。当時の留用日本人は殆んど鉄道技術者で、教職経験者を求めることは不可能といってよかった。まことに止むを得ぬ仕儀であった」⁽⁶³⁾と。こうした状況だったので、特定の教科の特定の分野では学生が先生よりもの知りということもあったようで、先生がその教科の得意な学生から事前に授業内容を学び、それで授業に臨んだこともあったという⁽⁶⁴⁾。それでも、鉄日中の元学生らが教師陣を敬慕する念が強いことは、同窓会会報『鄭州』の諸記事や元学生から聞く話の節々で知ることができる。それゆえ、帰国後も教師らの晩年にいたるまで長く師弟の交流が続いた。

【中国人教師たち】

中国人教師としては先述した郭武城校長、裴元佑、それに屈という男の先生がいた⁽⁶⁵⁾。郭は中国語で中国歴史を教え、裴は中国語を教えた。裴は開封の女子中学を卒業後、鉄路第二小学校に就任した。筆者のインタビューでこう語る。1952年春節の頃、当時27歳の自分に突然学校のリーダーから指示があり、鉄日中に赴任した。開封の女子中学では日本語を専攻していた。日本人学生は皆いい子ばかりで、特に困ったことや手を焼いたことは何もなかった。楽しい一時期だった。ただ中国語ができない学生が多く、そのことで苦勞した。日本人女子学生の宿舎である女子棟で、2段ベッドが並ぶ同じ大部屋に泊まり、日曜日でも何もなく毎日そこで寝起きした、と⁽⁶⁶⁾。

裴は中国語教師の任に止まらず、日本人学生とも年齢に近いこともあって、学生から姉や母のようにも慕われた存在であった。日本人学生らは帰国後現在に至るまで裴との交流を続け、1991年には夫妻を北京に招待し44人もの同窓生が日本から裴を囲む同窓会に参加した。また1995年には夫妻を日本に招待し盛大に同窓会を開いている。裴の娘さんの裴慧慧の話によれば、突然本来の自分の学校から引き離されて鉄日中に転勤となった裴を慕って、中国人学生が同校に来て裴の授業の様子を見ていたという。一時期のこととはいえ、若い裴にとって辛い体験でもあったに違いない。

(5) 鉄日中の子どもたちと暮らし

【関内各地から集う】

鉄日中同窓会の会報『鄭州』各号の回想記事や、前編集長の中澤貞男へのインタビュー⁽⁶⁷⁾、筆者が同窓会員を対象に行ったアンケートへの回答、それに当時の外務省の調査などによれば、鉄日中開校時の様子は以下のものであった。

1952年春の開校当初は初級中学の第1、第2学年のみで、同年3月、外務省には学生数を108名、教師数を校長1名、教師6名で、学生は「全部寄宿舎に収容されて団体生活をし、いたって朗らかです」とする邦人からの通信が届いていた⁽⁶⁸⁾。新学期

の始まる同年 10 月に第 3 学年ができた。この時点で中 1 が 1 学級で 54 人、中 2 が 2 学級で 73 人、中 3 が 1 学級で 23 人、合計 4 学級 150 人あまりの学生が在籍した。鄭州市内のほか北京、太原、石家莊、天水、北道埠（天水近郊）、西安、蘭州、漢口の計 9 地域から⁽⁶⁹⁾、12、13 歳から 20 歳くらいまでの青少年が集まった。実質 1 年余りしか存在しなかった学校ではあったが、2016 年 4 月作成の同窓生名簿には元学生 154 名、及び元教職員 12 名の名前が載る⁽⁷⁰⁾。

西安西方の蔡家坡から汽車で 24 時間かけて鄭州にやって来た学生ら 6 人組（和泉豪・眞藏兄弟、高松正司ら）のうちの 5 人は、蔡家坡の鉄路中学校で中国人学生らと共に学んでいた。彼らはその学校になじんでいたもので、鉄日中への転校の話があった時、転校したくはなかった。だが、「校長になる近田伝さんに呼ばれ地元に来る学校に地元から行かないのはおかしいのではないかと余り理屈に叶ってはいない理由で説得されたが心は動かなかった。」しかし、生活費を「払ってくれる父親に言われると致し方なく蔡家坡鉄中を退学し」、鄭州鉄日中に赴いた⁽⁷¹⁾。西安にいた齋藤貢ら 14、15 人の子どもらも布団やら洗面器やらをもたされて、皆一緒に鄭州にやってきた。その親たちもまた、皆が旧満鉄社員の鉄道関係者であった⁽⁷²⁾。

石家莊から親と離れて鉄日中にやってきた子どもらもいた。その一人に先述の中澤貞男がいる⁽⁷³⁾。終戦時 13 歳であった中澤は戦後ハルピンで「学徒工」として働いた。1952 年 4 月、19 歳の時に鉄日中の 2 年に編入された。中澤のように終戦後の混乱の中で中等教育を受けられないまま中国に残っていた子どもたちとその親にとって、鉄日中の開校は朗報であった。鉄日中同窓会長の矢野治昭も、鉄日中に来る前数年間、石家莊機関区電力班ですでに就労していた。中澤や矢野らはいわゆる「年長組」といわれ、中学 2 年か 3 年に編入された。一方、12 歳程度で入学した子どももいた。北京から 24 時間、列車でやってきた原幸代もその一人で、子どもばかり 8 人の旅であった。原はこう回想する。「布団や大きい洗面器を背負った小さい娘」を遠くに送る（「私の年譜」）、「まだ内戦の火がどこかに埋まっているかもしれないあの頃、子も大変なら親もよくぞ手放したと思う」と⁽⁷⁴⁾。最も多くの学生を送り出したのは天水地区からで、天水鉄中からは 64 人の在籍学生のうち約 50 人が鄭州鉄日中に大挙転校してきた⁽⁷⁵⁾。

【充実した学校生活】

鉄日中での勉強については、先述したとおり正式な教員資格を持つ先生は中島百合子を除いていなかったが、元学生の座談会やアンケートへの回答では多くがとても充実していたと語る。日本人教師らへの敬慕の念も共通している。日本語でのまともな教育から疎外されていた少年少女らに対して、たとえ正規の教員ではなくとも一定の高等教育を受けた日本人の大人たちから受けた日本語での普通教科の授業、紀律ある集団生活の指導は、教科学習や人格形成の面で大きな影響を与えたであろうことは想

像にかたくない。鉄日中の元学生の中には、その後日本社会の様々な分野で第一線に立った人も少なくない。ハンセン病の研究で大きな功績を残し80歳を過ぎた今も東南アジアのハンセン病撲滅に力を注ぐ和泉眞藏（京都大学医学博士、元国立療養所大島青松園外科医長）もその一人で、「自分の今があるのは、鉄日中でしっかりした基礎教育を受けたお陰」と語る⁽⁷⁶⁾。京大原子力実験所で「反原発6人組」の研究者の1人として市民活動を支えてきた小林圭二（元京大原子炉実験所講師）も同様に鉄日中の元学生であった⁽⁷⁷⁾。前述の高松正司はこう語る。「わずか1年の鉄日中在籍の影響がそれほど大きいと見るべきではない」としながらも、自身が帰国後に入学した高校では、鉄日中では授業のなかった英語を除き「他の科目については順調に高校時代を送ることができたということは、中国の（蔡家坡の－引用者補注）鉄中1年、（転校した－同）鄭州の鉄日中で1年の中学教育レベルがいかに高かったか、先生方がいかに熱心に教えてくださったか、いつも思い出すたびに感謝しています」と⁽⁷⁸⁾。

鉄日中では教科以外の活動も盛んであった。鉄道管理局の講堂で行われる中国人の「文娛活動」（映画・演劇・唱歌・ダンスなどの活動）に鉄日中の学生もしばしば参加し、歌や踊りを披露した。河南省全体の鉄道管理局の運動会などもあった。前述の中澤も鉄日中のメンバーとともにそれに参加し、短距離走で1位になり全国大会出場への準備もしたが、日本人は不可ということで参加はできなかった。この当時の鉄日中を忍ぶことのできる唯一の写真が写真1である。ここに写る学生はすべて鉄日中の日本人学生である（最後列の男子が先述の『鄭州』前編集長中澤貞男）。シャツの胸には「鄭鉄直屬」とある。日本人学生が中国人とともにこうした運動大会で交流していた様子が偲ばれる。ただ、学級・宿舎は日本人だけの構成であったためか、それほど交流が日常的にあったわけではなかった。その点は中国人学生と四六時中同じ学級・宿舎で過ごし、それゆえつきあいの密度が濃かった天水鉄中とは異なっていたようだ。



写真1 「鐵路鄭州地區運動大會優勝紀念 1952. 9. 20」と記された記念写真
（小林成子氏（前列左端）提供）

鄭州の宿舎では、米、米粥^{おかゆ}、マントウを主食にし、豚肉、鶏肉も豊富にあった。中国人の料理人が、飼っていた豚や鶏をさばいてくれた。食べ盛りの子どもたちにとっても食事の量は充分あったと、口を揃えて回想する⁽⁷⁹⁾。「中国は日本人のためによくやってくれた」と中澤もいう。しかし、冬の寒さと南京虫は堪えたようだ。冬も宿舎には暖房がなく、マイナス10度にもなった。皆親元を離れてきていた。親との手紙のやりとりは自由にできたが、中学生がホームシックになるのは当然のことだった。それでも年上の学生らがよく面倒をみた。日曜日に上級生が町に買い物に出て、親からの仕送りのお金でお菓子類を沢山買ってきて皆で分けて食べた。鄭州での暮らしが青春の一コマであったことを思わせる回想もある。大沼たみ子は「楽しかったことは、夕食後、フォークダンスをしたこと。あの人がまわってくるとドギドギした」と綴る⁽⁸⁰⁾。恋愛は御法度であったそうだが、同級生の中で少なくとも二組が後に結婚した。

中澤は鄭州時代の学校生活をこう回想する。「鄭州での一年間はほんとうに楽しかった。それ以前は学問への道が閉ざされていたので、勉強できる嬉しさと、寄宿舎生活の中で同年代のいろいろな人と知り合う楽しさがあった。いい思い出として刻まれている。それは100人中99人までが同じ思いだろう。だからこそ、何10年もたっても毎年沢山の人が集まって同窓会を開いているのだと思う」と⁽⁸¹⁾。

【続く政治的影響】

勿論辛い思い出もあった。筆者がインタビューの中で多く聞いたのは政治教育や「批判会」に関わる思い出であった。そもそも親たちが日本人中学校を求めたのは、中国の学校での政治教育の影響から子どもたちを隔離しようとしたことがその大きな理由の1つであった。そして、その意味では望み通りの日本人学生だけのクラス・学校ができたわけだが、やはりここは中国であり、校舎提供やその他の便宜を図ってくれた中国側から完全独立した教育などできようはずもなかった。先述の理科教師森直枝はこう述べる。「校是は一、中国の経済建設に参加せん。一、日本革命の先鋒たらん。一、中日人民団結の橋梁たらん。の三つであった。」と⁽⁸²⁾。元学生の大沼たみ子は「社会科学の歴史では、中国の歴史が中心で……帝位争い、権力闘争、農民運動、毛沢東のことをしっかり叩き込まれた」と回想する⁽⁸³⁾。教科書も多くは中国の教科書を使ったし、国語・地理に関してはその授業内容について中国側の点検を受けた⁽⁸⁴⁾。

音楽教師の中島は授業で歌う「曲は八路軍の歌やソビエトの歌ばかりだった。両国の国歌、ロシア民謡などもあった。八路軍側が納得するような歌を作ったり、教材に載せたりした。そうでないと許可が下りないでしょう」と語る⁽⁸⁵⁾。国語を担当した岡崎兼吉自身も、鉄日中着任の事情について「「上級」の要請があり、わたしが「革命の必要とするところには行かなければならない」という素朴な階級意識(?)を持っていたからです」と回想する。そして、「自分は中国の諸情勢に注目し、それにもとらならないように努める生徒、戦後日本の民主勢力の発展に役立つ人間を目指す生徒を育

てたいという抽象的な願望から、教材を選び、授業をした」と述べる⁽⁸⁶⁾。

クラスの中ではしばしば「反省会（批判会）」が行われた。特定の子と仲良くなることさえも批判を受け、皆の前で自己批判させられたなどという経験を持つ人は少なくない⁽⁸⁷⁾。鉄日中に14歳で中学1年に入った保村正子は「批判会があったけど、あれは正しい事ではないと私は思うけど…中国的よね。もうあんな時代には帰りたくないね。」とふり返る⁽⁸⁸⁾。矢野治昭が鉄日中同窓会の会長になったのは、批判会で辛い思いを受けた某先生をなぐるために同窓会の会を開こうと思ったからとさえ語っている⁽⁸⁹⁾。その先生は教科の指導は持たず「政治指導員」としてピオネールを組織したりしており、矢野も「^{タンバ}坦 白（自己批判）運動」で反省が少ないと怒られたという。

またこの時代は中国全土で「衛生運動」がおこっている時でもあり、鉄日中でも「蠅取り」競争が展開された。鉄日中は他の学校と1カ月間の競争に勝ち、優勝旗をもらった⁽⁹⁰⁾。鉄日中が外界と分かちがたく繋がっていたことを示すもう一つの光景といえよう。学校の外では三反五反運動と反革命鎮圧運動の嵐も吹き荒れていた。批判会などもその影響を受けた出来事であったが、街頭ではもっと恐ろしい情景があった。近田副校長の子息である近田尚己は父を含む家族とともに鄭州に来た時は小学校の4年生であったが、そうした運動で批判された人たちが街中引き回しとなり、処刑場で処刑される様子を2、3回見た。処刑後、民衆がその処刑された人の脳みそを取り合っていた。漢方薬の材料になるという話だったという⁽⁹¹⁾。鉄日中の子どもたちも多かれ少なかれそうした時代の厳しいうねりの中におかれた。彼らのつかの間の異国での青春時代は、決して甘美に充ちた思い出だけで語らるものではなかった。やがて、鉄日中での生活も終焉を迎える。各地から集い学び初めてわずか1年余の後、悲喜こもごもの思いを胸に異国の学校を去る日がやってくる。

4. 帰国へ

(1) 「ぎりぎりの限界」

共和国建国後、日本人留用者の多数が早期帰国を望んだ背景には、子弟の教育問題とは別に、留用者自身の技術の耐用年数の問題があったことについては、筆者は天水や上海のケースでも述べてきた。本稿においても医療関係者らが鄭州の外来の「病棟に来てもらえることはなく、「故郷に帰ることに焦慮」している状況について述べた。

こうした状況に関して、既に拙論著で紹介してきた武内清一の言葉を思い起こしておきたい。武内は旧満鉄の技術員であったが、1950年11月、チャムスから移動して天水に留用となり機関車の修理の業務にあたっていた。3年後の1953年に天水から帰国する際の印象について筆者が尋ねた時、こう答えた。「医者にしても技術者にしても、三年もいると新しい知識が入らず、三年というのは何かを教えるということで

はもうぎりぎりの限界であった。帰国する間際、日本人の技術はいらなくなったと痛切に感じた。」と⁽⁹²⁾。1952年の時点で終戦からすでに7年目、共和国建国からでも3年目となっていた。鄭州地区においても、例えば1953年に鄭州鐵路發電廠で「送電線を改良して耐圧レベルを高め、変圧器も国産品のものに代え、日本式の変圧器は淘汰された」という状況が進展していた⁽⁹³⁾。鄭州の鉄道関係者も天水と同様の事態が起こっていたことが容易に想像されよう。

そうした留用者のおかれた一般的状況を日本側も把握していた。すでに1950年9月、外務省は「華北・中・南を通じて留用解除者（中共機関で不要となったもの）が次第に出て来ている」という通信も受けており、「満洲・本土を問わず、すでに不必要となった者、及び当初より中国側の負担となっていた老幼・病弱・婦女子は、何らかの機会に送還しようとする意思が、中共当局側にあることは明らかである」と認識していた⁽⁹⁴⁾。留用者らは「老幼・病弱・婦女子」と同様、「中国側の負担」となりつつあった。2年半後の1953年3月、舞鶴外務連絡事務所の外務事務官山口登はこう指摘する。「中共は今後の工業発展の五ヶ年計画を中国、ソ連人のみで遂行し、外国人を参加せしめない方針の模様で、……徹底的に帰国を勧誘している。済南地区、上海地区、漢口地区と通じて、残留を希望しても将来職業と生命の安全を保証しないと言明している。」と⁽⁹⁵⁾。鄭州も例外ではありえなかったであろう。日本製の設備もそれを操る技術者もソ連の技術協力や中国自身の技術者の育成によって、すでに「ぎりぎりの限界」を迎えていた。

(2) 後期集団引揚げ

そんな折、1953年には中国赤十字社側と日本赤十字などの民間3団体側との間で、残留日本人の引揚げに関する協議がまとまり、同年中に第1次(3月)～第7次(10月)

表4 鄭州からの後期集団引揚げ(1953年)

後期集団 引揚げ回数	上海出港の年月日	鄭州からの引揚げ者の 職種・職域・地域など	鄭州からの引揚げ者 の人数(人)	船名
第1次	1953年3月21日	軍及び鐵路関係者 開 封・洛陽を含む	160	高砂丸
第3次	1953年5月8日	鐵路管理局漢口分局	74	白龍丸
第4次	1953年7月3日	不詳	94	白山丸(24人) 白龍丸(70人)
第5次	1953年8月8日	不詳	13	高砂丸 白山丸
			計 341	

(外交史料館所蔵資料 K-7-1-3-(1-3))『中共地区邦人引揚げ関係 引揚げ概況』所収の「一九五三年度中共地域集団引揚げ者数 一九五三年七月末現在」,「地点別引揚げ者数」,及び K-7-1-3-3『中共地区邦人引揚げ状況』所収の「第三次船団帰還概況」1953年5月,「第四次船団帰還概況」1953年7月,「第五次船団帰還概況」1953年8月より。人数の「計」は筆者が集計したもの)

のいわゆる後期集団引揚げ⁽⁹⁶⁾が始まり、1958年7月の第21次まで続いた。鄭州にいた留用者らは基本的に上海経由で1953年中に引揚げたが、その際の船別報告書からその状況を整理してみると表4のとおりとなる。第7次引き揚げの後も、鄭州にはなお「希望残留者二名、帰国待機者七名（一家族）」が残った⁽⁹⁷⁾。

こうして同月、鄭州に留用されていた人びとも、また閩内各地にいるそれぞれの親元に戻った鉄日中の子どもたちも、ほとんどが帰国の途についた。しかし、その後大人たちは長期にわたる新しい技術・知識からの隔離や、政治的には一様に「アカ」と見られる偏見に苦しんだ場合が少なくなかった。大人同様、子どもたちも帰国後の人生は決して平坦ではなかった。それぞれの年齢に応じて小・中・高校に編入学したり、大学等を受験したりしていったが、学力とりわけまったく授業のなかった英語で苦労したと語る人は多く、また必ずしも年齢に相当する学年に編入学ができたわけではなかった。それに共和国建国後数年残っていたわけであるから、子どもらにも「中共帰り」の烙印が色濃くまわりついた。前述の高山瑠璃子などは、藤枝市の高校である先生から自分の名前を呼ばれずに「中共帰り」と呼ばれ、そのたびに抗議した体験を綴っている⁽⁹⁸⁾。子どもたちも多くの場合、親の留用にとまなうさまざまな困難と向き合いながら、その後の自らの人生を歩んでいくこととなった。

おわりに

本稿で検討してきたことは以下の3点に整理されよう。第1に、人民共和国建国後も、旧「満州」地区だけでなく閩内にも多数の日本人技術者らが留用されたが、鄭州にも鉄道や医療の関係者を中心に、家族を含めると少なくとも300人を超える日本人が留用などで当地に留まって暮らした。そのほとんどは1953年の後期集団引き揚げで帰国した。鄭州に留用された医療従事者の場合、その持てる知識や技術を十全に発揮できる状況ではなく、早期帰国への要求は高まっていた。鉄道技術と同様、医療現場においても医療技術の耐用年数の問題が背景にあった可能性が考えられる。

第2に、閩内各地の日本人留用者にとって、中学生年齢の子弟の教育が大きな悩みの種であった。その要求に応じて、いわゆる民族幹事らも日本人対象の中学校の開設に動いた。中国側もこれに応じることが留用政策を安定的に継続するための方策と見て1952年春、鄭州鉄日中を開設し、当時の経済環境の中で望むことのできる最大限の条件整備に努めた。日本人学生らと寝食を共にしながら彼らの面倒をみた中国人教師なども彼らの学習と生活を支えた。閩内唯一の日本人中学校であった同校には、各地から親元を離れて150人余りの学生が集った。

第3に、留用者らは子弟の「学力低下」の問題と並んで「思想的偏向」を危惧し、

中国の政治的影響から切り離された環境の中で、日本人教師から日本語で教育を受けることを望んだ。しかし教師陣には有資格者はほとんどおらず、政治的立場や満鉄人脈から呼ばれた人が大半であった。中国の中学校と同じような教材や方法ももちこまれた。校外の激しい政治運動の荒波とも無縁ではいられず、「坦白会」などに苦悩した学生もいた。そうした意味では必ずしも親たちが期待した環境とはいえなかったが、子どもたちはある意味柔軟にそうした環境に適応し、1年余りの短い期間であったが師弟関係、友人関係を含めて思い出深い青春の1頁として記憶されることとなった。

共和国建国以降も関内各地で続いた日本人留用のうち、鄭州におけるその状況と、関内各地の留用のいわば副産物として鄭州に生まれた鉄日中という特異な学校の存在について、史実の一端を明らかにしてきた。しかし、戦後日中関係史において余り顧みられてこなかった関内における留用の全体像の解明は未だほとんど手つかずの状態であり、今後の課題として探究していきたい。

註

- 1 1990年代の松本俊郎などの先駆的な研究の上に、2000年代には以下のような研究が積み重ねられてきた。①鹿錫俊を代表者とする科研費研究成果報告書「『満州』残留旧日本軍人に関する調査研究—中国共産党地域による「留用」の諸相を中心に—（1945～1955年）」2006年、②鹿錫俊「戦後中国における日本人の「留用」問題—この研究の背景と意義を中心に—」大東文化大学大学院アジア地域研究科編『大東アジア学論集』第6巻、2006年、③同「戦後国民政府による日本人技術者「留用」の一考察—中国側文献に依拠して—」斎藤道彦編『日中関係史の諸問題』中央大学出版部、2009年、④大澤武司「戦後東アジア地域秩序の再編と中国残留日本人の発生—「送還」と「留用」のはざままで—」『中央大学政策文化総合研究所年報』第10号、2007年、⑤同「東西冷戦と引揚問題—未帰還者問題をめぐる国際政治の構図—」熊本学園大学付属海外事情研究所編『海外事情研究』第37巻第1号、2009年9月、⑥同「新中国から祖国へ—日本人留用者と日本人戦犯の帰還—」加藤聖文・田畑光永・松重充浩編『挑戦する満洲研究—地域・民族・時間—』東方書店、2015年、⑦楊大慶「中国に留まる日本人技術者—政治と技術のあいだ—」劉傑・川島真編『一九四五年の歴史認識—〈終戦〉をめぐる日中対話の試み—』東京大学出版会、2009年など。華北や上海などでの留用に関わる資料としては、⑧加藤聖文監修・編集『海外引揚関係史料集成（国外編）』第32巻（中国本土編）、ゆまに書房、2002年が、また後期集団引揚げについては、⑨同第4巻（国内編）となる『舞鶴地方引揚援護局史』2002年などがある。

近年では⑩大澤武司「中国残留日本人留用者の帰還」国際善隣協会『善隣』第430号、2013年が、戦後日中関係史の中における後期集団引揚げのもつ意味や位置づけ、具体的展開過程などについて整理している。また、⑪飯塚靖「戦後中国東北地区における日本人留用技術者の諸相—資料「中共事情」より探る—」大阪経済大学日本経済史研究所『経済史研究』20号、2017年、及び⑫同「ハルビンにおける残留日本人と民族幹事—石川正義の逮捕・投獄と死」梅村卓・大野太幹・泉谷陽子編『満洲の戦後—継承・再生・新生の地域史—』勉誠出版、2019年などは、東北における留用の研究をさらに深めた。後者においては、本稿でも言及する「民族幹事」や、その代表格の一人である「中小路静夫」についても論及されており、留用問題と民族幹事との関係を知る貴重な論考である。また、⑬米澤泰英『満鉄技術者たちの運命—国共内戦下の逃避行—』オール・ヒストリー企画、2017年も満鉄中央試験所の技術者らにかかわる共産党の留用政策に言及している。

- 2 国民政府の留用政策については、朱婷、陳祖恩、米衛娜、馬軍などの研究がある。それらを含む日中双方のこれまでの研究状況について詳しくは拙著『『満州』から集団連行された鉄道技術者たち—天水「留用」千日の記録—』創土社、2015年の16頁、「留用」をめぐる研究状況を参照されたい。なお、張福平・趙長讓編『西北鐵路早期在天水 史話』甘肅地質印刷廠、2005年や、

- 張春航「天蘭鐵路建成与甘肅社会変遷」西北師範大学修士論文、2013 年が、共和国建国後の甘肅省天水での留用に言及し、日本人技術者らの功績を肯定的に評価しつつ論じていることを追記しておきたい。また近年では、陳祖恩「戦後上海に残留する日本人（1946～1949）」高綱博文・木田隆文・堀井弘一郎編『上海の戦後－人びとの模索・越境・記憶－』勉誠出版、2019 年が、内戦期の上海での留用について詳しい分析を行っている。
- 3 防衛省防衛研究所所蔵資料「中央・戦後処理四〇」第一復員局史料整理部『終連報丙綴』所収の連絡課「終連報丙第五六七号 引揚関係各省連絡事項（八月一日）」
 - 4 貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『二〇世紀満洲歴史事典』（吉川弘文館、2012 年）所収の「留用者」の項（714 頁、鹿錫俊執筆）
 - 5 厚生省援護局『引揚げと援護三十年の歩み』ぎょうせい、1978 年、109 頁
 - 6 前掲大澤武司「中国残留日本人留用者の帰還」13 頁
 - 7 中国側の調査によれば、1949 年 12 月末時点で、関内各地の鉄道部門には 25 の「単位」に家族も含めて 1905 人在留と把握されている（中国外交部檔案館所蔵資料 105 - 00224 - 05（1）『關於東北日僑系統別分布狀況』所収の「（東北）系統別日本人分布狀況（1949 年 12 月末）」）。
 - 8 外交史料館所蔵資料 K-7-1-2-(2-3-1)『ソ連地区邦人引揚各地狀況（含中共地区）中共の部（除く東北區）「通信資料」』所収の「通信資料第 1 号 中共地区鉄道関係留用者の集団移動」1951 年 4 月 10 日、2 頁（この『ソ連地区邦人引揚各地狀況（含中共地区）中共の部（除く東北區）「通信資料」』所収の資料は、以下の引用では「通信資料第〇号（タイトル名）」年月日、とのみ記す（〇は算用数字で示す）。なお、「通信資料第 1 号」は同第 3 号の「はしがき」によって、「第 1 号」と違って規定されたものである）。
 - 9 外交史料館所蔵資料 K-7-1-2-(2-3-3) 外務省管理局引揚課第一調査班『昭和二十五年五月十日現在（改訂版）地点別邦人留用機関一覧』所収の「地点別邦人留用機関数一覧表 昭和二十五年五月十日現在」より
 - 10 外交史料館所蔵資料 A 4-1-1-4『「中共事情」綴』所収の「中共事情 陸第 223」（1954 年 3 月 24 日）41 頁。『「中共事情」綴』は、1953 年以降の後期集団引揚者に対して内閣総理大臣官房調査室の関連機関が行った聞き取り調査の報告文書である（前掲飯塚靖「ハルビンにおける残留日本人と民族幹事」13 頁参照）。『「中共事情」綴』所収の資料は、以下の引用では「中共事情 陸第〇」（作成年月日）とのみ記す（〇の数字は算用数字で示す）。
 - 11 「中共事情 陸第 403」（1954 年 9 月 27 日）5～8 頁、及び 18 頁
 - 12 外交史料館所蔵資料 K-7-1-2-(2-3-2) 外務省アジア局第五課『通信資料半月報』第 19 号、1952 年 8 月 1 日、15～16 頁
 - 13 鄭州市檔案館所蔵資料全宗号 111-一卷内順序号 001 鄭州市衛生局「日籍医務人員工作帰国専卷」1958 年 11 月 5 日。引用文中の 24 人と 15 人の合計数の不整合については原文のまま。
 - 14 鄭州市檔案館所蔵資料 河南省立第二人民医院「呈報日籍人員工作分配及思想情況由」1952 年 12 月 24 日
 - 15 「中共事情 陸第 201」1954 年 3 月 10 日、26 頁
 - 16 関内における医療関係者としては、鄭州の他にも甘肅省天水にも鉄道医院などに 30 余名の日本人が留用となっていたことが、近年の天水会（天水方面の元留用者やその 2 世らで作る親睦団体）による現地調査でその個人名や所属医院名・職種などを含めて明らかにされた。当時天水には鉄道医院があり、天蘭鉄道の西方への延長とともに順次名称を換えながら移動し、現在は新疆医科大学第五附属医院となっている。中国側からは今日、天水鉄道医院や診療所に勤務した日本人医師・看護婦・薬剤師らが建国初期の同医院の運営に貢献したとして評価されており、同医院の創立 80 周年の記念誌（2017 年刊）にも掲載された（天水会編『会報 2017 & 18』2019 年）。医療関係者は北京にも少なくなかった。1952 年 6 月現在、北京市内の推定 600～700 人の残留者のうち、医療関係者は 82 人、家族を含め計 101 人と外務省は把握していた（「通信資料第 22 号 北京市残留概況」1952 年 8 月 1 日、6 頁の表より算出）。
 - 17 外交史料館所蔵資料 K-7-1-2-(2-3-2) 外務省アジア局第五課『通信資料半月報』第 14 号、1952 年 5 月 15 日、13 頁
 - 18 「中共事情 陸第 113」1953 年 11 月 27 日、13 頁
 - 19 前掲「中共事情 陸第 403」19～20 頁
 - 20 鄭州市檔案館所蔵資料全宗号 122 - 卷内順序号 006 省人民二院・省幹部療養院「為転発解決日籍工作人員子女養育費之規定由」1954 年 6 月 17 日
 - 21 「通信資料第 5 号 鉄道関係留用者の留用概況」1951 年 6 月 15 日、6 頁

- 22 鄭州市第一零一中学校校志編纂委員会編『鄭州市第一零一中学校志（1929-2009）』2009年、27～28頁、及び同中学校HPの「歴史沿革（1929-2019）」
(<https://www.zz101z.com/index.php?a=lists&catid=8>)より
- 23 鄭州市檔案館所蔵資料全宗号109－卷内順序号005 鄭州市人民政府文教局「第一九号」1953年4月8日に、「本市日籍中学」が1953年3月で終了したことが明記されている。「人、物、財」の移転の件は、前掲『鄭州市第一零一中学校志（1929－2009）』28頁。
- 24 中国鉄道学会教育委員会編『中国鐵路教育史（1949-2000）』西南交通大学出版社、2007年、12頁
- 25 同上12頁、及び855頁
- 26 「近田傳氏に聞く」愛知大学五十年史編纂委員会編『大陸に生きて』風媒社、1998年、132頁
- 27 原幸代「中小路さんとの二時間」鉄日中同窓会編『鄭州』第11号、1991年、6頁。中小路静夫は本名中村善太郎で、戦時中は日本兵捕虜で組織された日本人反戦同盟、戦後はハルビンで鉄路関係を中心として結成された新民主主義連盟の幹部の一人であった。原（『鄭州』の編集長）は、同記事の中で中小路が「連盟の親玉の中小路さん」として知られていた様子を伝えている。新民主主義連盟については、「中共事情 睦 第6」1953年7月30日、24頁参照。なお、藤原彰・姫田光義編『日中戦争下 中国における日本人の反戦活動』青木書店、1999年所収の「中村善太郎（通名・中小路静夫）さんへのインタビュー」に経歴等がある。
- 28 前掲「近田傳氏に聞く」132頁
- 29 近田伝「技術留用と鉄日中」前掲『鄭州』11号、7頁
- 30 岡崎兼吉「忘れられぬ事ども」『鄭州』1号、1974年、2頁。岡崎は小趙寨は「（鄭州－引用者補註）駅から十四、五分のところだった」と回想している。
- 31 「通信資料第23号 中共地域残留児童の教育概況」1952年9月1日、43頁
- 32 原幸代談（2016年9月30日、13名の鉄日中同窓生に集まっていたいただいた座談会（於JR新神戸駅内喫茶店）にて。以下、同座談会は「神戸座談会」と略記する。）
- 33 岡田純枝「社会の主人公として恥かしくない人になるために」在華同胞歸國協力會・日本子供を守る會共編『中國歸國兒童作文集 歸ってきた子供たち』大日本雄弁会講談社、1953年、54頁。「新中国に対する認識と理解を深め、更に今後の日中両国の友好に関心を深めること」（「はじめに」）を出版のねらいとする編集であることを考慮に入れても、子どもらの感想は彼らの実感であったのだろう。
- 34 大塚治「僕たちの学校」前掲『中國歸國兒童作文集 歸ってきた子供たち』99頁、及び足立達夫「親の留用残留後の痕跡記録」『鄭州』23号、2012年、112頁。本文中の「校舎も机も……」の文は、足立達夫の母足立とみの（鉄日中の寮母）の手紙文の引用。
- 35 高松正司より筆者宛メール（2019年12月8日）より
- 36 前掲『天水留用』28頁、163～164頁、及び前掲「共産党政権下、上海で「留用」された人びと」131～132頁
- 37 前掲「通信資料 第23号 中共地域残留児童の教育概況」85～89頁所収の「中共地域日本小学校及中学校一覧」
- 38 前掲『通信資料半月報』第14号、15頁
- 39 前掲「通信資料 第23号 中共地域残留児童の教育概況」87～88頁。なお、同資料によれば河南省の1校は鄭州にあった「中国鐵路小学校日本部（六年制）」であり、日本人児童35名、教師2名が在籍し、「二部教授」が行われていた（88頁）。1952年春からおよそ1年間4年生として同校に在籍した近田尚己（近田伝の子息）は、学校名を「鄭州第一鐵路小学校日籍班」と記憶する（近田尚己インタビュー（2017年10月21日、於愛知大学）より）。
- 40 「通信資料第8号 中共地区残留児童の教育概況」1951年8月10日、6頁。なお、第8号の約1年後の第23号（註31）では、「父兄の最大の悩みは、中共治下の教育のために思想的偏向をきたすという点にあるようである」とされ、「思想的偏向」がより強調されている。
- 41 前掲近田伝「技術留用と鉄日中」8頁
- 42 「通信資料第18号 最新引揚者資料」1952年4月、11頁
- 43 大沼たみ子「日本大学で講演したこと」天水会編『会報2012』37～38頁
- 44 前掲原幸代「中小路さんとの二時間」6頁
- 45 中島百合子インタビュー（2016年8月18日、於松山市内の喫茶店）より
- 46 清末好夫「青春時代を回顧して」天水会編『会報2007』19頁
- 47 清末氏への手紙（2018年9月19日付け）への返答書簡と、電話インタビュー（同年9月21日）より
- 48 前掲近田伝「技術留用と鉄日中」8頁。近田は、鉄日中開設準備について岡崎が「教科、教材」

- 面を担い、近田は中小路を通じて「教員集めに専念」したと語っている（前掲「近田傳氏に聞く」131頁）。
- 49 前掲原幸代「中小路さんとの二時間」6頁
- 50 鉄日中の元物理化学担当教師森直枝への聴き取り「調査報告」（『中共事情 睦 第6』1953年7月30日、18頁）。近田伝の子息近田尚己によれば、父伝と中小路とは満州時代からかなり親しい関係であったという（前掲近田尚己インタビューより）。
- 51 前掲近田伝「技術留用と鉄日中」8頁
- 52 近田伝「故人を偲んで」『鄭州』10号、12頁
- 53 教師たちの名前や担当教科などについては、以下の諸記事やインタビューを総合した。前掲「近田傳氏に聞く」132頁、前掲原幸代「中小路さんとの二時間」、岡崎兼吉「私の場合－編集者の質問にこたえる－」前掲『鄭州』11号、山口吉国「昨年を振り返って」『鄭州』25号、2014年、前掲中島百合子インタビュー（註45参照）、及び前掲森直枝への聴き取り「調査報告」（註50参照）など。なお、森直枝への聴き取り「調査報告」では音楽担当の中島百合子と夫の龍男について、「夫妻で音楽、美術、地理、バレエ 式 踊を担任」とされている（19頁）。岡崎の経歴等については、日本中国友好協会編『日本と中国』1999年9月15日の追悼記事「元北京大学日本語教研室専門家・北京大学日本文化研究所顧問 岡崎兼吉氏が北京で死去」が詳しい。
- 54 前掲中島百合子インタビューより
- 55 前掲近田伝「故人を偲んで」13頁、及び藤坂道子「今は亡き先生方の思い出」前掲『鄭州』1号、5頁
- 56 高倉マサ「思い出すまゝ」前掲『鄭州』11号、18頁
- 57 前掲近田伝「故人を偲んで」12頁
- 58 前掲「通信資料第 23号 中共地域残留児童の教育概況」34頁
- 59 山口吉国「私の履歴書」前掲『鄭州』11号、15～17頁
- 60 『中国土地改革体験記』中央公論社、1977年、118頁。秋山には他に『中国戦線の反戦兵士』現代史出版会、1978年がある。なお、前者の著書の中で、1953年7月頃に鄭州鉄日中に赴任し、「一九五四年（昭和二九年）四月、在留日本人が引き揚げることになり、私は学校を離れて北京にもどって」とあるが（118～119頁）、年月の混同があるようだ。
- 61 前掲「近田傳氏に聞く」132頁
- 62 第50回鉄日中同窓会（2019年9月18日、於市ヶ谷ヒルトンホテル）での筆者からのアンケート（以下「50回同窓会時アンケート」と略記）への回答、及び同会場での室賀雅文インタビューより
- 63 前掲近田伝「故人を偲んで」12頁
- 64 鉄日中元学生の和泉豪・眞藏、高松正司へのインタビュー（前掲「神戸座談会」にて）より
- 65 前掲岡崎兼吉「忘れられぬ事ども」3頁。屈は地理を教えていた可能性がある（高松正司「堀井氏への回答」『鄭州』28号、2017年、84頁、及び同氏による「50回同窓会時アンケート」への回答より）。一方、鉄日中同窓会会長の矢野治昭は、屈は40代前半の男性で、いつも職員室で中国語の教科書をガリ版に鉄筆で書き写していた先生だったと思うと記す（「50回同窓会時アンケート」への回答より）。なお、前掲『鄭州市第一零一中学校志（1929－2009）』には同中学校の前身鉄路第一中学の旧教職員氏名一覧があり（61頁）、そこには「屈希仲」の名があるが、それが当該の「屈先生」であるかどうかは確認できていない。
- 66 裴元佑インタビュー（2017年8月26日、於鄭州市内の自宅）より。本文中の裴慧慧からの話も同日のもの。
- 67 『鄭州』は第1号（1974年）創刊から今日（2019年）までに30号発行。中澤貞男へのインタビューは、2010年7月17日、千葉市内の喫茶店にて
- 68 前掲「通信資料第23号 中共地域残留児童の教育概況」39～40頁
- 69 前掲「中共事情 睦 第6」20頁
- 70 鉄日中同窓会所有。教職員12名の内訳は「教師」11名（中島龍男を含む）と「職員」1名（足立 富野）である。
- 71 高松正司「鉄日中に行くまで」『鄭州』16号、2004年、38頁、及び前掲高松正司「堀井氏への回答」82頁、和泉眞藏「生いたち」前掲『鄭州』28号、55・58頁。和泉は同手記の中で、鄭州時代を回顧し「私の人生にとって、中国革命の中で過ごした少年時代は決定的に重要な意味を持っています。1つは『為人民服務』、もう1つは『国際主義』です。」と記す。そして、生涯をかけて取り組んだハンセン病について、「その点でうってつけのテーマでした」と語る。
- 72 前掲第50回鉄日中同窓会での齋藤貢インタビューより
- 73 中澤の父親は満鉄社員で、奉天やハルピンなどで勤務した。終戦時中澤は13歳で国民学校高等

- 科1年に在籍していたが、終戦で学校は閉鎖されてしまった。
- 74 原幸代の手記「私の年譜」（私家版），及び原「戦争証言プロジェクト」『鄭州』22号，2011年，82頁
- 75 前掲『「留用」された日本人—私たちは中国建国を支えた—』67頁
- 76 和泉真藏インタビュー（2019年8月1日，於京都のレストラン）より
- 77 朝日新聞2019年6月29日「惜別 小林圭二さん 原発研究者・元原子炉実験所講師」参照
- 78 2016年10月2日付け，及び2019年9月29日付けの筆者宛のメールより
- 79 前掲「神戸座談会」での談話より
- 80 大沼たみ子手記（前掲『鄭州』28号，93頁）
- 81 前掲中澤貞男へのインタビューより
- 82 前掲「中共事情 陸第6」22頁。先述の鉄日中元学生の高松正司は，校是は2つで，森が挙げた3つの校是のうち第1項の「中国の経済建設に参加せん」はなかったと指摘する。兄と二人で鉄日中に入ったので，「父が父兄の立場で開校時に挨拶した時に述べたものですからよく記憶しています」という（高松より筆者宛メール2019年12月10日より）。
- 83 前掲大沼たみ子「日本大学で講演したこと」39頁
- 84 前掲中島百合子インタビューの後に同氏から提供された記録メモより
- 85 前掲中島百合子インタビューより
- 86 前掲岡崎兼吉「私の場合—編集者の設問にこたえる—」14頁。理科の森直枝は「国語の教材として民主新聞アカハタ，人民文学，前進（日本の「前衛」に当る—原注）……が用いられ，他は大体中国で使用している教科書によった」と述べている（前掲「中共事情 陸第6」22頁）
- 87 前掲「神戸座談会」での談話より
- 88 保村正子手記（前掲『鄭州』28号，79頁）。高山瑠璃子も，「小グループを作り団結をみだした」ことなどでいつも反省会のターゲットにされたと言う（高山瑠璃子手記，同『鄭州』28号，66頁）。
- 89 矢野治昭インタビュー（2016年6月11日，於所沢市自宅）より
- 90 太田清子「衛生運動」前掲『帰って来た子供たち』121頁
- 91 前掲近田尚己インタビューより
- 92 武内清一インタビュー（2012年2月4日，於松山市内レストラン）より。前掲『天水留用』164頁に所収。武内の経歴については山田晃三「国を超えた友情—天蘭鉄道建設に従事した日本人技術員・武内清一さんインタビュー録」天水会編『会報2017 & 18』2019年が詳しい。また天水での留用については，同「日本鉄路員工在大西北—修建天蘭鉄路的往事—」とその翻訳（訳高松正司，天水会編『会報2019』2019年に掲載），及び橋村武司『幻の残留日誌—中国に渡った1943年から帰国するまでの10年間—』（私家版，2019年）が参考になる。朝日新聞（2016年5月17日）も武内の取材記事（「「留用者」日中協力の原点」）を載せている。
- 93 王殿槐「鄭州鉄路供用電の今昔」『鄭州文史資料』第20輯，鄭州市政協文史資料委員会，1999年，79頁。翻訳は引用者による。
- 94 外交史料館所蔵資料 K-7-1-2-(2-3)『ソ連地区邦人引揚各地状況（中共地区を含む）中共の部（東北区を除く）』第1巻所収の外務省管理局引揚課第一調査班中国係「最近における中国地域残留邦人の帰国に関する動向」1950年9月4日
- 95 外交史料館所蔵資料 K-7-1-3-3『中共地区邦人引揚状況』所収の「舞外連第一九号」1953年4月20日（外務省アジア局長宛の山口登による報告文書）
- 96 後期集団引揚げについては，大澤武司「日本人引揚と廖承志—廖班の形成・展開と関与—」王雪萍編『戦後日中関係と廖承志—中国の知日派と対日政策—』慶應大学出版株式会社，2013年が，共産党側の送還政策の立案過程と組織体制，廖承志（辦公室）との関連などについて，精緻な分析を展開している。
- 97 表4の典拠表記中の「第四次船団帰還概況」1953年7月所収の「第四次白山丸^{マモ}丸 竜丸船別報告」
- 98 前掲高山瑠璃子手記（『鄭州』28号，67頁）

追記

本稿執筆にあたって，貴重な資料の提供やインタビュー，アンケート，座談会開催など並々ならぬご協力をいただいた鉄日中同窓会（矢野治昭会長）の会員や関係者の各位，鉄日中の元教師中島百合子先生，裴元佑先生，並びに中国鄭州市立第一零一中学校の李国喜校長をはじめとする関係各位に心よりお礼を申し上げます。

（受領日：令和元年12月13日）
（受理日：令和2年1月15日）

戦時上海における内山完造

—内山完造の〈グレーゾーン〉問題を中心に—

高 綱 博 文

はじめに

私たちは、日中戦争下にあった戦時上海（1937 - 45 年）を、敵／味方、支配／被支配、抵抗／協力といった二項対立で解釈することが困難な複雑な領域を〈グレーゾーン〉と捉えて研究を進めてきた¹。この〈グレーゾーン〉領域は堀井弘一郎氏の言葉を借りれば「『協力』の中の『抵抗』、『抵抗』の中の『協力』、『抵抗』と『協力』との融合や置換、あるいは『忍従』、『沈黙』との交錯など、多種多様なグレーゾーンが日常生活のさまざまなレベルで生起する政治文化空間」である²。本稿は「日中友好の架け橋」・「魯迅の友」として著名な内山完造について、戦時上海という〈グレーゾーン〉空間を生きることによって内山が抱えたところの〈グレーゾーン〉問題をを中心に考察を試みるものである。

なお、管見の限り戦時期の内山完造を対象とした歴史学からの専論は見られない。こうした研究状況は当該期の内山に関する一次史料が決定的に不足していることもあるが³、「日中友好事業の先駆者、中国人民の親しい友人」（夏衍）と呼んで日中両国において内山を「偶像」視して来たことも背景にある。そこで、本稿では内山が戦前・戦後に刊行した書物を主要な史料として、第1章では内山を論じる際に誰もが依拠する彼の自伝『花甲録』の問題性について論究し、第2章では内山の「老朋友」であった太田宇之助との関係を検討することによって当該期の彼の政治的な立ち位置を推定し、第3章では当該期の「内山漫語」を史料として読み解き内山の抱えていた〈グレーゾーン〉問題を考察するものである。

内山完造（1885 年 1 月 11 日～1959 年 9 月 20 日）の略歴は次の通りである。：日中友好功労者。上海内山書店経営者。岡山県出身。高等小学校卒業後、関西の商家で奉公。牧野虎次郎牧師の導きでキリスト教に入信、同師の紹介で1913 年参天堂の販

1 高綱博文編『戦時上海 1937～45 年』（研文出版、2005 年）、高綱博文・石川照子・竹松良明・大橋毅彦編『戦時上海のメディア——文化的ポリティクスの視座から』（研文出版、2016 年）、堀井弘一郎・木田隆文編『戦時上海グレーゾーン』（勉誠出版、2017 年）。

2 前掲『戦時上海グレーゾーン』、7 頁。

3 内山完造が戦前上海において書いていた膨大な量のノートブックと原稿は1947 年12 月の強制帰国により「全部それは上海で反古になった」という（内山完造『花甲録 日中友好の架け橋』平凡社、2011 年、384 頁）。

売員として上海へ渡る。1917年上海で開業した内山書店は日中文化人の交流の場として有名となり、1927年初めて同書店を訪れた魯迅とは、深い信頼関係で結ばれていた。1947年帰国、1950年日本中国友好協会を設立し理事長に就任、日中友好運動に生涯を捧げた。病気療養のため招かれた北京で死去⁴。

「日中友好の架け橋」として知られる内山完造については、これまで諸氏により以下のような疑念が出されている。本稿はこのような疑念を生んだところの戦時期内山完造が抱える〈グレーゾーン〉問題を、上記の順に従って不十分ながら考察を試みるものである。

1) 石堂清倫氏：『人民日報』が刊行されて、大連にも入ってきました。これに、『東山再起』という題して日本関係の囲み物……記事で内山完造さんがきびしく批判されたことがあるのです。内山は表面民主分子を装っているが、実は南京総軍（支那派遣軍）と関係を持ち、当然中国人民に引き渡すべき戦犯第一級というべき総司令官を密かに工作して、日本に送り還そうとしている警戒すべき反動分子であると書いてありました。のちに内山さんは友好人士として高く評価されますが、このことは、私にはたいへんショックでした。』⁵

2) 鈴木正夫氏：「内山完造には従来、日中友好の貢献者としてその功績を称えられ強調される傾向があった。しかし、内山自身が『花甲録』で書いているように、第一次上海事変の時に知人の中国人に名刺を渡して日本軍の手から護ったこと、太平洋戦争が始まって許広平が日本憲兵隊に逮捕されると、その釈放に尽力したことなど、なぜ一介の日本人書籍商人にそのようなことが可能であったかの疑念が湧く。商売上の取引を通じてであったにしろ、軍とパイプがあったのでないか。」⁶

3) 中村みどり氏：「日中友好の民間人として知られる『内山書店の店主』内山完造は、憲兵隊に捉えられた魯迅夫人、許広平の釈放のために軍部と交渉するなど、戦時の『グレーゾーン』の鍵を握る人物であった。」⁷

4 内山完造については幾つかの一般書が刊行されているが、差し当たり拙稿「上海内山書店小史・内山完造の社会体験—『花甲録』・『内山漫語』を読む」（高網博文『『国際都市』上海のなかの日本人』（研文出版、2009年、所収）参照。略歴は中村義他編『近代日中関係史人名辞典』（東京堂出版、2010年、104～105頁）参照。

5 「石堂清倫談＝1984年2月17日」（井村哲郎編『満鉄調査部—関係者の証言』アジア経済研究所、1996年、593頁）。石堂氏が読んだという『人民日報』の記事は探すことはできなかったが、同紙1950年3月23日付に「麥克阿瑟指使日本戦犯、継続侵華的罪行」との記事があった。同記事は台湾の蒋介石政権を支援する旧日本軍関係者による日本人義勇隊に関するものであり、内山完造は山田純三郎とともに全国遊説で各地の同志糾合と連絡につとめているとする。これは日本の雑誌『真相』第37号（1950年1月）掲載記事「海烈号事件の背後を洗う」に基づくものであり、その内容は信憑性に欠けるが、当時一部の人々には内山が反共・反民主的人物として捉えられていたことを窺わせものである。

6 鈴木正夫「魯迅と日本人特務—そして上海内山書店」『関東学院大学文学部紀要』第120・121合併号、上巻、2010年、256頁。

7 中村みどり「日本占領下上海における陶晶孫の言説—大東亜文学者大会と『老作家』・『狗』」（『野草』第102号、2019年3月、66頁）。

4) 石川照子氏：戦時上海における上海日本人YMCA・YWCAの活動を検討し、その活動は日本軍部の大陸政策の一環として「中国の現地住民に対する宣撫工作と、欧米キリスト教勢力の排除」という「文化工作としての戦争協力」を担うものであったと指摘する。さらに内山完造は上海日本人キリスト教徒コミュニティの中で大きな存在であり、1944年6月には上海日本人YMCAの理事長に選任されたとして「戦争協力」の側面へ注意を促している⁸。

第1章 内山完造の『花甲録』について

これまで内山完造の評伝は何冊か書かれているが、どれもが戦時期（1937～45年）における内山の活動については具体的なことはほとんど明らかにしておらず、書いてあるにしても彼がいかに日本の中国政策に非協力であり、日本の中国侵略を批判していたということを強調するものばかりである⁹。その依拠するものはほぼ内山の戦後の著作一なかでも内山自身による自伝『花甲録』が最大の典拠である。

周知の通り、内山完造の自伝『花甲録』（岩波書店、1960年9月）は内山完造・上海内山書店を歴史的に検証する際の一級史料として扱われてきた。同書は戦後1950年に内山がその生誕1885（明治18）年から還暦を迎えた1945（昭和20）年に至るまで自らの足跡を綴った回想録である¹⁰。

中国文学者・竹内好は同書について次のように指摘している。「自叙伝としても破格だが、それだけでなく、明治の末から敗戦までの日中関係の裏面史として、この本はえがたい利用価値がある」と高く評価し¹¹、一方でいくつかの問題点も挙げている。①「上海から送還されるとき日記や原稿を持ち帰れず、記憶だけにたよって」執筆されたこと、②内山一流の「漫談」形式であり、「そのとき自分がどう考えたか、ということと、いま自分がどう考えるか、ということが、内山さんの内部で区別がつかない。」¹²

さらに竹内は③『花甲録』に「記憶のあやまりはあろう。……内山さんはウソのきらいなひとだから、作為はないとみてよい」とも指摘している¹³。とはいえ、『花甲録』

8 石川照子「上海のキリスト教ネットワーク―その交錯と相克」（前掲『戦時上海グレーゾーン』、134頁、140頁）。

9 小澤正元『内山完造伝―日中友好につくした偉大な庶民』（番町書房、1972年）、吉田曠二『魯迅の友 内山完造の肖像』（新教出版社、1994年）等。

10 内山完造『花甲録』岩波書店、1960年。内山完造『花甲録 日中友好の架け橋』平凡社、2011年。本稿では後者（平凡社版）を使用した。

11 竹内好「内山完造と『花甲録』」（『日本と中国のあいだ』文藝春秋、1973年、348頁）。

12 同上、351頁。

13 同上、352頁。内山自身は『花甲録』「小序」において次のように書いている。「私の歴史が他人の歴史の借着であってはならん、嘘を書いてはならん。人々を騙ます様なものであってはならん」。

には内山が敬虔なキリスト者ピューリタンであったことを勘案して意図的な「ウソ」は書かれていないにしても、人間は一般的に自分に都合の悪いことは無意識に「忘却」ないし意識的に「隠蔽」する傾向があるからことは否定できない。特に戦時期における新聞・雑誌等のメディアを通じて内山完造の活躍を知る者の眼からすると『花甲録』の当該期の記述は極めて簡潔であり、そこには「忘却」ないし「隠蔽」があるのではないかと疑われる。

メディアに登場する内山完造の肩書は内山書店主であり、彼は常に「非政治的」立場であることを謳い「政治の動向は私には興味がありませんから、また考えたこともありません」（1936年）¹⁴、「政治と云う問題は一向無学なもので判然分かりません」（1938年）¹⁵と極めて謙虚・慎重な態度をとっていた。また、内山は自分自身を第一に「商売人」と考えており、商売人は「お客様になる人々を怒らせては、商売にならん」を鉄則としていたが、彼の「漫談」も中国で商売をしていることから「お客様」である中国人の悪口を書くことはなく、「日中友好」が一貫した立場であった¹⁶。彼の「支那漫談」も世間からは「趣味」の範囲として見られていた¹⁷。このような姿勢は、『花甲録』においても基本的に変わず政治的な関わりはほとんど記述されず、特に内山の日中戦争下における日本の国策への協力や、日本軍との関係を疑わせるような下記事項への記述は避けられていると推測される¹⁸。

1) 国策新聞『大陸新報』との関係：『大陸新報』は、1939年1月1日に「中支唯一の国策新聞」として日本軍占領下の上海で創刊された。山本武利氏の研究によれば『大陸新報』の創刊から経営まで朝日新聞社が深く係わっており、同紙は「汪精衛政権という傀儡政府を支援し、軍の中国侵略をごまかし、真実の報道を行わなかった謀略新聞であった」とする¹⁹。

内山完造は『大陸新報』に1939年9月～45年2月までに朝刊の「学芸欄」や夕刊の「現地評壇」というコラムなどの157編もの作品を寄せている²⁰。また、内山完造は1940年1月、大陸新報社が皇紀二千六百年記念事業として設けた「大陸賞」の選考委員に次のような人々とともに選ばれた²¹。

14 内山完造『鲁迅の思い出』社会思想社、1979年、34頁。

15 同上、177頁。

16 前掲「内山完造の社会体験」、参照。

17 「〔内山完造の一引用者〕趣味として『支那人生活状態 研究』は、多年の経験により蘊蓄極めて深く、同好者の研究会、学校等に於て講演し、又新聞雑誌等に発表する等、本人の『支那漫談』は既に日本に於てすら定評あるものなり。」（「内山完造」『中華全国中日実業家興信録』上巻、上海興信所、1936年、116頁）。

18 山下恒夫編「内山完造年譜」（前掲『鲁迅の思い出』所収）には、本稿で取り上げる『花甲録』に記述がない事項も記載されている。

19 山本武利『朝日新聞の中国侵略』文藝春秋、2011年、245頁。

20 呂慧君「日中友好の＜媒介者＞内山完造の文学・文化活動に関する多元的研究」、関西学院大学博士論文、95頁。

21 呂慧君「内山完造と『大陸賞』」（前掲『戦時上海グレーゾーン』所収）参照。

「支那派遣軍報道部長陸軍大佐 馬淵逸雄氏、上海在勤海軍武官補佐官海軍中佐 間直顯氏、上海総領事館情報部長 鶴見憲氏、興亜院連絡部文化局長 森喬氏、東亜同文書院長 大内暢太郎氏、内山書店主 内山完造氏、上海商工会議所理事長 経済学博士 杉村廣蔵氏」（アンダーライン＝引用者）²²。

1942年2月には内山完造は「東亜の建設に黙々と寄与」「真に大陸文化建設を促進」したとして第二回「大陸賞」を受賞した²³。

2) 上海居留民団「官選議員」に選出：1941年2月22、23日に「八万の邦人から成る『日本上海』の代議士たる民会（上海居留民団＝引用者）の選挙」が行われ「民選議員」25名とともに上海総領事が選任した「官選議員」25名が選出された。その際、内山完造は「現地文化人の肝煎り役」であるとして「官選議員」に選ばれた²⁴。

3) 内山完造は、1944年2月11日に日本大使館より「日華親善の尖兵として活躍した在華模範邦人」、3月8日には「日華友好提携に尽瘁した優良邦人」として表彰された²⁵。

4) 内山完造が魯迅夫人許広平等を日本憲兵隊から救出に尽力した下記の事件については、今日よく知られたことであるが『花甲録』には記述されておらず、許広平の証言が発表された後に内山により明らかにされた。

1941年12月15日に日本憲兵隊に許広平が逮捕されたことを知るや内山完造は憲兵隊に書面で釈放を申し入れ、フトン・毛布・副食物の差し入れが許可された。内山の尽力もあり許広平は70余日後に釈放された。また、開明書店の章雪村と夏丐尊がやはり日本憲兵隊に拉致された際に内山は彼らの釈放に尽力している²⁶。

戦時上海における内山完造は、内山書店主であるとも国策新聞『大陸新報』の常連寄稿者であり、さらに「大陸賞」を受賞し、上海総領事選任の「官選議員」として上海日本人居留民社会の名士でもあり、鈴木正夫氏・中村みどり氏が推察するように「日本軍との個人的なパイプを持ち」それによって中国の友人たちを守るような「グレーゾーン」的な存在でもあったことは確かであろう²⁷。

さて、内山完造は『花甲録』の原稿執筆を1949年12月25日に開始し、50年12月30日に終了している。執筆開始直前の49年10月1日に中華人民共和国が誕生し、内山は49年10月10日の日本中国友好協会創立準備大会へ参画し、50年10月1日

22 『大陸新報』1940年1月1日付。

23 『大陸新報』1941年2月22日付。

24 『揚子江』第4巻第4号、1941年4月、139～144頁。拙稿「『揚子江』に見る上海日本人居留民社会」（日本大学通信教育部『研究紀要』第32号、2019年3月、31頁）参照。

25 『大陸新報』1944年3月8日付。前掲「内山完造と『大陸賞』」、参照。

26 内山完造「当時の思い出：1954年12月27日」（許広平著、安藤彦太郎訳『暗い夜の記録』岩波書店、1955年、所収）参照。許広平等の日本憲兵隊からの救出については、『花甲録』（1950年12月30日脱稿）には言及されていない。

27 前掲「魯迅と日本人特務」、241頁。

に成立した日本中国友好協会の理事長に就任している。

内山が戦後に刊行した著作『おなじ血の流れの友』（中国文化協会、1948年10月）→『中国四十年』（羽田書店、1949年6月）→『そんへえ・おおへえ』（岩波書店、1949年9月）→『花甲録』と時系列で検討してみると彼が「共産主義なる青い鳥」へ傾斜して行き、『花甲録』を執筆段階では「中国共産軍の革命が成功」したことを慶賀するに至っていることが窺われる。むろん、内山のこれらの戦後の著作においても、彼の立場は一貫して「日中友好」であり、戦時期において日中戦争に反対であったとして国策協力や戦争協力について読みとることは困難である。

内山は『花甲録』を執筆するに当たり「中国人の習慣によれば年六十になるとともに自らの年譜なるものを作り、自らの歴史を書くことにする」とその動機を語っているが、その「自らの歴史」とは彼が体験したことについての客観的な歴史叙述ではなく、竹内好が指摘するように「即興的に喚起される印象の無際限の流出」というべきものであり²⁸、それは内山の「漫談」「漫語」の一形式と見なすこともできる。

要するに、内山完造は『花甲録』を執筆した時点—中華人民共和国が誕生し、彼が日中友好運動という政治運動に乗り出した時代の意識によって「自らの歴史」を上書きしながら戦前の上海における日本人—庶民としての生活史を回憶し、内山書店主としていかに「日中友好」・「日中文化交流」に尽してきたことを物語るものがある。

第2章 二人の「支那通」—内山完造と太田宇之助

日中戦争下の上海において内山完造は、上海在住の「老上海」文化人として新聞・雑誌に「内山漫談」「内山漫語」と呼ばれる数多くの随筆を執筆し、それらの随筆は次のような本としてまとめられ出版された。

『支那の民俗習俗に就いて』日本文化協会、1938年2月

『上海漫語』改造社、1938年12月

『上海夜話』改造社、1940年3月

『上海風語』改造社、1941年8月

『上海霖語』大日本雄弁会講談社、1942年10月

『上海汗語』華中鉄道弘報室、1944年3月

内山完造が当時、最も活躍した言論メディアは1939年1月に上海で創刊された『大陸新報』であった。同紙について『朝日新聞社史』は次のように述べている。

「昭和十四年元旦創刊の『大陸新報』は、華中における日本の国策新聞で、陸軍、海軍、外務省三省と興亜院の後援で設立、本社を上海においた。朝日から相当の人員が大陸

28 前掲「内山完造と『花甲録』」、351頁。

新報に転じた。これは朝日が軍から委託されて経営したのではなく、朝日が新聞経営に協力したのであった。」²⁹

以下、検討するように内山完造と『大陸新報』との間には、「支那通」ジャーナリストとして活躍していた朝日新聞社の太田宇之助がいるのではないかと、さらに戦時期における内山完造の背景には、互いに「老朋友」・「親友」と呼ぶ内山と太田宇之助の親密な関係があるのでないかと推測される。

さて、太田宇之助（1891年10月8日～1986年9月2日）の略歴は、次の通りである。：兵庫県出身。早稲田大学在学中の1916年に上海へ渡り、孫文の第三革命に参加。1917年7月に大学卒業後、大阪朝日新聞社に入社、18年4月上海特派員。1923年4月東京朝日新聞社支那部次長。1925年1月北京特派員。1929年9月から32年8月まで上海支局長。この時期に支局には尾崎秀実がいた。34年東亜問題中国主査、39年論説委員兼任となる。37年に『新支那の誕生』を刊行、その論調は中国資本主義の発展と国民政府による国内統一を評価し、日中経済提携を唱える。

40年7月朝日新聞社に在籍のまま支那派遣軍総司令部嘱託となり、「思想戦指導要綱」の起草に係わり、汪精衛（汪兆銘）政権の強化を図った。41年7月、支那派遣軍司令部嘱託を解任されたが、汪精衛からの依頼で東亜連盟総会顧問を委嘱され、朝日新聞中支特派員として中国に留まった。43年4月から汪精衛政権の経済顧問兼江蘇省政府経済顧問に招聘され、朝日新聞を退社。45年3月に帰国³⁰。

太田が、はじめて内山完造を知ったのは上海支局長時代であり、当時内山書店が北四川路底の表通りに店を構えていた。太田宇之助と内山完造の関係は、太田の回想録『生涯—新聞人の歩んだ道』に「内山完造君のこと」として書かれており³¹、彼の翻刻された「太田宇之助日記」には頻繁に内山完造が登場する³²。

太田は内山完造について次のように述べ、内山の「日中友好」への貢献を高く評価している。

「内山君はもともと世話好きの男であるが、とくに中国の友人家族の世話をよくしたもので、その中には不遇にある革命家が少なからず含まれていた。日本に亡命していた郭沫若氏及び家族との関係ができたもの、その一例で、そのほか新中国創設に当って活動した中共の人々に知友が相当あった。こうした関係から戦後の日中関係復興のため同君は新しい仕事を始めるようになった。『日中友好』の橋渡し役として打ってつけだった。

しかし、戦前、戦中、赤松（太田のこと—引用者）は内山君との長いつき合いの間で、

29 朝日新聞社百年史編集委員会編『朝日新聞社史（昭和戦前編）』朝日新聞社、1991年、625頁。

30 前掲『近代日中関係史人名辞典』、128頁。

31 太田宇之助『生涯—新聞人の歩んだ道』行政問題研究所、1981年、146～149頁。

32 （翻刻）望月雅士「太田宇之助日記（昭和15年）～（昭和20年）」（『横浜開港資料館紀要』第20号～第28号、2003年～2010年、掲載）。

イデオロギーに関する話をし合ったことは一度もなかった。同君を中共のシンパなどと思ったことは全くなかった。しかし腐敗した政治家や旧官僚に愛想をつかし、中国の大衆、農民を搾取する者たちに対し非常な憎悪心を持っていたのは事実である。あくまで野人であり、政治問題に無関心に近かったと赤松は彼を諒解していた。それが戦後『日中友好運動』から利用されて、いつしか現実に関中共派となってしまった観がある。ともかく両国の新関係のために大きな功労を立てたのは認めざるを得ない。」³³

太田は内山完造と個人的に極めて親しい関係にあったと見られ、「日記」によれば内山の私宅において度々食事や宿泊し、内山みき夫人から灸を据えてもらっている³⁴。「太田宇之助日記」には、次のような記載等が見える。

- ・ 1941（昭和 16）年 3 月 7 日「新月に内山老を招き、大陸賞の受賞を祝す」。
- ・ 1942（昭和 17）年 3 月 1 日「内山書店店主、中山君（中山優か―引用者）と食事を共にし船津氏（船津辰一郎か―引用者）を訪ひ」。
- ・ 同年 7 月 23 日「特務機関に日野水中尉を訪ひ、内山書店の内山老を訪ひ」。
- ・ 同年 7 月 27 日「午後内山書店店主と新たに大陸新報に入った広瀬庫太郎君と、内山の招待にて『月したそば』にて夕食を代ふ」。
- ・ 1943（昭和 18）年 1 月 26 日「内山書店から菊池家を訪ひ、大使館事務所に大家大佐を訪ひ」。
- ・ 1944（昭和 19）年 1 月 17 日に太田は「Y・W・C・A で内山氏が阿部知二氏紹介の為に、当地文壇の先輩、夏丐尊と陶晶孫両君を招き放談した」に同席。
- ・ 同年 6 月 18 日「訪問、内山、井上参謀、菊池」。
- ・ 1945（昭和 20）年 2 月 17 日「丸山、田中両少尉を内山宅に招いて、肉のスキヤキをして鱈腹食べさせる」。

当時の太田宇之助と内山完造は、中国人社会で一般的に見られる利己的行為と利他的行為が表裏一体をなしている「老朋友」＝「相互扶助」関係にあったものと推察され、太田は内山宅・内山書店を上海における活動拠点として利用しており、一方で内山も『大陸新報』等の戦時メディアにおける活躍を勘案すると太田の朝日新聞社―大陸新報社―日本軍当局―汪精衛政権のネットワークに何らかの依存関係があったのではないかと推察される。むろん、内山完造は上海内山書店店主にして「多年支那の政、學界樞要の人達と交友深く……又一方支那研究の目的を以て渡来する日本の文人、墨客、宗教家等多く當店を訪づれ、民國事情を尋ね或は研究資料の援助を受ける等の連絡」³⁵

33 前掲『生涯』、148 頁。

34 「太田宇之助日記」参照。

35 前掲「内山完造」（『中華全国中日実業家興信録』上巻、119 頁）。

があることから内山のネットワークは数多くあったが、太田「日記」からすると両者の関係は特に親密であったことが窺われる。『花甲録』によると政治を語らないことを信条としていた内山が1940年にローマ法皇による日中戦争の仲裁や、1945年に「ソ連に戦争仲裁」を依頼することを考えた際にいずれも太田宇之助に相談していることから両者は単なる友人関係でなかったことを窺わせる³⁶。

内山完造と太田宇之助はともに「支那通」・「中国通」として有名であり³⁷、中国を熱愛し、日中両国の架け橋になりたいと願っていたことは共通していた。

太田宇之助も、内山完造を中国在留邦人の中でも「中国を愛する者……政治を離れて純粋に中国を愛する人……中国に長く住んでいる中に、いつも間にか大陸的となり知らず識らずに中国的になって」行った者と好意をいだいており³⁸、内山の「漫談」「漫語」を愛していたことは確かである。太田が『文藝春秋』（昭和17年10月号）に掲載した「中国随論」という随筆は、中国人及び中国社会論は内山のそれと共通するところが多い。コラムの主な項目を上げてみると次のようである。「没有法子」、「自治思想」、「相互扶助」、「強い生活力」、「国民性の相違」、「個人主義」、「商業道德」等々³⁹。ただ、太田の言論活動は内山完造とは異なり中国の政治・経済、日中関係を論評することにあり、1930年代彼は「良識的中国通」ジャーナリストとして高い評価を得ていた⁴⁰。

1940年、太田宇之助へ支那派遣軍総司令部嘱託に就任することを要望したのは、ノモンハン事件を指揮してソ連軍に敗北してその責任を取らされる形で同総司令部へ転出して来た辻政信参謀であった⁴¹。辻参謀の意向を同年6月27日に太田に伝えたのが支那派遣軍報道部長馬淵逸雄であった⁴²。望月雅士氏によれば太田が陸軍の要請に応じたのは「日中和平を掲げた汪兆銘新政権の動きは、戦争終結を導くものと太田は確信し……自らその渦中に入り、和平に向けて尽力したいとの決意だったと思われる」と推察している⁴³。

36 前掲『花甲録』、409頁、491頁。

37 なお、内山完造は「私は中華民國とか中國と云ふ言葉は何んの親しみも感じないが、支那とか支那人とか云ふ言外に親しみを覚へるのである」（前掲『上海風語』、280頁）と言い「支那通」という言葉を使用するが、太田宇之助は戦前から「中国人は『支那』と呼ばれることをあまり喜ばない」（『中国と共に五十年』鷹書房、1977年、274頁）と言って「中国通」という言葉を使用した。

38 同上「中国随論」、292頁。

39 同上「中国随論」、参照。

40 島田大輔「ある中国専門記者の誕生—1910～20年代の太田宇之助の中国経験と中国認識」（『メディア史研究』第44号、2018年11月）参照。

41 辻政信や馬淵逸雄は汪精衛政権の最高軍顧問であり、彼らを指導していたのは汪政権を樹立した謀略工作を専門とする参謀本部の高級参謀影佐禎明であった（山本武利『日本のインテリジェンス工作』新曜社、2016年、144頁）。

42 前掲「太田宇之助日記」1940（昭和15）年6月27日。

43 望月雅士「解題 支那派遣軍嘱託としての太田宇之助」（『横浜開港資料館紀要』第21号、2003年3月、112～113頁）。

辻政信は陸軍内では石原莞爾派に属し、石原中將を中心とする東亜連盟運動の熱心な同調者であり、中国に対して信愛感を持ち日中戦争を速やかに終結させたいと考えていた。辻参謀は支那派遣軍総司令部へ転出すると汪政権を強化することを企画して「思想戦争指導要綱」の作成に取り掛かり、それには太田の主張―「中国側（汪政権）の主潮に同調し、民心を把握することに努めなくてはならないなぬ」が取り入れられた⁴⁴。

太田宇之助は支那派遣軍総司令部嘱託になってから汪政権との繋がりも密接となり、「汪兆銘主席と会って直接意見を述べる機会が多くなった一方、意見書の特種の問題に限って提出することも屢々であった」という⁴⁵。むろん、太田の汪精衛の評価は高く、戦後においても汪精衛が「日本の傀儡」であったことを否定し、次のように述べている。

「（汪兆銘は一引用者）日本軍部にあやつられたように振舞いながら、本来の主張と高い見識を決して失わず、窮極において目的を達しようとする遠大な望みを持っていたものと私は信じている。」⁴⁶

太田と「老朋友」の関係にあった内山完造も、『花甲録』において汪精衛について次のように書いている。

「南京に新国民政府が出来た。主席は汪精衛（汪兆銘）であるという。これは蒋介石と並んで国民政府の巨頭である人だ。その人が日本という敵と提携して和平政策の新国民政府を設立した。日本人には考えられないことである。……抗戦政策を堅持して戦う国民政府の重慶から、両巨頭である一人の汪精衛が脱落して逃げ出す。その逃げ出した汪精衛が全く反対の政策である和平政策を採って、敵である日本の陣営に飛び込んで来る。実に大胆不敵である。日本人は若い。その手にまんまと乗ったのである。」⁴⁷

戦後、内山は別な著作において次のようにも書いている。「汪精衛にしても、陳公博にしても、一口も日本の為めとか、日本人の為めとかいふことを云うことはなかつた、いつでも中華民國のため、四萬萬中国民族の為めと云うて居つたとのことである。古語にもある、勝てが官軍、負くれば賊、一本は倒れて遂に目出度ゝ。」⁴⁸

このような文章を読むと内山も太田と同様に汪精衛への評価は極めて高く、彼を「日本の傀儡」や「漢奸」として見ていないことは明らかである⁴⁹。一方で、内山の蔣介

44 前掲『生涯』、172 頁。

45 同上、181 頁。

46 前掲『中国と共に五十年』、22 頁。

47 前掲『花甲録』、410 頁。

48 内山完造『中国四十年』羽田書店、1949 年、175 頁。

49 『花甲録』において内山完造は 1920 年中国初のメーデーで「汪兆銘先生」に会ったことを語っているが（189 頁）、このことは「汪氏のある思い出」（前掲『上海夜話』、277～279 頁）でも語られており、内山が汪精衛に好印象を持っていたことを窺わせる。

石への評価は魯迅を迫害し、1931年には魯迅の若い友人柔石をはじめ多くの青年を逮捕、銃殺していることから否定的であったことは間違いないであろう⁵⁰。戦時期にあっても内山完造は「宣伝技術」に言及したある漫語において蒋介石を次のように述べていることから推察できる。「頭から蒋介石は馬鹿だと言うだけでは効果がない。蒋介石が如何に現在の世界認識に欠てゐるとかといふ点を衝く……それが宣伝の極意ではないかと思うて居る」⁵¹。

戦時期、内山完造も太田と同様に汪精衛政権の誕生に日中戦争の終結を期待し、汪政権こそ日本が提携すべき「中国」であると考え、それを容認していた可能性は高いものと言えよう。「老朋友」関係にあった内山完造と太田宇之助は、「日中友好」を熱望する「支那通」として汪精衛新政権に期待する政治的方向性を共有するものであったと推察できる。

第3章 内山完造の＜グレーゾーン＞問題

内山完造は日中戦争以前より「魯迅の友」・「老上海」として日本言論メディアに登場しており、「内山漫語」を発表していた。内山が上海現地「文化人」として本格的に活躍するのは、第二次上海事変以降に在上海日本人数が急増してからであった。日中戦争は1938年10月に広東・漢口が陥落すると新段階に入り、日本側のスローガンは「暴支膺懲」から「長期建設」に変わり、近衛内閣は「東亜新秩序」建設こそ「支那事変」の本来の目的であるとした。これに呼応するように「日支提携は先づ相互の信頼から。相互の信頼は相互の理解に始まる」を謳うところの国策雑誌『揚子江』が1938年9月に創刊された⁵²。同創刊号に内山完造は「揚子江を語る」という座談会に海軍中将杉坂悌次郎、海軍中佐菊池豊吉等とも出席している⁵³。

『揚子江』は中支派遣軍報道部(1939年9月から支那派遣軍報道部)の指揮下にあり、対日協力政権＝中華民国維新政府の支援で刊行された。これに次いで39年1月に創刊された国策新聞『大陸新報』も中支派遣軍報道部の指揮下にあり、その指導をしていたのが馬淵逸雄報道部長であった。「文化將軍」とも呼ばれた馬淵報道部長はメディア統制についても、次のような独自の見解を持っていた。

「言論機関は、国家権力を発動しない限り、絶対服従を強要する訳には行かぬ。況

50 内山は魯迅の言葉を次のように伝える―「蔣（蒋介石―引用者）はベテ政治をやる。國民黨がこれを許すなら黨自身もベテ政治をやるものだ、ある時は聲を大にしてその非を鳴らしてゐた。……死ぬまで蔣や國民黨に對する反對の態度を固執してゆづらなかつた。」（前掲『上海霖語』、10頁）。

51 内山完造『上海霖語』大日本雄弁会講談社、1942年、233頁。

52 前掲『『揚子江』に見る上海日本人居留民社会』、参照。

53 『揚子江』創刊号、1938年9月。

やインテリ、ジャーナリストをや。……然し不自然なる強要に対し、彼等は決して心からこれに随従して来るのではなく、内心では反発しているものがある。これ等は全く拙劣な言論指導であって、その禍害は将来に及ぼす事、量り知れざるものがある。」⁵⁴

ある人の回想によれば当時の支那派遣軍報道部は馬淵逸雄をはじめとする「文化人肌」の部長が歴任しており、彼等は「武力戦よりも文化各部門をもって日華友好の道を開拓しよう」としており、その民間人支援者の中には内山完造もいたという⁵⁵。内山は『大陸新報』に絶えず「漫語」を寄稿していたが、当局から「内山は傾向がよくない」と新聞社が注意されることがあったらしいが⁵⁶、馬淵逸雄等の報道部長の指導・影響下にあったため検閲体制に引っかかることはなかった。当時、内山は頼まれれば日本の現地部隊であろうと「漫談」をおこなっていた⁵⁷。

内山完造が、国策メディアにおいて本格的な活躍を始めるのは1940年3月に中華民国国民政府＝汪精衛政権が樹立され、日本当局が「日支親善」・「日支提携」・「相互理解」を声高に謳えるようになった頃からである。

第二次上海事変直後は、戦争景気を当て込んで渡来した一旗組日本人が激増し、その所業には目に余るものがあった。汪精衛政権が誕生することになると、日本当局による「支那渡航者制限令」や領事館警察による取締りの強化により、戦争利得を求め一旗組は淘汰され、代わりに国策会社の従業員や居留民団職員・領事館職員・警察官等の公務員等——「新興派」居留民が激増した⁵⁸。彼らは「内地」から来たばかりであり、中国人のことをほとんど知らなかった。

1940年4月29日に支那派遣軍総司令部総参謀長・板垣征四郎の名前で「派遣軍将兵に告ぐ」という冊子が出された。そこには日中戦争の交戦対象は「支那の良民」ではなく英米仏ソ列強と結ぶ重慶の蒋介石政権であり、その迷妄を打破して道義に基づく「日満支三国関係の調整整合」し、「東亜新秩序即ち東亜建設」こそ戦いの目的であると強調されている。このような目的を持つ日中戦争を「聖戦」と呼び、「敬、信、愛を以て両民族を永遠に結合せよ」と主張して、次のように中国の伝統と習俗を尊重せよと謳っている。

「支那には支那の伝統があり、支那人には支那人特有の習俗がある。之を尊重し之を理解して其の面子を尚ぶ事は絶対不可欠の要件である。日本人は眞の日本人たると

54 西岡香織『報道戦線から見た「日中戦争」』芙蓉書房出版、1999年）、260頁。

55 王見実「一個の胡桃」（『NIPPON 先駆の青春一名取洋之助とそのスタッフたちの記録1934—1945年』日本工房の会、1980年、169頁）。

56 『花甲録』、468頁。

57 同上。

58 山村陸夫「アジア太平洋戦争期における上海日本人居留民社会（下）」（『和光経済』第49号第1号、2016年、14頁）。

共に支那人の眞の支那人たる事を尊重せねばならぬ。友好には寛容と同情とが必要である。」⁵⁹

ここには「日支親善」が謳われている。しかし、日本の「親善」対象となる「支那」とは汪精衛政権等の対日協力政権のことであり、一方で抗日政権（重慶国民政府—引用者）や「匪賊」（中国共産党—引用者）は決して「支那の良民」ではなく徹底的に「膺懲」せよと主張する⁶⁰。

1940年3月に南京に汪精衛政権を樹立した日本軍部は占領地における「民心建設」という宣撫工作に本格的に着手し、そのためには本物の「支那通」を必要としていた。馬淵逸雄は1941年に刊行した『断乎！東亜解放戦の完遂！—事変処理と民心建設の重要性』において「支那通」について次のように論じている。

「『支那は謎の國である。不可思議な民族である。謎の扉は仲々開かない。この扉を開くには鍵が必要である。支那通にコツを教へてもらはねば支那相手の、支那人相手の仕事は出来ないぞ』と自他ともに主張するのが所謂『支那通』である」。とはいえ、そのほとんどが「外交上の交際」、「取引上の交際」、「社交上の交際」等から得た断片的な「支那知識」を持ったところの「支那通」であり、「事變發生以來一知半解の『支那通』の心なき些末の行動により支那社會の民衆を駆つて、日本から離反せしむることに拍車をかけたのは、支那人から云はせると之をあまり多く見聞して居る。其の事は日支の大局に害あるのみならず、日本に對して不誠實なる舉動を招來する原因となる。」⁶¹

ここから「支那人を下劣視」しない「支那の社会的存在を辯護し、よく人を見るの明」を持つような本物の「支那通」が求められた⁶²。華中占領地の文化工作进行を担当した馬淵逸雄により本物の「支那通」として選ばれたのが、太田宇之助であり、内山完造であったと考えられる。内山は日本軍と共に宣撫工作进行すべきであるとの覚悟を示すような次のような文章を残している。

「今日大東亜共榮圈の確立と云ふ大事業に心血を注いで居る時である。これが確立の為に我等は運命を賭して居るのである、そして大東亜共榮圈の棒の一端を擔ふ者は支那の人々である。吾々は自らの生命とその國を賭けてその共榮圈確立に寢食をも忘れて居るのである。……吾等軍務に直接關しない者の勤めは一人でも多くの支那人の民心を把握せなければならんと云ふことが吾等の責任にして又絶對的義務であると私は思ふ。」⁶³

59 支那派遣軍総司令部「派遣軍將兵に告ぐ（昭和15年4月29日）」アジア歴史資料センター（C12120065200）。

60 同上。

61 馬淵逸雄『断乎！東亜解放戦の完遂！—事変処理と民心建設の重要性』新東亜協会，1941年，47～48頁。

62 同上，57頁。

63 前掲『上海汗語』，286頁。

戦時期における内山完造の主に中国人の生き方を伝える数多くの「漫語」は、汪精衛政権下の中国民衆の「信頼と尊敬なくして民心の把握は斷じて不可能である」として日本軍部の国策に応じて発表されたものと捉えることもできる⁶⁴。

第二次上海事変直後の日本人の上海進出は、山村陸夫氏によれば「上海占領に対応した日本有力企業の進出、資本輸出の新たな展開」という状況にはほど遠いものであり、それは「一旗的な新興商人や周縁的労働者の大量流入であった」という⁶⁵。1913年から上海で生活を営み、上海を心から愛し、上海に骨を埋める覚悟でいた内山完造にとって、戦争利得を求めて日本占領下の上海へ殺到した一旗組の愚行は許せないものであり、「漫語」においてその醜態を次のように厳しく批判している。

「上海の日本人は其數が事變前の約三倍になつた。小學生丈けでも九千人になつた。それ丈に支那料理屋へ行く人が非常に増えた。……私は、其料理屋の中で度々、栄光ある此夜壺君、即ちへべレケやグデングデンの人に拝眉するのである。彼等は小便壺を罵られ笑われて居ることを少しも知らんであらう。……彼等の其行動によつて日本人の沽券を汚しつゝある者であることを記憶して貰いたい。」⁶⁶

「近頃頻りに見る一つの街の風景は東洋先生（日本人—引用者）と黄包車夫（人力車夫—引用者）と打相打である。イヤ打片打であるが私は至る處で屢々この風景を見る。黄包車の中にして車夫が逃げ回るのを東洋先生が追ひかけ廻つて居る、追いかける東洋先生が黄包車をヒツクリ返して盛んに蹴り飛ばして居るのがあるかと思ふと、何か餘りハツキリせん支那語らしきことを云ひながらやたらに車夫を擲つたり蹴つたりして居るのある。」⁶⁷

「私はこゝに於いて、更に吾等の過去を省み度いと思ふ。特に支那に在留する吾等の事を考へ度い。私は耳がタコになるほど、同文だ、同種だ、日支親善だ、日支は共存共榮だなどと聞いて來た。然しそれは、口さきの空念仏ではなかつたか……共存共榮は一つ一つの事業の重役から門番迄を、支配人から切符切迄を、技師長から工夫迄を全部日本人に獨占して終つては、支那人の飯の食ひ場所がなくなる。それでは共存にはならん。」⁶⁸

こうした「内山漫語」における在留日本人批判も、日本の占領地政策が「長期建設」の本格的段階を迎えるとともに、日本軍部は戦争景気を当て込んで激増した一旗組や軍属等の在留日本人の所業は「国策遂行を妨害しあるもの少なからず」と批判するよう

64 同上、287頁。

65 山村陸夫「アジア太平洋戦争期における上海日本人居留民社会（上）」（『和光経済』第48号第3号、2016年、5頁・16頁）。

66 前掲『上海霖語』、166頁。

67 前掲『上海汗語』、285頁。

68 前掲『上海風語』、305～306頁。

になるのと軌を一つにするものであり⁶⁹、「派遣軍將兵に告ぐ」においても次のように述べている。

「軍に跟随し同胞の先驅として大陸に進出した邦人中には或は宣撫に、或は看護に献身犠牲的活動をなし戦に殉じたもの、又現に活動をなしつゝあるものも尠しとしなが、日本人の面汚しも又尠からざる現状である。法に觸れたものの多い事は勿論觸れないものと雖も道德的に指弾せられるもの、甚だ多い現状は遺憾ながら之を認めざるを得ない」。「日本を信頼せよ、日本人と提携せよと如何に叫んでも支那人から心から日本を信頼し日本人を信用するに至らない限り一方的である。」⁷⁰

戦時期の「内山漫語」は、支那派遣軍総司令部「派遣軍兵に告ぐ」にあるように日中戦争を「聖戦」と呼び「敬、信、愛を以て両民族を永遠に結合せよ」と唱えた国策に明らかに共振・共鳴するところがある。当時、内山完造は「漫語」という形式で彼が上海で見聞・体験したところの多くのエピソードを通じて、「支那には支那の尺がある云ふ」こと日本人に語ってきた。内山の「漫語」は、秦剛氏が指摘するような「庶民感覚に根ざした人道精神」に裏打ちされており⁷¹、また大橋毅彦氏が指摘するように「その中国観や、中日両国の関係に注がれる眼差しが、“大東亜共栄圏”のイデオロギーが紡ぎ上げたカテゴリーカルの発想の枠からはみ出す側面を多分に持っていたこと」は否定できないであろう。⁷²しかし、「内山漫語」は日本軍の占領地政策の歴史的な文脈において見れば銃後の国民を戦争に動員するため、そして汪精衛政権を強化し占領地域の治安維持ための「日支提携」・「相互理解」の日本人向け宣伝の国策に＜政治利用＞されていた側面も見逃すことはできない。内山は『花甲録』において、「漫語は時々は一服の清涼剤であることもあった。私の戦争の見透しは最初から変わらない。悲観論の一本槍であった」と述べているが⁷³、戦後における語り直しを行っているものと考えられる。

戦前戦後を通じて「日中友好」を一貫して唱えていたと見られる内山完造が、戦時期にあって日中戦争に反対の立場を堅持していたかは必ずしも明らかではない。1937年の第二次上海事変についての「内山漫語」では「私は支那の政治とか軍事とかについて語る資格は無論ない」が、中国「庶民の生活といふ一點」から考えるとして次のように述べている⁷⁴。

中国国民政府が「段違いの軍備を持つて居る日本に對して、捨鉢的挑戦的態度を採

69 大本営陸軍部研究班「極秘・海外邦人ノ言動ヨリ觀タル国民教育資料（案）」（高崎隆治編『十五年戦争極秘資料集』第1集、龍溪書房、1976年）参照。

70 前掲「派遣軍將兵に告ぐ（昭和15年4月29日）」。

71 秦剛「戦時末期の上海で発行された『大陸』」（『早稲田文学』2018年初夏号、2018年4月、58頁）。

72 大橋毅彦「邦字新聞『大陸新報』瞥見」（『昭和文学研究』第39号、1999年9月、124頁）。

73 前掲『花甲録』、468頁。

74 前掲『上海漫語』、50頁。

つたことは支那経済の心臓である上海に自ら剣を突きさした自殺に均しい行為であつたと私は思ふ。……私は今次上海事変に對してもこの實例を引いて、庶民と共に支那の政治に抗議するに躊躇せないものである。かくて支那の政府は依然として庶民の幸福と云ふことから全く離れて居るものであることを學び得た共に、庶民を危機に丸ざらしにして自ら安逸と贅沢に平然たり得る矛盾に注意を促がさんとするものである。」⁷⁵

ここには「庶民の生活」を危機に晒し破壊する戦争への反対は語られているが、その責任は全面的に中国国民政府にあり、日本軍の行為は「暴支膺懲」の論理で語られている。ここには『花甲録』において見られる中国侵略を進める日本軍部への批判的な意識は全く見られない。

また、内山完造は第二次上海事変中のことを『上海漫語』において、「大山大尉事件に對する（日本海軍特別陸戦隊の一引用者）あの正々堂々の態度は、未だ曾て見たことのない立派なものであつた」とし、「日本軍艦から全艦の総砲撃をしたのだと云ふ。その知らせがあつてヤレヤレと胸をなで下ろし」、「日本人だと云ふ意識が、今更のように確かになる」という自らの＜帝国意識＞が昂揚した興奮状態を描いているが⁷⁶、その姿は日本軍を絶対的に支持したところの上海の「土着派」日本人居留民そのものにも見える。『花甲録』においても第二次上海事変の体験と上海引揚について詳述しているが、そのトーンは戦時期とは明らかに異なり「全中日戦争になった時に私は、『日本はこれで終いだ。自然に向かつて戦争を始めた』と考えた」とあり「悲観論」を語っているが⁷⁷、戦後の感情記憶が混入しているのでないかと推測される。

内山完造は『花甲録』において、大東亜文学者大会への参加の誘いを断ったことにより⁷⁸、戦時下の日本政府のお手盛りの日中文化交流に消極的であったかのような印象を与えている。一方で、内山完造は中国人友人である陶晶孫を「新文学運動の闘士」として『大陸新報』に登場させ「創造社の思い出」⁷⁹や「中国文学の現状を語る」⁸⁰と言った対談を行っている。内山は「ウソを云はない、ダマサない」を信条として本当の「日支文化交流」を行っていると考えていたので⁸¹、陶晶孫を『大陸新報』に登場させたことに他意はなかったのであろう。

「魯迅の友」として内山完造は日本占領下のおいても多くの中国文化人と交流して

75 同上、62～64頁。

76 「空襲下の上海を脱れて」（前掲『上海漫語』、所収）参照。

77 前掲『花甲録』、348頁。

78 前掲『花甲録』、420頁。尾崎秀樹は『花甲録』における「大東亜文学者大会」の記述は、1943年の第3回大会の誤りであり、中国文学者たちの名前の誤記を指摘している（『旧植民地文学の研究』勁草書房、1971年、44～45頁）参照。

79 『大陸新報』、1942年9月19～22日付。

80 『大陸新報』、1944年4月8～13日付。

81 前掲『上海霖語』、90頁。

いたが、それが対日協力者＝「漢奸」を生み出す契機となることには十分な注意を払っているようには見えない。それは当時、内山は「日支文化交流」を次のように捉えていたこととも関係するであろう。

「支那人も、今日程、日本について考へたことはあるまい。そして日本語を習ふ人が月々増して多くなつて居る。此れは日支文化合作の胎動であると思ふ。又、汪精衛先生を首班とする南京国民政府は、日本帝国政府の了解の下に、大東亜建設に提携して居る。此れは明らかに官界の文化提携でありまいか。民間の方では、色々の協會とか聯合會とか云ふものが熾んに活動して居る。宗教に教育に美術に醫術にと、未だ曾つて見ざる程活潑なものがある。」⁸²

要するに、内山完造が戦時期に携わった日中文化交流とは、日本政府と汪精衛政権の「官界の文化提携」を支える民間文化交流であり、それを通じて「一人でも多くの支那人の民心を把握せなければならん」というのが内山の覚悟であったといえよう。

おわりに

戦時上海における内山完造を考察することを試みる筆者のスタンスは、彼をネガティブに告発することにあるのではなく、日中戦争下における内山完造を等身大で描きたいという思いにある。それは、内山完造を戦争に「協力した」あるいは「抵抗した」という二項対立的な捉え方ではなく、「協力」と「抵抗」の狭間にある＜グレーゾーン＞に着目し、戦時上海を生き抜いた内山の実像に一步でも近づきたいということである。

この＜グレーゾーン＞は、日本の中国侵略によって重慶国民政府・延安共産党政権・南京汪精衛政権が分立したことより生まれた錯綜した中国の政治情勢を背景としていた。戦時期においても内山完造は「日中友好」を信念として生きていたが、その対象である「中国」そのものが何を指すのか曖昧な状態になっていた。内山完造が想定する「中国」とは、一般的に中国民衆を意味するものであろうが、当時の内山完造は汪精衛政権の誕生に日中戦争の終結を期待し、汪政権こそ日本が提携すべき「中国」であるという考えに大きく傾斜していたものと見られる。

内山完造が、中国人と日本人は「同じ血の流れの友」であると見なし、「日中の架け橋」になりたいと生涯を通して願望していたことは明らかであろう。しかしながら、日本軍部はこのような彼の願望を中国侵略のために＜政治利用＞したのであり、彼もこのことをある程度は自覚していたものと思われる。内山が日本軍部に＜政治利用＞される契機としては、本稿が検討したように支那派遣軍司令部嘱託となった太田宇之助と

82 同上。

の「老朋友」関係があるのでないかと推察される⁸³。

内山完造はその＜政治利用＞の代償として彼は上海居留民団「官選議員」に選出され、大陸新報社の「大陸賞」を受賞し、1944年には「日華親善」に貢献した「優良邦人」として日本大使館から表彰されたのでないかとも考えられる。こうして内山完造が戦時上海において「文化人」・「名士」として益々有名となるとともに内山書店も飛躍的に発展し、「単行本の取扱い、中支全体の日本人書店の取扱い数よりも、私の店一軒が遥かに上まわって居た」という盛況ぶりを呈した⁸⁴。

内山書店の店主であった内山完造は、魯迅をはじめ多くの中国の知友を持っており彼等をその家族を含めて親身になって世話をした。これは日本が上海を占領してからも同様であり、日本軍の弾圧から彼等を守ったこともあり、内山完造の「日中友好」の精神やキリスト教ヒューマニズムの発露であることは疑いない。しかし、一方で本稿が明らかにしたように内山完造は日中戦争が始まると、国策言論メディアに頻繁に登場し、「日中友好」を信じて国策プロパガンを担うものであり、彼には＜グレーゾーン＞問題が付きまとう。

83 内山完造と太田宇之助の関係を明らかにするためには、横浜開港資料館所蔵の「太田宇之助文書」（内山完造書簡を含む）を調査・検証することが必要であると考えますが、同文書は「未整理」という理由で未公開である。日本新聞博物館所蔵の「太田宇之助関係文書」は閲覧したが主に朝日新聞社関係者の書簡であり、内山完造関係のものを発見することは出来なかった。

84 前掲『花甲録』、401頁。

あとがき

日本大学通信教育部『研究紀要』第33号をお届けします。今回は、本年度3月末をもって日本大学通信教育部を退職される、真野一雄先生の記念号として、刊行することになりました。

真野先生は昭和58年6月に通信教育部に着任されてから、英文学担当教員として学生への教育・指導に当たられるとともに、英語史の研究者として、多数の成果をあげていらっしゃいます。また、温厚な性格で学生からの人気もあり、常に多くの学修意欲を持った人々が真野先生の授業を受けたいと望んでいました。ここに、ご在職中における先生の教学及び研究活動に感謝申し上げますとともに、そのご功績に深く敬意を表する次第です。

本号は、五本の論文と一本の研究ノートを収載いたしました。その内の二本は査読付論文で、外部の先生からもご投稿を頂いております。ご投稿頂いた先生方におかれましては、この場を借りて心より感謝申し上げます。

四学部八学科で学際的に構成される本学通信教育部は、一つの事象に多方面から専門的アプローチが可能です。今後も、充実した研究成果をこの『研究紀要』に収載され続けることを祈っております。

(雨宮 史卓)

研究紀要

第33号

令和2年3月31日 発行

(非売品)

編集兼発行人

川 又 祐

発 行 所

日本大学通信教育部
通信教育研究所

〒102-8005

東京都千代田区九段南4-8-28

電 話 03 (5275) 8890

印刷／日本フィニッシュ株式会社

JOURNAL
OF
DISTANCE LEARNING DIVISION
NIHON UNIVERSITY
No.33 Mar. 2020
CONTENTS

Research Articles

KONDO Kenshi and TAKATA Satoshi Miki Rofu and *Yamasaki Times*: probing their
relevance from a view of point in the present day

KIMURA Hajime Rokujo-no-Miyasundokoro is tied down to rumors

Research Notes

NABEMOTO Yoshinori In 17th century, Interpreters (*to-tuji*) in Nagasaki and Chinese
(*to-jin*) who came to Japan

Research Articles

INO Keiya Headlines in “Aeolus” –Text, Interpretation, Influence–

HORII Koichiro The Japanese People who were Conscripted and the Creation of a
Japanese Junior High School in Zhengzhou after the Founding of the People’s
Republic of China

TAKATSUNA Hirofumi Uchiyama Kanzo in Wartime Shanghai